
魔法少年の物語

灰色の野良猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少年の物語

【Nコード】

N4301J

【作者名】

灰色の野良猫

【あらすじ】

物語は知るものがない世界から始まる。

少年はチカラを得る。

少年は運命を変える。

少年は出会っ。

少女達は出会っ。

物語は少年と少女達の出会いによって変わって行く。

本編はA'sより始まります↓完結しました

Strikersは新規投稿してあります、『魔法少年の物語』
奇跡の神子』に移動してください

プロローグ（前書き）

文章とか時々変かもしれないや……

更新は遅いですがなんとか完成させたいです

感想・意見をお待ちしております

プロローグ

結局、残されたのはボクだけだった。

眩きは虚空に消え誰の耳にも届かない、悲しい訳ではない、ただ空から落ちてくる冷たい雨が妙に痛かった。

『想像具現化能力者』、通称『イメージプレイヤー』が発見されたのは五年程前だった。

度重なる戦争を繰り返し、進化してきた世界がたった一人の男によつて滅ぼされた、まるでお伽話の魔法使いのように『呪文』によつて様々な現象を引き起こし戦闘機を墜とし戦艦を沈めミサイルを消した。

悪夢とも思えるその男を倒したのは同じ能力に目覚め、この世界にたった一人生き残った少年だった。

少年は幼い頃から本を読むのが好きで想像力豊かな子供で、様々な物語を読みながら近代兵器や古代で使われた武器などの載った本、アクセサリや服の作り方が載った本、料理などの本を片っ端から読みあさった。

そんなある日、毎日のように戦争のニュースが流れるテレビにその男が現れた。

ライバルの隣国が一人の男に壊滅させられたという内容に国民は困惑し、国は隔壁を下ろし閉じこもった。

それから四年、国は長きにわたる閉ざされた環境のせいで不治の感染症が蔓延していた。少年は不治の病こそかかってはいなかったが、一年ほど前からろくな食事をとれずやせ細っていた。

国は次第に音を無くし、ついに少年一人を残して国は滅んだ。誰もいない閉ざされた国を見ながら少年は一つの事を『想像』した。

――物語にでてくる英雄なら、あの男を怖がらなくていいのに……。

少年が『想像』したのは、あらゆる武器を持ち如何なる敵も倒す最強の英雄、昔読んだお伽話にでてくる屈強な身体で鎧に身を包んだ英雄。

瞬間、少年の眼前に見たことのない模様が地面に描かれる。

それはこの世界で古代遺跡に描かれている『森羅万象・世界縮小図』。

過去、あらゆるモノの要素をまとめ、『世界』の真理を描いたとされるモノ、これを理解した者は万物を自在に操る事が出来ると遺跡には書かれていたそうだった。

その中心から姿を現す全身を蒼き鎧に包んだ騎士が現れる。片膝をつき忠誠を誓うその姿は夢にまで見た英雄そのものだった。

『我が創造主、願いは如何なる物か？』

重く、そして強い意思の籠った声が少年に問い掛ける。

久々の声に嬉しくなりながらも少年は答える。

「そとにいるわるいやつをたおして」

『御意に』

立ち上がる騎士、一点を見つめながら剣を抜く、白銀の刃は淡く輝き絶大な存在感を醸し出している。

『創造主、この空を覆う壁は壊してもよろしいでしょうか？』

「うん」

『では、創造主は少し下がってください』

騎士は剣を上段に構え、意識を集中する。

騎士の想像の元となった物語では、彼の剣は振れば千の敵を薙ぎ払い、突けば巨大な岩をも打ち貫き、掲げればあらゆる敵を白銀の雷光で焼き尽くすと書かれていた。

そんな伝説をもつ騎士の剣が振り下ろされる。

銀光に輝く雷は壁を貫き荒野と化した外界を焼く、長きにわたる戦争の傷跡すら生温い程の爪痕を残す。

その雷が唐突に消える、そこに立つのは黒い外套にみを包んだ男、驚愕の表情を浮かべこちらに歩み寄ってくる。

「いやはや、この世界の人間は一掃したかと思ったが……、まさか最後の国に私と同じレアスキルを持つものがいるとは」

男は懷から漆黒の宝石を取り出す。

「ラグナロク、セットアップ」

【バリアジャケット展開、ノーマルフォーム】

宝石は形状を変え先端に黒い宝石を付けられた杖となり、男は外套をそのままに中の服が変化する。

少年は直感で男が危険なことを感じ取る。

騎士はたしかに強い、だけれども目の前にいる男も強い。

――だから、この男に勝てる力が必要だ。

『想像』するのは巨大なドラゴン、如何なる攻撃を物ともしない勇者すら退ける竜の王。

少年の足元に再び浮かぶ『森羅万象・世界縮小図』、直径20メートルを越える陣から現れる巨大な銀色のドラゴン、身体は鎧で翼は剣のようになっていてる。

この国のシンボルになっている「剣竜・カラドボルク」、その剣竜の瞳が男を捕らえる。

「ば、馬鹿な……私ですら生命体の構築なぞできんというのに……」

男は広域次元指名手配犯である、レアスキル「シャドウ」と呼ばれるものを所有し、任意の特殊効果を自由に使えるもので、ミッドチルダではテロリストとして活動し、犠牲者の数も四桁に達している。

自然を操り、空間に穴をあけ質量兵器を飲み込み、国を凍りつかせ、焼き払い、雷で殲滅したこともあった。

それもこれも彼の魔法知識の産物である、

だが少年がおこなったのは、そんな魔法理論すら無視した「生命体の構築」、同種的能力を持つ男だからこそ分かった。

「勝てない……」

呟く、絶望感が彼の心を埋め尽くし震える手からデバイスを落とす。

剣竜の前に現れる環状魔法陣に男の保有魔力を上回る魔力が集束する。

少年は理解していた、自らの能力を、そしてこれから行う罪も。

「貴方は悪いことをしました、ボクもこれから悪い事をします」

聞こえないと分かりながら少年は告げる、心に刻み忘れないようにするために。

「ボクは貴方を許しません、自らの罪も忘れません」

少年は手を天に掲げ、男を見る。

集束を終えた剣竜は合図を待つ、そしてその時は訪れる。

「だから、この世界に住む者として貴方に終焉を……、『剣竜・カラドルク』よ、敵を討てっ！」

瞬間、爆発音と閃光が世界を支配する、男は蒸発するようにその姿を消滅させた。

「『騎士・アーサー』、ボクはどうすればいいと思いますか？」

能力解放のせいなのか、彼は様々な知識が流れ込んできていた。

『創造主のなさりたいように、我々は貴方に付き従い貴方をお守りします』

剣竜も同意するように小さく鳴き声をだす、少年は苦笑しながら空を見上げる。

空から冷たい雨が世界中で亡くなった者達の涙の変わりというように降り出した。

「結局、残されたのはボクだけだった」

少年は呟く、決意を固めるために。

「だから、この世界で亡くなった皆より長生きしないかね」

少年の足元に現れる「森羅万象・世界縮小図」によってこの世界から旅だった。

プロローグ（後書き）

次回はいつになるかは分かりません

少年の名前は意図的にのせてないだけです

次回は地球へと物語は移ります

第一話（前書き）

一応第一話に入ります

ちょっと短いですがし駆け足です

実はノープランで作ってます、いつか止まりそうですが恐いですが頑張
っていきます

第一話

ボクが降り立ったのは海の上、今だに剣竜の背中に乗っているボクは周りを見渡し首を傾げた。

「あれ？」

慣れ親しんだ硝煙や火薬の臭いがしない、世界が違うのは知っているけどここは戦争がないのかな？

「うーん、アーサーとカラドボルクは隠れてて、ボクみたいなチカラを持つてない人ばかりだと思おうし目立つから」

『御意に、呼び出しには即座に参上します故』

騎士と剣竜は陣に吸い込まれるように消え、変わりに作った船の上を下りる。

船を動かし遠くに見える島へと向かう。

空は星に包まれている、誰もいないのを感じながら船を港に寄せ地に立つ。

「戦艦もないし監視もない、やっぱり戦争はないのかあ」

安心して歩く、街は寝静まっており静かなものだ、平和な街をあるいて行くとビルが建ち列ぶ場所にでる、周りの風景を見ていると突然周りから人の気配が無くなる。

「これは……？」

周りを見渡しても妙に色褪せた世界があるだけでよく分からない。

嫌な予感がして直ぐに「想像」する。

「想像」するのは身を守り天を自在に飛ぶための翼、そして王者が纏う黄金の甲冑、そして騎士王が持っていたとされる『星剣・エクスカリバー』を持つ。

無言で周りを警戒する、この世界はたしかに平和みたいだけど、あの男やボクみたいはこの世界にくる人だっているはずだ。

そして、背後から迫る気配に剣を振る。

剣に切り裂かれ消える鉄球、油断しないように剣を構え直して次の攻撃に備える。

昔からよく大人から『神童』と呼ばれていた、自分では分からなかったけど、どんな事でも少しやれば大抵の事はできたからそういう物だと理解していた。

実際今も剣を持つただけでどうすればいいか、何となく理解できる。

「でやあああああ！」

「っ！」

構えの死角から鋭い一撃がくる、剣では間に合わない、ならっ！

「何っ!？」

死角に向かつて一歩踏み込みながら体勢を低くし避ける、頭の上を何かが通過するのを聞いてから、溜めた足のバネを使い剣を振るが、すでに後退していて手応えはなかった。

攻撃してきた敵の方を見ると、赤いドレスみたいな服を着た女の子がハンマーを構えてこちらを睨んでいた。

正直、目の前にいる女の子は見た目に似合わない重圧を感じる。歴戦の勇士だった亡き父にいた雰囲気がある。

「デメエ、何モンだよ。アタシの攻撃を簡単に防ぎやがって」
「……」

目は鋭く橙色の髪を三つ編みにしている、頭にかぶっている帽子にはウサギみたいのがついていた。
ちよつと目つきが悪いけど……。

「可愛いですね」
「なっ!？」

思ったことを口に出してしまったみたい、なんだか女の子の顔が赤く染まっていく。

あれ？ 何か変なこと言っただけかな？

「な、か、な、いいいっ!？」
「えーっと、なんでかわいいなんていっているんだ……ですか？」

何度も頷く女の子、ハンマーを抱きしめ恥ずかしそうに視線を逸らす。

「理由なんてないですよ？ ただ可愛いから可愛いと言っただけですから」

「……っ!？」

俯いてしまう女の子、耳まで真っ赤にしながら何かブツブツと呟いている。

首を傾げて見守っていると遠くから射るような視線が突き刺さる。

「アーサー、守ってください」
『御意』

地面に描かれる「森羅万象・世界縮小図」、その中心から現れる蒼き鎧に身を包んだ騎士が現れる。

アーサーは剣を片手で持ち視線が来た方向を睨みつけ待つ。

「……分かつていると思いますけど、傷つけないであげてください」
『創造主のお言葉通りに』

同時に迫る気配、その方向を見ると騎士が着る軽鎧を身につけたピンクの髪をポニーテールにした女性が剣を構え突撃してくる。

「紫電一閃！」

女性の攻撃を正面から受け止めるアーサー、女性は驚きの表情と共に後退し女の子の隣に立つ。

「何をしているヴィータ」

「シ、シグナム……、何でもねえ……」

ふむふむ、三つ編みの子がヴィータ、ポニーテールの人がシグナムですか。

「何かされたのか？」

「何もされてねえけど、……っていわれた」

「よく分かんが気を引き締める、あの少年の護衛は強い」

話ながらも油断無くこちらを睨みつけてくる。

「アーサー、下がってください」

『しかし創造主……』

「話してみたいんです、アーサーがいると警戒されるみたいですか

ら」

『御意に』

アーサーを見送り、身を包んでいる甲冑や武器を消して二人を見る。

「話ませんか？　ボクはこの世界を知りたいんです」

武器を消した事に二人は驚いてる、確かに敵と思える相手に武器なしなのは辛いけど、カラドボルクを呼び出してしまえば離脱は簡単、それに女性に剣を向けるのは気が進まない。

「ボクの名前はソラ、別世界から来ました。　お話を聞かせてください」

第一話（後書き）

感想・ご意見・ご質問をお待ちしております

というか、説明の回を作った方がいいんじゃないかな？

設定など（前書き）

とりあえず現段階で決まっている設定などを載せてあります。

設定など

作者「えっと、まずは謝罪いたします

設定もなにもすっ飛ばして話し進めようとしてすみませんでした」

ソラ「今回はボクについての設定を載せていきますね」

名前：ソラ・フォード

年齢：9歳

性別：男

身長：なのは達より低い

魔力：S＋ランク

魔法：レアスキル「想像具現化【イメージクリエイト】」

想像を現実へと具現化する能力、ソラの限界具現化質量は現在は

【剣竜・カラドボルク】

魔力使用は創り出す時と呼び出す時のみ、騎士や剣竜自体にもリ
ンカーコアが存在するため魔力消費はない

基本的に「戦闘」に適したモノを創り出す

創り出されたモノにも自我や知性はあるが使い魔と同じようなもの、
精神リンクはない

戦闘スタイル：

どんな武器も扱えるのだが戦闘経験が豊富な相手では見切られやすい

「森羅万象・世界縮小図」は創り出すための専用魔法陣である

ミッドチルダ・ベルカ式を使用はできないが使用する存在を創るこ
とはできる

作者「正直、立て籠もって創り出した騎士とか剣竜をに任せれば大抵の敵は殲滅可能、でも基本的に優しい性格だからねえ」

ソラ「さすがに進んで誰かを傷つけたいとは思いませんよ」

作者「非殺傷設定も現段階ではないからね」

ソラ「使っているのは本当の武器ですからね」

作者「で、見た目は」

髪：白

瞳：深紅

髪型：ポニーテール

体格：華奢

作者「ものっそいよわそうに見えるけど強いです」

ソラ「持久力ないですけどね」

作者「最後に【森羅万象・世界縮小図】の形というか模様なんです
が円形の陣の中、中央にセフィロトと逆セフィロト

右に太極図・五行思想

左に六芒星

となっています」

ソラ「なんかいろんなの混ざってますね」

作者「……うん、実際絵にはにくい形だね」

ソラ「じゃあ今回はこれくらいにしましょうか？」

作者「だね」

ソラ「ではまた本編で会いましょう」

設定など（後書き）

これ以外に質問などがありましたら感想などで書いてください。

第2話（前書き）

今回は二話のヴィータ視点ですね

話の間隔はこれくらいでいいのでしょうか？
それとももっと長い方がいいんでしょうか？

第2話

あたしは最近時々現れている巨大な魔力を探っていた、いるようないないような曖昧な感じだったけど絶対いるのはわかってる。

「大物見つけ！ しかも二人か……なら」

デカイ魔力を狙うのがいいだろう、この感じならかなり頁を稼げるはずだ。

「アイゼン！」

【シュワルベフリーゲン！】

様子見の為に三つ打ち出してから、自分も飛んで向かう。魔力だけならあたし以上、今まででの中でも一番の魔力をもっている。

「それでも……ベルカの騎士が一对一で負けるわけがねえ！」

スピードを上げて対象を見つける、型はまあまあだがあたしから見ればまだまだ、一撃当てて蒐集する。

「でやああああああ！」

「っ！」

咄嗟に反応した相手、勘がいいみてえだが、やっぱり戦い慣れないみたいだな。

真っ白な髪をシグナムみてえにしてる、気迫はないし年齢もまだ幼い。

こちらをじっと観察している、変わった騎士甲冑に羽がゲームに

でてくる天使みてえだ。

一応揺さぶりかけてみつか。

「テメエ、何モンだよ。アタシの攻撃を簡単に防ぎやがって」
「……」

反応はなし、動揺もしてねえな。 つうか、聞いてねえのか？

「可愛いですね」
「なっ！？」

思わず声を上げてしまっ、なんであたしなんか？ つうかいきなり笑顔で敵に対してこんなこと言うか！？

「な、か、な、いいいっ！？」
「えーっと、なんでかわいいなんていつているんだ……ですか？」

どもっちまったけど聞き取ったみてえだ。

「理由なんてないですよ？ ただ可愛いから可愛いと言っただけですから」
「~~~~っ！？」

ダメだ、顔をまともにみれねえ、顔は熱いし心臓の鼓動が早い。アイゼンを抱きしめて何とか逃げ出さないようにするのが精一杯だ。

頭の中がグチャグチャでわけわかんなくなる、さっきから思念通話が届いてるけど答える余裕がない。

「何をしているヴィータ」

隣から聞こえたシグナムの声が聞こえてようやく現実に戻される。

「シ、シグナム……、何でもねえ……」

「何かされたのか？」

「何もされてねえけど、……っっていわれた」

小さく濁したけど、やっぱり顔が熱くなる、シグナムなら茶化さないだろうけど恥ずかしくて上手く言葉にだせねえ。

「よく分かんが気を引き締める、あの少年の護衛は強い」

話ながらもシグナムの方は対象を睨みつけてる、そいつの隣にはいつの間にか見慣れない甲冑を着たやつがいた。

「アーサー、下がってください」

『しかし創造主……』

「話してみたいんです、アーサーがいると警戒されるみたいですから」

『御意に』

アーサーとかいうやつが変な魔法陣に消え、対象も身を包んでいる甲冑や武器を消してあたし達を見る。

「話ませんか？　ボクはこの世界を知りたいんです」

武器を消した事に驚く、対象は見とれるくらい綺麗な笑顔で。

「ボクの名前はソラ、別世界から来ました。　お話を聞かせてください」

とか言い出した。
やべえ、顔があちい。

第2話（後書き）

作者はヴィータの照れてそっばむく絵が大好きです

フラグを誰に立てていくかまだ決まってるないので

「この人とフラグを！」

という方はどうぞ感想に書いてください

作者はもう一人決めているんですけどね？

第3話【歯車】（前書き）

味気無かったのでサブタイトルを変更してみました

今回はなのはとユーノとの出会いですね

第3話【齒車】

ボクは何か間違えたんでしょうか？

どうもヴィータさんが目を合わせようとしてくれないし、シグナムさんも何とも言えない表情になって視線を微妙にずらしている。

ボクらの間は約5メートルくらい離れている、夜の暗さのせいで微妙に表情が読み取れない。

「あの、聞かせてくれないんですか？」

「……………」

困った、二人とも聞いてないみたい。

どうしようか迷っていると背中に悪寒が走る。 転がるように避けて、自分がいたところを見ると、空間に手が生えていた。

白くて細い手は多分女性のモノ、ちょっとしたホラー映画みたいだ。

「……………」

空中に浮かぶ手が右往左往してから引っ込んでいく、何とも言えない微妙な出来事に首を傾げる。

「行くぞ、ヴィータ」

「……………ああ」

ボクが声をかける前に二人がすごい速さで飛んで行ってしまふ。

あゝあ、どうしようかな？

Side エイミィ

「艦長、この男の子はどうしましょうか？」

「そうね……、使用した魔法も含めて色々聞かなければいけないしね？　なのはさんには連絡してあるからすぐに接触できるはずよ」

私が出したお茶に砂糖を入れながら答えるリンディ艦長、見慣れてはいるんだけどキツイなあ。

「じゃあクロノ執務官にも伝えておきますね」

「ええ、お願い」

一応なのはちゃんにも連絡入れてあるからもうすぐ接触するはず……か、民間協力者ではあるけどなのはちゃんなら問題を起こさずに接触できるだろうし。

「エイミィ、なのはは無事だったの？」

「あ、フェイトちゃん、大丈夫だったよ」

「そう、よかった」

心配そうな表情から明るい表情になる、ホントにいい子だなあ。

「でも現地の男の子が被害にあっただんだよね」

「そうなの？」

「うん、しかも見たこともない魔法陣だったよ？
多分召喚系だと思うけど対人戦闘もかなり強かったみたいだからオ
ールラウンドな魔導師なんじゃないかな？」

ちよつと不安が残るけどあの数値を見るとね。

推定魔導師ランクS、魔力ランクSS、なのはちゃんたちでは届かず、クロノくんも苦戦しそうなデータだった。
何事もなければいいんだけどな。

Side ソラ

一人どうしようかと悩んでいると足音が聞こえて振り向く、走ってきたのは同じ年くらいの栗色の髪の子。

「あ、あの！ 私の名前は高町 なのはです、事情を聞いてもいいですか？」

「あ、はい。 ソラ・フォードと言います、はじめまして」

とりあえず、なのはさんからは悪意を感じなかったから挨拶を返す。

なのはさんの首飾りが点滅している。

【私はレイジングハートです、以後お見知りおきを】

「……アクセサリーが喋るんですね？」

レイジングハートと名乗った宝石を見た瞬間に、少し警戒心を強める。

たしかボクらの世界を破壊していた男も似たようなモノを持っていた、もしかしたらあいつの仲間かもしれない。

「あれ？ ソラ君も魔導師じゃないの？」

「うーん？ 魔法使いみたいなことはできるよ？」

「「「「「」」」」」」

あれ？ 話が微妙に噛み合っていない？
とりあえずなのはさんは悪い人じゃないのは確定だけど。

Side なのは

ソラ君はしきりに首を傾げて悩んでるみたい、でも魔導師じゃないならバラしたらいけなかったのかな？

でもエイミィさんからの通信だと魔導師だって言ってたし。

「あの…、事情を聞くために…来て欲しいんですけど、いいですか？」

少し不安だけど、リンディさんなら私より上手くお話できるはずだし。

「どこに？」

少し冷たい、怖い声で聞かれて思わず震えてしまった、目が熱くなつて涙がこぼれそうになる。

「あつ！ ゴメン、泣かないで？」

「あう……」

「本当にゴメンね、つい警戒心から殺気をあててみたんだけど……」

指で空中に円を書きながら困った表情をしているソラ君。

私は涙を我慢して鼻を鳴らして堪えようとしている、けど。

「んっ、よし」

ソラ君が何か思いついたのか手の平を私に見せながら、片目を閉じる。

「おいで、唄う森の小鳥たち」

手に描かれる私の魔法陣とは全然ちがうその魔法陣から、何匹も小鳥が出てくる。

赤、桃、青、緑、紫、白、黒、黄。

色とりどりの小鳥たちがソラ君の腕や頭に乗って、音楽隊のように鳴き声を合わせる。

懐かしいような、そんな唄に私は聴き入ってしまった。

S i d e ソラ

ふう、ビックリした。

まさか無意識に出た殺気に反応して泣き出すとは思わなかった。

今回「想像」したのは、小さい頃読んだ童話、「迷子の森の合唱団」にでてきた「宝石色の小鳥達」。

迷子の子供を元気づける小鳥達で、唄っているのは「泣かないで」。

「それで、ボクはどこについて行けばいいんでしょうか？」

「にやつ！ あ、あのね、もうすぐ迎えが来るはずだから」

目元を拭いながら微笑みかけてくるのはさん、優しい心の持ち主だなあ。

「なのは！ 遅れてごめん」
「ユーノ君！」

振り向くと薄い金色の髪の子が走り寄ってきた。

「はじめまして、ユーノ・スクライアです。
これから僕の転移魔法とアースラの転移魔法を合わせて行きますから」

「ソラ・フォードです、よろしくお願いします」
ユーノ君か、同じ年くらいかな？

「なのはもついて来て、今回はかなり危険みたいだからなのはも保護対象なんだって」
「うん」

こうして、ボクは「アースラ」という場所に向かうことになった。
この後に起きる様々な事件の始まりにして、運命の歯車がズレ始めた第一日目だったのかもしれない。

第3話【歯車】（後書き）

うーんと、アニメでいう一話だったはず

なのはが襲われずに主人公が襲われて蒐集されず、守護騎士達は焦ってます

作者はアインズが大好きなので現在どうしようかと苦悩中

【ソラ君の】一万アクセス記念【一問一答】（前書き）

祝！ 一万アクセス！！

皆様のおかげです

今後もよろしく願いします！

【ソラ君の】一万アクセス記念【一問一答】

作者「一万アクセス記念、ソラ・フォード一問一答お〜」

ぱちぱち ぱち

ぱち

作者「……あれ？ ソラ君？ ソラく〜ん？」

……しーん

作者「あれ？？？」

ソラ「呼びましたか？」

作者「よかった……いないかとおもったよ……」

ソラ「作者さんが用意してくれてた服を選んでいたんですよ」

作者「え？」

ソラ「でもどれもこれも可愛かったので悩んでたんです」

現在ソラ君はフードコートで中の服はわからない。

作者「チヨイマチ、あれは君用じゃないよ？」

ソラ「え？」

作者「たしかにこのあとの展開では着させようと思ってたけど」

ソラ「ならいいじゃないですか」

フードコートを脱ぎ捨てる、着ているのはゴスロリ服、ベージュの黒白の配色

作者「嫌がる所か進んで着るのか」

ソラ「ボクらの世界だと男性も上流階級だところという服着るんですよ？」

作者「あ、そうだった」

「魔法少年の物語」

一問一答！

Q・好きな食べ物は？

A・甘いもの

作者「ソラ君、本当に男の子？」

ソラ「作者さんもすきじゃないですか」

Q・嫌いな食べ物？

A・特にない

作者「偉いねえ」

ソラ「好き嫌い言つてたら死んじゃう環境でしたから」

Q・好きな女の子のタイプは？

A・よくわからないです

作者「そーなのかー」

ソラ「うん」

Q・チートいけない

A・生きるためならなんでもします

作者「……」

ソラ「……（ニコ）」

Q・趣味は？

A・読書と実践

作者「料理するもんね」

ソラ「ネズミは意外と食べれました」

Q・夢はなんですか？

A・平和な世界で暮らすことです

作者「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

ソラ「気にしないでください作者さん、不幸がなければ幸せもありません」

作者「今回はこれくらいだね」

ソラ「家庭用カメラ一台に椅子とテーブル、二人だけって寂しいですよね」

作者「……誰か他の作者様にお願いしようか？」

ソラ「ですね、ボクも見聞を広めたいですし」

作者「一応ソラ君も出張可能なので依頼があれば感想などで書いてください」

ソラ「作者さん、時間です」

作者「おっと、ではまた次回」

ソラ「しーゆーあげいん」

第4話「ようこそ！ アースラへ！」（前書き）

たくさんの応援が作者の力になります！

今回も短いですが新設コーナーとして「あとがき」があります

ゲストにTODA様の作品「なのはSS・Freedom」より
安部隆浩さんが登場します

第4話「ようこそ！ アースラへ！」

今は亡き元世界の皆さん、ボクは元気です。

でも「アースラ」という船に連れて来られて世界について疑問が増えました。

まさか大型宇宙船に連れて来られるなんて……これ創れないかなあ？

「ソラ君？」

「なんですか？」

「その服……どうしたの？」

あ、暗がりだったから分からなかったけど結構ボロボロだなあ。

前の世界から着続けているし、かなり汚れている。

むう、たしかにみつともないなあ。

「着替えたいので何処か部屋ないですか？」

「それなら僕の部屋に案内するよ」

Side ユーノ

通信を繋げてリンディ艦長に事情を説明すると、すぐに承諾してくれた。

ついでにシャワーも貸してあげてくれとの事で、今フォード君がバスルームで身体を洗っている。

「ユーノさん、今から会う方って上流階級の方なんですか？」

「え？ たしかに時空管理局ではエリートの家系だけど……、どうして？」

「なら相応しい恰好をしなくちゃいけないですね」

とりあえずボロボロになった服を袋に詰めて、新しい服を置いておく。

僕の私服だけど着られるかな？

バスルームからシャワーの音が聞こえなくなって、しばらくすると、扉の開く音がした。

「あ、服用意してお……いた……っ！？」

「必要ないですよ？ 今さっき『創り』ましたから」

フォード君（？）が着ていたのはドレスみたいな服、紫の生地に金の刺繍が入った長袖、白いロングスカート（イメージは型月のイリヤ）。

「どうしたのユーノさん？ 一応正装したんだけど？」

「ま、待って！ 君は男だよね？」

「そうだけど？」

訳が分からない、なんで男であるフォード君が女装してるんだ！？ 似合ってるけどそれが正装って一体？！

「？ ボクらの世界では貴族や少将以上の家系ではこういう服ですよ？」

苦笑しながら「変な人」と言っている。

いや、似合ってはいるんだけど……。

S i d e リンディ

とりあえず連れてきて貰ったのはいいんですけど、男の子じゃなかったのかしら？

一応そういう文化らしいから何とも言えないんだけど。

「はじめまして、ソラ・フォードです」

「初めまして、私は時空管理局・次元空間航行艦船『アースラ』の艦長を勤めるリンディ・ハラウンよ」

頷き握手を求めている、彼は警戒した様子もなくそれに応じる。

この子については時空管理局のデータベースにヒットする情報はなし、同じくなのはさんの住む地球のデータベースにもなし。

最近起こった管理外世界の事件にも、彼のような魔法陣を使用する世界は確認できず。 まずは疑問解消からね。

「まず始めに、ソラさんが使っている魔法について教えてくれないかしら」

「いいですよ」

30分ほどの会話の内容をまとめると。

1、知識・経験に左右されず、イメージに通りの存在の創造をする魔法

2、基本、物理破壊の設定しかない

3、異世界の住人で生き残りはソラさんのみらしい

4、その世界で彼のような魔法はなかった

5、魔法陣の形は彼の世界の古代遺跡に同様のものがある

と、これくらいかしら？

魔力資質を調べたら計器が壊れてしまったし、魔法知識はほとんど皆無。

感覚と直感で組まれた魔法形態で、デバイスもオーバーロードしてしまい、術式のサンプリングは失敗。
これはどうしたものかしら？

S i d e ソラ

ミッド式の魔法、魔法理論、デバイス、使い魔、ロストログア。
お伽話のような話が現実になっている、いつも読むだけだった世界にボクはいる。

色々試していたリンディさんが頭を抱える中、ボクは色々と「想像」する。

ミッド式を使う魔導師、ボクの先生になるような、どんな魔法も使える人がいいな、姿は肩にのる猫がいいな？
現れる『森羅万象・世界縮小図』、その中から出てきたのは子猫くらいの大きさのクロネコ、手には木の枝のような杖が握られている。

『呼ばれたから出てきたぞー』

『はい、よろしくお願いします』

ボク以外の人達が呆然とする中、猫魔導師と挨拶する。

『いちおー名前はないから適当によんでくれい』

『じゃあネコ先生ですね』

ネコ先生を抱き抱えてクルクル回っていると、空中にモニタが展開して女の人写る、かなり慌ててみたい。

<リンディ艦長！ 船内にAAAランクの反応が出現しました……た？

ど、どうされました？>

「気にしないで、この子がどういう存在かわかったただけだから」

頭を抱えたリンディさんがお茶に砂糖を追加しながら答えてる、それじゃ砂糖の味しかしないと思いますよ？

ネコ先生とその光景をみていると「くう」という音がボクのお腹からでる、よく思い出すと最後に食べ物を口にしたのってかなり前じゃなかったっけ？

「……休憩にしましょうか？ ソラさんもお腹が減っているみたいですすし」

「すみません」

苦笑しながら「いいのよ」と、頭を撫でてくれたリンディさんはお母さんみたいでした。

あとがきこゝな（仮）

ソラ「あとがきこゝな、ここでは……次回予告？ とか、ゲストとのお話がめいんです？」

作者「ソラ君、カンペ無しでも言えるようにしような？」

ソラ「がんばります

では、今回のゲストは『なのはSS・Freedom』より安部隆浩さんです」

隆浩「来たぜ、つか待合室に剣竜が普通に寝てたぞ？ 流石のいい
らも写メを撮っちまった」

ソラ「番犬がわりなんです」

作者「すみません、急造した建物なんで剣竜に資材運搬してもらっ
たんです」

隆浩「あ、お土産のケーキだ、半分はおいらが食っけど」

ソラ「わあああ」

目を輝かしてケーキを凝視

作者「とりあえずコーヒーです」

隆浩「しかし、自分より強い式とかチートだよな？」

作者「いやいや、某金色の魔物のシンクラスを撃ちまくるあなたの
方がかなりチートだと……」

隆浩「何を言う！ おいらはか弱い子羊なんだ！ チートなわけな
いじゃない！」

ソラ「みまみま」

ケーキ三分の一制圧

作者「（どっちからツッコミ入れればいいんだろ？）」

隆浩「がつがつ！」

ケーキ残りを制圧

作者「はやっ！？」

ソラ「次回予告行きますね？ あ、隆浩さん、カンペです」

隆浩「おう

チートな力を自重しないお子様ソラが、アースラの切り札と模擬戦をすることになる」

ソラ「ボクはスプラッタな映像にすることなく戦えるんでしょうか？」

隆浩&ソラ「次回！

エースを墮とすジョーカーに、レディー……ゴー！」

ソラ「あ、お土産の水羊羹と日本帝國陸軍四式戦闘機『疾風』です」

隆浩「おいらにはこれに裏があるようにしか見えない」

TOUDAさん、ありがとうございました！

よかったですうちのソラ君も使ってやってください！

第4話「ようこそ！ アースラへ！」（後書き）

次回あとがき予告

次のゲストは秋風様の作品「蒼天の騎士伝説」より出演予定です

第5話『エースを墜とすジョーカー』（前書き）

実はソラ君のファミリーネームを間違えてたので修正しました

今回もあとがきにゲストが来てくれています！

今回から空白期・STSに登場させるオリジナルキャラクターを募集します

名前・年齢・使用魔法・容姿特徴・デバイスなどを感想などで書いていただければ空白期・STSで使わせていただきます

チートもある程度可能ですのでドンドン応募してください

第5話『エースを墜とすジョーカー』

食事を貰ってお腹がいっぱいになりました。

ネコ先生は食べなくても大丈夫だけど、肉の脂身を美味しそうに頬張っていました。

久しぶりの満腹感に涙が止まりませんでした、リンディさんが抱きしめてくれてなんとか落ち着けました。

「艦長、その子は？」

「保護した被害者よ」

歩いてきたのは黒髪の男の子でした、雰囲気からしてボクより年上だと思う。

「ソラ・フォードです」

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ」

クロノさんはリンディさんの息子さんで、このアースラの切り札と言われているらしい。つまり、このアースラで最も強く経験豊かということ。

「あの、クロノさん」

「なんだ？」

「模擬戦をしてください」

クロノさんは目を丸くしてリンディさんを見る、リンディさんは少し考えながら。

「そうね、ソラ君の実力も知りたいしちょうどいいんじゃないかし

ら？」

「許可が下りたなら僕が拒否する理由はない」

ボクは内心でホッと胸を撫で下ろした。

S i d e クロノ

アースラ内部の訓練施設、外壁に耐魔法処理を施されSSランクまでの魔法に耐えられる構造になっている。

今回の相手はソラ・フォード、なのは達と同じ年で魔力資質はなのは達以上、体術はそれなりにできるらしい。召喚士と同じく召喚を同時しようする可能性が高い、現在確認されているのは騎士タipesのみだが他にもいるかもしれないな。

データは少ないが、結局は動きのいい素人として認識しておくか。

「ルールは簡単、僕に一撃当てるか捕縛するかで終了だ、ソラは気絶または捕縛で終了、ただし制限時間として30分を設定する」

肩に乗っているネコと話しながら何か相談しているソラ、彼自身は魔法初心者だから使い魔であるあのネコがどれほどの力を持っているかがキーポイントだな。

S i d e ソラ

『では、非殺傷設定の構築はわかったかな？』

「はい、ネコ先生」

開始の合図を待つ間、ネコ先生に簡単な射撃魔法と誘導弾の魔法を教えてもらった。

今回は前回の戦闘で使った重厚な甲冑ではなく、クロノさんが着ているバリアジャケットを参考に創った服を見に纏っている。

見た目は赤い外套に黒いインナー、ズボンは黒。

性能は甲冑と同等以上、それでいて軽いし身動きも楽だ、武器に右手に魔導式ハンドガンと左手に魔力刃形成型ソードを持つ。

<模擬戦開始10秒前>

ネコ先生は胸ポケットに入ってサポート、現在の手札は、直線弾・誘導弾・魔力刃による斬撃。防御はシールドとバリアの二つ、フールドはまだ無理。

とりあえず、できるかぎりを尽くしましょう。

<開始まで、5...4...3...2...1...スタート!>

開始と共に牽制の直線弾を三発、放たれた魔法弾をクロノさんは余裕を持って回避、お返しと言わんばかりに直線弾を五発こちらに放つ。

【スティングガレイ】

杖の声と共に迫り来る高速の光、それを左手に持つ魔力刃で切り払う。

威力自体は大した事はなく、簡単に斬れた。

「やるな、ではこれはどうだ？」

【ステインガースナイプ】

曲線を描いて迫る魔力弾を紙一重で回避、右手に持つハンドガンから直線弾を放ち誘導弾を撃ち落とす。

クロノさんはまだ小手調べといったところ、じつくりとボクを観察しているみたいだ。

なら、そろそろボクも攻めてみよう。

Side クロノ

手に持っている銃から放たれている魔力弾、構成は中々で狙いもいい。

ただやはり経験不足というのが否めないな、ステインガーレイを斬った時は驚いたが、そこから反撃が来ないのはやはり素人だな。

近接戦闘技能はだいたいAランク、射撃魔法AAランクといったところか。

しかし、射撃魔法を一々撃たなければならないのはマイナスだな。

「魔導ハンドガン及び魔力刃形成型ソード破棄、天の翼、魔導師の剣を具現」

ソラの背後に現れる見たこともない魔法陣、これが彼のチカラか。彼の背中から翼が生える代わりに外套が消える、そして両手に持っていた武器が消え背後から出てきた剣を構える。

剣はアームドデバイスに似ているが、細部に装飾が多いため芸術品にも見える。

さて、一体どんな事をしてくれるのかな？

S i d e ソラ

翼を出した時邪魔になった外套を破棄し終え、手に持った剣の感触を確かめる。

射撃魔法はだいたい理解したし、魔力刃形成も理解した。

バリアとシールドはこの「天の翼」が代わりになる、デバイスの代わりはこの「魔導師の剣」。

さあ、反撃しましょう。

「エンゼルシエル……レディー……」

キーワードと共に地に描かれるミッド式魔法陣、そして空中に浮かぶ九つの魔力弾、それぞれに加速用の環状魔法陣もついている。

「ゴー！」

剣を振るとそれに合わせて九つの魔力弾がクロノさんに向かって飛ぶ、それを冷静にバリアで防ぐクロノさん。でも、それは悪手ですよ？

「……ちつ、誘導制御型か！」

何度もクロノさんに向かっていく魔力弾にクロノさんが顔をしかめる。

片目を閉じ、次の手を考える。

「ステインガースナイプ！」

しかし、クロノさんはバリアを維持したまま誘導弾を発動、一発の魔力弾にボクの九つの魔力弾は呆気なく消される。

「これで終わりだ、ブレイズキャノン！」

術後硬直しているボクに対して砲撃が迫る。

翼で防ぐには少し強度が足りない、なら、少し反則気味ですが、「想像」しましょう。

「想像」するのは巨躯の守護者、鋼鉄の身体を持つ神の怒りを受けきった最強護り。

「巨神・ヘラクレス！」

眼前に迫る砲撃とボクの間に見える巨大な身体、全長5メートルほどもある機会仕掛けの騎士。

ボクの世界で未完成に終わった大好きな漫画の召喚獣だ。（イメージはFF9のアレキサンダー翼なし）

「は？」

クロノさんは啞然とした表情で固まっている。
チャンスですね。

「ヘラクレス、撃ってください」

『砲撃、ギガインパクト』

ヘラクレスの腕に現れる環状魔法陣、拳が光り魔力が溢れる。

『ファイア』

無機質な音声と共に放たれる極太の閃光にのまれ、クロノさんが撃墜された。

あとがきこゝな（仮）

灰猫「アースラの切り札撃墜の回、非殺傷設定を覚えてなかったら蒸発してたなあ」

ソラ「傷つける心配がほとんどないので安心して撃てます」

灰猫「（やばい、なのは以上に魔王の資質あるかも）」

直人「お邪魔するよ」

マリカ「失礼します」

ソラ「直人さんに……綺麗なお姉さんです」

マリカ「／／／」

灰猫「あ、いらっしやい

今回のゲスト『魔法少女リリカルなのはStrikers』蒼天の騎士伝説』より、井上直人さんとユニゾンデバイスのマリカさんです」

ソラ「よろしくです、マリカさん」

マリカ「は、はい（ストレートで素直な子ですね）」

直人「しかし、本当に待合室に竜がいるんだな……」

ソラ「あ、許可なしだと威嚇で収束砲撃を撃ってきますので気をつけてくださいね」

マリカ&直人「……」

ソラ「カラドボルグは魔力ランクSSですから、単純計算で魔導師ランクS＋くらいないと一撃です」

直人「可愛い笑顔で言われても……」

マリカ「主でもリミットブレイク＋ユニゾンしなければ危ないですね」

灰猫「ソラ君が非殺傷設定を覚えたから危険性は低くなってはいるんですよ？」

直人「そ、そうか」

ところで、今回出てきた『巨神・ヘラクレス』ってどれくらい強いんだ？」

灰猫「じゃあ、今まで出てきた召喚獣のステータスを」

騎士・アーサー

魔力：A

攻撃力：S＋

防御力：C

機動力：A A A

特殊：光剣・クラウドソラス

剣竜・カラドボルグ

魔力：S S

攻撃力：S S +

防御力：S S S

機動力：D -

特殊：防御貫通収束砲撃魔法

ネコ先生

魔力：A A A

攻撃力：A

防御力：B

機動力：A -

特殊：基本魔法全種（応用はできない）

巨神・ヘラクレス

魔力：A A

攻撃力：S S

防御力：S S S

機動力：F

特殊：ギガインパクト（一撃かぎりの砲撃魔法）

灰猫「ですね」

直人「うわ……ネコ先生以外は戦いたくないな」

マリカ「そうですね」

ソラ「皆、素直な子たちで頼りになります」

直人「おっと、そろそろ時間だな」

ソラ「次回予告カンペです」

直人「よし

アースラが修繕のため本局に向かう中、今回の事件の本部を鳴海に設置することに」

マリカ「なのは、フェイトと共に街に出かけるソラさん、そこで起こる予期せぬ事件」

ソラ「次回、魔法少年の物語第6話『鳴海事件簿（前）』へ」

直人&マリカ&ソラ「レディー……ゴー！」

ソラ「あ、お土産に干し柿とアクセサリー制作道具一式です

もしかしたらまたアクセサリー作るかもしれないからだそうです」

直人「……使うのか？」

ソラ「わかりません」

今回のゲスト

いのうえなおと

井上直人

蒼天の騎士伝説の主人公、騎士としてあのシグナムにも認められる男
フラグメーカーで7人とのフラグが確定、フラグ増殖中

マリカ

井上直人のユニゾンデバイス、主人想いで純粹
直人の最初の師匠、今後も活躍が期待される

秋風様、ありがとうございました！

第5話『エースを墜とすジョーカー』（後書き）

次回あとがき出演者大募集

出演者の方にはソラ君からお土産が贈呈されます

第6話『海鳴事件簿（前）』（前書き）

今回は短めです

……「も」かな？

とりあえず始まります

今回あとがきこゝなゝはお休みです

第6話『海鳴事件簿（前）』

模擬戦を終えて、またシャワーを借りました、今回は訓練室横のシャワー室です。

クロノさんはあれからすぐに復活しましたが、大事をとって医務室で治療中です、外傷は殆どないから心配はないそうです。

シャワーを浴び終わって髪をタオルで拭いてっつと。

あ、着替えを創らないと服がないですね、こういう服にしましよ
うか？

ーっプシュッ

「にゅ？」

「え…？」

下着を着ようとしたところでドアが開いて、金髪をツインテールにした女の子が入ってきた。

「あ、ごめんなさい、もうすぐ出ますから」

ボクがそう言うと、女の子が真っ赤になって走り去っていった。

「うっ？」

わけが分からず首を傾げながら、とりあえず服を着ることにした。

Side フェイト

クロノとあの男の子の模擬戦を見たあと、私も軽く身体を動かしたあと、シャワーを浴びようと思ったらあの男の子がいた。

「~~~~っ」

思い出しただけで顔が熱くなってしまう、ドキドキする胸を抑えて休憩所まで走ってきてしまった。

「とにかく、落ち着こう」

椅子に座って大きく息を吸う、驚いた。

あの子がソラ・フォード、まだ魔法を使いはじめたばかりなのにクロノを倒した凄い子。

エイミイの話したと彼の魔力資質は私やなのは以上、近接戦闘技能もクロノの射撃魔法を切り払えるくらい凄い。

それにあの召喚魔法も凄い、召喚したゴーレムはクロノのブレイズキャノンが無傷で防いで、間髪いれずに砲撃魔法を放った。

訓練室だから逃げ道がなくてクロノは撃墜、彼はさほど疲れた感じはなかった。

「……」

彼の個人情報やリンディ艦長の話しではどこにもなかったらしい。推定魔導師Sランク、魔力保有量S+（計器調整をした結果の数値）のオールラウンド魔導師、正直冗談とも思える強さだとも思う。

「あ、また会いましたね」

「えっ？」

振り返ると彼が立っていた、女の子向けのフリルの多い黒いドレス「ゴスロリ」みたいなのを着て、下から覗き込むように私を見ていたから、それを見て思わず固まってしまった。

「（か、かわいい……）」

Side ソラ

シャワー室から出てふらふらとさ迷っていると、先程の女の子を見つけた。

声をかけてみたけど、こちらに振り返ってから反応がない。

「うっ？」

「~~~~っ／／／」

首を傾げ様子を伺っていると、顔を真っ赤にして慌てだした。

「どうかしましたか？」

「な、なんでもないよ」

真っ赤な顔で手を振りながら苦笑する女の子。

「あれ？ フェイトちゃんに……ソラ君!？」

「な、なのは！ 久しぶりだね」

「あ、なのはさん」

その後、三人で談笑した、最初はぎこちなかったけど何時間も話しているうちにすっかり仲良しになりました。

翌日、アースラの方々が集まり、最近起こっている事件の捜査本部を地上に設置するらしい。

ボクは民間協力者としてアースラの方々のお手伝いをする事になりました。

「リンディさん、この部屋を使っているんですか？」

「ええ、ソラさんもお部屋が欲しいでしょうからね、これが家の鍵よ」

笑顔で鍵を渡してくれるリンディさん。

「ありがとうございます、リンディさん」

しばらくしてなのはさんのお友達が玄関先まで来ていた。

「こんにちは」

「なのは、この子誰？」

「かわいい子だね」

「はじめまして、ソラ・フォードです」

「すずかちゃん、ソラ君は男の子だよ」

「「嘘っ?!」「」

今のボクの服装はリンディさんに用意してもらったもの。

上が白いセーターで、ズボンはジーンズ、ネコ先生は今はいない。

「アリサ・バニングスよ、よろしく」

「月村すずかです、よろしくねソラ君」

ボク達はお話するため、なのはさんの家でもある喫茶店に行くことになった、フェレットになったユーノさんとフェイトさんの使い魔のアルフさんも合わさって、外でのティータイムになった。

「それじゃあ、ソラ君はあの家に住むんだ」

「はい、身寄りがないボクを養子にしてくれるんだそうです」

皆でケーキを食べながらボクの話が進んでいく、魔法とかをぼかしつつ、ある程度リンディさんと決めていた内容を話している。

「それじゃあ、これからなのはとフェイトとソラで町を回るの?」

「うん、とりあえず近所だけだね」

談笑が終わり、フェイトさんは何かプレゼントを貰って嬉しそうにしていました。

「ここが私が毎日練習してる場所だよ」

なのはさんが毎日練習してるという公園について一息つくボク達。ジュースを買って飲みながら、今まで回ってきた町並みを思い出す。

綺麗に整備された町、人が行き交うビル街、近くの森、神社、河原。

ボクはこの町が大好きになった、小学校というのも行きたかった

けど今日は無理だった。

ちなみにボクも週明けに学校に通えるらしい、字の読み書きはある程度理解できたので苦労はそんなにしないはず。

帰路につこうと大通りに抜けようとした時、いきなり目の前から車が突っ込んできた。

「危ない運転」

「だね」

ボクはその車の後ろを眺めながら、何か嫌な予感がしていた。

「……ボク、追いかけます」

「「え？」」

直感でボクは走り出していた。

自分でもよくわからない、でも行かなければならない気がした。だから全速力で走り、もう見えなくなった車を追いかける。

「た……けて」

どこからか声が聞こえた気がした、だからボクは走り続ける。

「たすけて」

声の聞こえる方へと。

「助けて！」

第6話『海鳴事件簿（前）』（後書き）

まだまだオリジナルキャラクター＋出演希望募集中です

もちろん感想もお待ちしております

第7話『海鳴事件簿（後）』（前書き）

今回ソラ君が少し暴れます

感想がどうなるか少し怖いところ……

とりあえず、どうぞ

第7話『海鳴事件簿（後）』

ボクは30分ほど走り続けてようやくあの車を見つけた。

年期の伺えるビルの前、入口には数人の人影が見えた。

ビルの中から伝わってくる気配は50以上、そのうち二人の気配は覚えがあった。

「アリサさんにすずかさんの気配……」

今も頭に響く『助けて』という声、念話などではなく純粹な人の思い。

自分の国で何度も聞いた心からの渴望、人が無意識に放つSOS。

「……………（ギリッ）」

自分が出した歯ぎしりの音が聞こえる、ボクは自ら進んで誰かを傷つけようとは思わない。

だけど……、友達を、しかも女の子に怖い思いをさせているコイツらに……。

「ボクは……手加減しない」

ボクは歩きだす、心を無にして。

S i d e o u t

影から出てきたソラ、その表情は彼を知っている人ならば思わず

目を疑うだろう。

幼い顔付きに似合わない無表情の顔、普段は和やかな目は怒りに染められ鋭く、纏う雰囲気は氷のように冷たい。

見張りの二人はそんな異常な子供を見つけ思わず後ずさる、新興のヤクザではあるがそれなりに修羅場を潜ってきた二人をして、ソラはまるで肉食獣のようにゆっくりと歩を進める。

「そのガキ、止まれ」

事を荒立てれば計画が崩れる、いくら異常な子供とはいえそれくらいで慌てていてはこんな事はしない。

「……退け」

短い言葉、しかし、大の大人が震え上がるほどその声は冷たかった。

体勢を低くし、身体のパネをフルに使って獣の如く男達に接近する。

「なっ!？」

ソラは勢いをそのままに水月に掌ていを叩き込む。

ソラの格闘技は中国拳法に似ている、攻撃に拳を使わず、手の平・腕・肘・肩・足を使う変則格闘技。

本来は貴族の子供が習う護身術だが、ソラはこれを父親の友人である貴族の人に教えてもらい、自分流にアレンジして使っている。

「ぐえっ?!」

一撃では重さが足りず気絶はしなかったが、次に襲ってきた投げ

技に声をあげることなく気絶する。

「こいつっ」

反射的に銃を抜くもう一人の男、しかし、引き金を引く前にソラのハイキックによって意識を奪われる。

ビル内部に侵入してすぐに道を塞ぐ男達、しかし数の利などなく、逆に狭い通路のせいで動きの鈍った男達は一撃ずつで沈めていく。

Side ソラ

ビル内部の敵は殆ど倒した。

残るは目の前の部屋のみ、正直身体はかなり疲れている。

利き手の右はもう使いすぎで上がらない、左肩には銃で風穴が空いている。

血が流れすぎて頭がボウツとする。

そんな身体で目の前のドアを蹴破る。

「来たか」

そこにいた敵は三人、そのうち二人は銃をアリサさんとすずかさんに向けている。

「ガキの癖によくやったようだが、それもこれまでだ」

部屋の奥にいた男がこちらに銃をこちらに向ける。

血に濡れた左手の中にある感触を確かめてから一言忠告を口にする。

「敵は動かなくなるまで油断をするな、銃に頼り慢心するな」

左手に持っていたガラス片をアリサさん達を狙っていた男達の手
に当て、銃を撃てなくし、前にいる男の急所（金的）を蹴り上げる。
悶絶している男を横目で確認してからアリサさん達に近づき横に
いる男達を蹴りを放ち気絶させる。

無言のままボクに銃を向けていた男に近づき、気絶しているのを
確認してから心を浮上させる。

「アリサさん、すずかさん、ここから出ましょう」

縄をとぎ、無言のままボク達はビルを後にした。

数時間後、バニングス家の息がかかった警察によってヤクザ達は
全員逮捕された。

ボクは外に出た時点で気絶していた、目が覚めたのは病院のベッ
ドの上だった。

あれから三日も経っていた。

なのはさんとフェイトさんがまたあの騎士達に会ったらしい。

なのはさんとフェイトさんはあの次の日に「しゅうしゅう」とい
うのを受けて、リンカーコアという部分が小さくなって治療中らし
い、幸い快方に向かっているらしい。

ボクの怪我は全治一ヶ月と診断された、けど寝ている間に驚異的
な回復速度で左肩以外は特に問題なくなっていた。

左肩もこのままいけば二週間ほどで完治するらしい。

「ソラ、ほら林檎よ」

「ありがとう、アリサさん」

「べ、別にお礼なんていいわよ／＼」

「アリサちゃん、素直じゃないんだから」

あれからアリサさんとすずかさんは毎日お見舞いに来てくれます、一応検査入院と言うことで一週間はここにいる事になっています。

「う、うるさいうるさいうるさい！／＼」

「にはは、アリサちゃんお顔真つ赤だよ？」

「本当だ、アリサは素直になればいいのに」

今日はなのはさんとフェイトさんも居ます。

病室は個室なので周りを気にしないでお喋りできます。

ボクの退院と同じくらいの時期になのはさん達も回復するそうなので、戦いはそれからになりそうです。

今は皆との楽しい時間を満喫しましょう。

あとがきこゝな（仮）

灰猫「実はユニークが4000人に達しそうですね、こんな作品を見に来てくださってありがとうございます（土下座）」

ソラ「好評の感想を貰って、作者さんは今回の回を一日で仕上げたんですね」

灰猫「楽しんでいただいてるから頑張ってみました
少し早足なんですがソラ君視点メインなので原作キャラクターは少
し影が薄くなりかけてますね」

ソラ「そこは作者さんの努力でカバーしてください」

灰猫「だね、お気に入り登録してくれている方も38人もいるので
期待外れなモノは作りたくないですし」

ソラ「そういえばオリジナルキャラクター募集の方も煌 焰様と朧
木様から来ているので次回あたりにあとがきこゝなでこの作品に
合わせて微修正した物を紹介したいと思います」

灰猫「では今回はこれくらいで」

ソラ「では次回予告です！

肩の怪我も治り、学校に入学することになったボク」

灰猫「そこで起こるちよつとしたハプニング、ソラ君は果たしてど
のように切り抜けるのか!？」

ソラ「次回、魔法少年の物語第8話『可愛い転校生?』へ」

灰猫&ソラ「レディー……ゴ―!」

よし、とりあえずフラグは作れたはずだ！

ソラ君よ、頑張って折らないようにしてくれよお。

次回もお楽しみに！

第7話『海鳴事件簿（後）』（後書き）

感想＆アイデアお待ちしております

第8話『可愛い転校生?』（前書き）

今回あとがきこゝな（仮）にてオリジナルキャラクター正式設定を公開します

まだまだ募集しています

第8話『可愛い転校生?』

退院前日の夜、あの事件を思い出していた。

あの時、ボクは魔法を使わずあの事件を解決した、それはまだ使い始めた魔法でどこまで戦えるか分からなかったからだ。

それに使い慣れない魔法は使用するのに時間がかかる、あの場面では使用に不安があった。

「想像」も似たような感じで、あの時にアーサーと共に戦っていたなら何が起こるかかわからない、アーサーの力は強すぎる。

建物自体を破壊することも十分ありえる。

ちなみにネコ先生は火力不足、そもそも戦いには向いてない。

でも、今になってもつといい手があったんじゃないかと後悔が出てくる、過ぎた過去を変えられないと解りながらもどうしても考えてしまう。

「ふう……」

いけないですね、こんな風に落ち込んでいては皆さんに迷惑をかけてしまいます。

今回の事を糧により一層精進しましょう。

退院した次の日、ボクはリンディさんと一緒になのはさん達が通う学校についた。

私立聖祥大学付属小学校と言っらしい、長いです。

「えーと、ソラ・フォード君ですね」

「はい、これからお世話になります」

リンディさんは軽く話しをしたあと仕事の為に帰りました、なんでもアースラがこちらに来るのでそちらに行かないといけないからだそうです。

「じゃあ、呼んだら入ってきてね」

S i d e アリサ

今日の私は何か落ち着かない、クラスメイトの一人がこのクラスにまた転入生が来ると言ってたからだ。

フェイトの話だと、ソラもここに転入するらしいから転入生は間違いなくソラだろう。

私達が誘拐されたあの日に助けてくれたソラ、会った時は何か女の子みたいで頼りない感じだったのに、部屋に入って来た時はものすごくかつこよかった。

血まみれになりながら私達を助けてくれたソラに、多分私は恋心を抱いているんだと思う。

すずかも似たような感じだからライバルが多いわね。

「アリサちゃん、転入生って多分ソラ君だね？」

「そうなんじゃない？ フェイトがここに転入するって言ってたし」

すずかは頬を少し赤くして嬉しそうに微笑む。

むむ、この笑顔は反則よ！ 私じゃこうはいかないからなあ。

「皆さん、席についてください」

来たっ！ 私はうるさい心臓の音を聞きながら、表向きは冷静に振る舞う。

「知っている子もいるだろうけど、今日から転入してくる『男の子』を紹介するわね」

『男の子』という単語に男子から残念という声があがる、女子はみんな嬉しそうだ。

「じゃあ、ソラ君入ってきて」

教室のドアが開き、真新しい制服に身を包んだソラが入ってくる。

「ソラ・フォードです、これからよろしくお願いします」

微笑みながら挨拶をするソラに教室はシーンとしていた。
私も多分顔が赤くなってるんじゃないかしら？

「うー？」

小さく声を出しながら首を傾げるソラ。

ああもう可愛い！

S i d e ソラ

あの後、一時間目の時間を自習にしてボクに質問する時間になりました。

「フォード君の趣味はなんですか？」

「読書と実践です、知識を活かすのが好きなんです」

「出身地はどこですか？」

「イギリスの外れの集落です」

「日本語上手だよね？」

「祖母が日本人だったので」

「タイプの女の子はこういう感じの子？」

「にゅ？」

「……可愛いっ！」「……」（↑クラス全員）

特に問題もなく一時間目は終わりましたが、でも可愛いと言われる理由がよくわかりませんでした。

二時間目は体育、どっちぼーるというのをやるそうです。

チームは相手になのはさん達四人を含めた八人。

こちらは男子はボクを含めて五人に女子三人。

「じゃあ、スタート！」

ジャンプボールですずかさんにボールが渡るとチームメイトが全員慌てて逃げ出す、どうしたんだろ？

「はっ！」

すずかさんから放たれたボールは真つすぐボクに向かって来る。

どっちぼーるのルールではこれに当たってボールが地面に落ちるとアウトになるり捕球するか避けないといけない。

迫って来るボールは結構速い、それを避けて横からボールの下を叩いて上空に上げる、落ちてきたボールをキャッチすると周りから「おお！」という声上がる、すずかさんも驚いた表情でこっちを

みている。

「こちらの番ですね」

軽く力を込め、指先に集中してボールを投げる。

ボールは見た目揺るやかな速度ですずかさんに向かう。それをすずかさんは迷わず避ける。

その先にいた男子がボールを取ろうとボールに触れた瞬間、強烈な横回転で手から弾かれる。

「やっぱり、危なかったよ」

「見破られていましたか、ですが負けませんよ？」

結局、最後はすずかさん達のチームの勝ちでした。ちょっと悔しいです。

間を飛ばして昼休み、ボクはフェイトさんと同じお弁当です。

「それにしてもソラってすごいわよね？」

「にゅ？」

サンドイッチを食べていると、アリサさんがそうきりだした。

「だって強いし優しいし、それにまだ覚えたばかりなのに国語もなかなかだったじゃない？」

「私もびつくりしたよ、ドッチボールで私の球を取れる人少ないのに簡単に取られちゃったし」

たしかにあのボールは速かったけど、取りにくい球ではなかったからなあ。

「そういえば、すずかさんが運動する姿って綺麗ですね」
「っ／＼／」

「アリサさんも普段の立ち振る舞いが綺麗ですし」
「／＼／／／」

ボクが今まで思ってた事を言うと二人とも顔を真っ赤にしてみました。

なのはさんは苦笑して、フェイトさんはちょっと頬を膨らまして不機嫌そうでした。

今日からこんな楽しい毎日かと思うと、とても幸せです。

あとがきこゝな（仮）

灰猫「というわけでお送りしました第8話、日常編と脳内補完されている一つですね」

ソラ「放課後は次回になりますね」

灰猫「あ、そういえば何でアリサが字を覚えてたか知っているか、と言うのも次回に出てきます」

ソラ「次に、投稿されたオリジナルキャラクターの正式設定です」

名前：神能寺しんのうじ 龍火りゅうか
性別：女

年齢：出演時11歳

レアスキル：

ゲートオブバビロン

【王之財宝】

容姿：ボーイツシュ

髪：金・ショートヘア

瞳：紅

体型：スレンダー

一人称：「俺」

イメージキャラクター：

型月の子ギル

原案：煌焰様

名前：アンラ・マンユ

性別：男

年齢：不明

レアスキル：

【底無しの呪い（ボトムレスカース）】

マギリングキャンセラー

【魔法無効化体質】

容姿：美形（ただし呪詛文字が体中に書かれているためよくわからない）

髪：のびっぴなつ黒

瞳：濁った黒茶

体型：痩せ型

一人称：「オレ」

原案：朧木様

灰猫「こんな感じですかね？」

ソラ「けっこう改変した部分があるのは許してください、作者さんも何とか送って貰ったアイデアを上手く纏めようとしてるみたいなので」

灰猫「うう、こんな感じでいいんでしょうか？」

ソラ「そういえばトラブルなんてなかったでしたよね？」

灰猫「君がナチュラルに回避しただけだよ？」

ソラ「うー？ まあいいです」

次回は『にゃんこ屋敷にお宅訪問』へ、レディー……「ゴー！」

第8話『可愛い転校生?』（後書き）

あとがき〜な（仮）の出演者募集中です

第9話『にゃんこ屋敷にお宅訪問』（前書き）

今回いつも以上に駄文ですが読んでくださったら幸いです

まだまだオリジナルキャラクター募集中です

第9話『にゃんこ屋敷にお宅訪問』

学校の授業を終えて、皆との帰り道、すずかさんとアリサさんから「遊びに来て」と誘われました。

リンディさんに確認を取らないといけなかったので、了解を得たら連絡する事を伝えてその日は別れました。

「と、いうことなんですが、いいでしょうか？」

リンディさんは今アースラにいたので、代わりにエイミィさんに聞いてみました。

「いいんじゃないかな？ お礼をしたいんだろうししばらくは出勤もないだろうし」

「ありがとうございます」

エイミィさんから許しが出たので、まずはすずかさんの家にお邪魔することになりました、明後日から休日なのでそれに合わせます、なのはさんやフェイトさんはリンカーコアの検診があるのでボクだけになります。

フェイトさんが少し残念そうにしていました。

S i d e すずか

ソラ君からの電話を聞いてからの二日間はずっと落ち着かなかっ

た。

お姉ちゃんも、恩人の子ならと泊まりを許してくれて嬉しかった、でも授業を時々聞いてなかったのは反省しないと……。

いつもは完璧なアリサちゃんも、時々集中力が途切れてたから私と同じなんだと思う。

そして待ちに待った土曜日、ソラ君は大きな荷物を持って遊びに来た。

「大きなお屋敷ですねえ、それにネコがいっぱいいますよ」

「ソラ君はネコが好きなんだ」

「動物は大抵好きですよ」

微笑みながら子ネコと戯れるソラ君、しばらくして満足したのか、一緒に家の中にはいる。

「いらつしゃいませ、お荷物をお持ちします」

「あ、お願いします」

ノエルにお茶を頼んでテーブルでお話をする、どんな本を読んでいたかとか好きな食べ物とかを話しながら私は思う。

ソラ君はまだ会ったばかりだけど、とっても優しく暖かくて一緒にいると幸せな気分になる。

「ふふ、楽しそうね」

「あ、お姉ちゃん！」

「はじめまして」

お姉ちゃんも加わって話がだんだんと変わってきた、普段の学校での私の事や家での私の様子を話している。

私は恥ずかしくて慌てるけど、お姉ちゃんは話すのをやめてくれ

ない。

「で、ソラ君から見てすずかの事どう思うの？」

それを聞いて、一瞬にして緊張してしまう。

ソラ君は少し考えながら。

「可愛い子だと思いますよ？ 落ち着いてますし、運動していると
きは綺麗ですし」

私は熱くなつた頬を感じながら何も言えなくなる、ソラ君は自分
が思っていることをストレートに表現する、声音からも嘘でない事
が理解できてしまうから胸のドキドキが止まらない。

「ふふ、そうだ！」

お姉ちゃんはポケットから二枚のチケットを出す。

「映画のチケットよ、ホントは恭也と行く予定だったんだけど、仕
事とかが入って行けなくなっちゃったから」

題名は『神風特攻隊へのラブレター』、第二次世界大戦の時代の
実話を元にした映画らしい。

「すずか、頑張つてね」

お姉ちゃん……。

Side ソラ

映画を見終わり、ボクは少し懐かしい気持ちになった。

毎日が戦争の日々だった故郷を思い出す映画だった、神風特攻隊のパンフレットを購入してずっと眺めていた。

すずかちゃんはとっても優しい表情で。

「気に入ってくれた？」

「はい、ボクもあんなかつこいい大人になれるでしょうか……」

「ソラ君ならなれるよ、だって私を助けてくれた時かつこよかったし……それに……」

すずかさんが赤くなりながら何かを言おうとした瞬間、ボクの体が震え出す。

あれ？ どうしたんだろう？

「……ソラ君？」

「あ……ダメ……です……それ以上は……言わないで……ください……」

言葉が勝手に出てくる、体が震えて立っていらなくなる。

「すずかにソラじゃない、何してるの？」

「アリサ……さん……？」

「ちよっ、ソラ?! あんた顔真っ青じゃない!」

あ……、ダメ……意識……。

――プツンッ。

S i d e アリサ

鮫島と一緒に明日の為に買い物をしに来ていたら、途中ですずか達を見かけて近寄ったらソラが真っ青になってた。

映画の帰り道だったらいいんだけど、突然こんなことになったらしい。

「どうしたんだろう…ソラ…」

一応、ソラの荷物のあるすずかの家に来たけど、あれからすずかはだんまりになっちゃうしソラは気絶しちゃうし。

「私…… なにか…… しちゃったのかな？」

今にも泣きそうな顔で私に聞いてくるすずか、その表情に私は焦る。

「私…… ソラ君に…… 自分の気持ち…… 言おうして…… そしたら……
…ソラ君が震えだして……」

知ってたけど、すずかもソラの事が好きなんだ。

奥手なのに勇気振り絞って言おうとしたらこんなことになったみたいね、たしかにそんな事になったらこうなるのはわかるわね。

「すずかのせいじゃないはずよ…… 多分、ソラ自身になにかあるんだわ」

ソラの日本語にイギリス訛りは無い、隠さなきゃいけないことが

あるんだ、多分なのはやフェイトが隠してる事に近い事が。
私達は黙ったまま、ソラが目覚めるのを待つ。

S i d e ソラ

… … … … …

暗い…………。

世界を見渡しても何も見えない。

『ククク…………』

そこにぼんやりと浮かび上がる影、そこにはボクが殺した男が立
っていた。

『自らの罪を忘れ幸せを噛み締める事ができると思っていたのか？』

笑う男、これはあの男じゃない、ボク自身が生み出した罪のカタ
チだ。

『貴様に幸せになる権利などない…………』

ああ、だから……。

『血に濡れた貴様の手では幸せは掴めない』

これはボクの心の声。

『ククク………』

心に刻まれた罪の声。

<ソラ君………>

すずかさん………？

<ソラ………>

アリサさん？

光が

暗闇の世界に

差し込んで来た。

目をゆっくりと開けるとボクの手を握っている二人が見えた。

「ソラ（君）ッ!」

アリサさんとすずかさんはボクが目覚めると一緒に抱き着いてきました。

「すみません、ご迷惑をおかけしました……」

二人が首を振る、ボクは内心でリンディさんに謝り、口を開く。

「ボクの秘密……聞いてくれますか？」

あとがきこゝな（仮）

灰猫「慣れないシリアスに死にそう……」

ソラ「ボク、気絶二回目です」

灰猫「ごめんよ……でもこれやらないといけないんだよ……」

リボー「何か辛気臭いぞ、ほれソラ、アップルパイだ」

ライガ「隊長、あの内容ならしかたないですよ？ あ、これはお饅頭」

ソラ「わあい♪」

リボー＆ライガ「（可愛らしい反応だなあ）」

灰猫「いらっしやいませ

今回のゲストは『魔法少女リリカルなのは Going My Way』よりリボー・グレイブさんとライガ・エヴァンスさんです」

ソラ「はじめまして！」

リボー「よろしくな……なあ、そういえばデケエドラゴンがいたけど、なんでボロボロなんだ？」

ライガ「周りに金属片が大量に落ちてましたし」

灰猫「ああ、実は次の戦闘パートで出てくる子がここに来て戦闘になったんだよ」

リボー「……さっき触った感じだと戦艦外部装甲以上の硬さだったんだが」

ライガ「隊長や俺なら倒せる相手ではあったけど、普通相手にはしたくないヤツですよあの竜は」

灰猫「体長約200メートル、構成主要物質は特殊生体金属でなのはSLBで外殻を破壊可能ですね」

ソラ「明日には回復してるでしょうけど……」

リボー「はぁ……また出鱈目なのを持つてるんだな」

ライガ「俺の稀少技能では再現不可能ですからね」

ソラ「多分空白期1話目くらいにはでてくるはずなんですが……」

灰猫「そろそろ時間だね」

ソラ「次回カンペです」

リボー「おう

ソラは自分の事を包み隠さず話すことを覚悟した」

ライガ「話される真実に彼女達はそれを受け入れる事ができるのか？」

ソラ「次回、魔法少年の物語第10話『真実』へ」

リボー＆ライガ＆ソラ「レディー……ゴー！」

ソラ「お土産の柏餅と翠屋のシュークリーム、それにリボーさんに

は次元座標観測機、ライガさんにはエリクサー（本物）です」

リボー「んじゃ」

ライガ「またね」

シグマ様、ありがとうございました！
よかったですうちの子も使ってください！

第9話『にゃんこ屋敷にお宅訪問』（後書き）

次回あとがきこゝな（仮）のゲストは朧木様の作品からロウ・ア
イアス君です

第10話『真実』（前書き）

短いです

シリアスは苦手です

あとがきにゲストが来ています

第10話『真実』

Side out

ソラはベッドの上で上半身だけ起こして、数回深呼吸を繰り返す。
アリサとすずかは急かさず待つ。

「まず初めに……ボクはこの世界の人間ではありません」

二人は驚いた表情をするがソラは構わず進める。

「ボクの世界では戦争を続けていました……」

ニユースは毎日が戦争の話題、国を一步出れば硝煙の臭いと爆音が響くでした」

ソラは懐かしむように語る、目には懐かしむような色と悲しみの色が交ざっていた。

「そんな時……一人の人間が現れたんです、その男は魔法を使い国を滅ぼしていきました」

そして、語られる自らの罪。

「ボクの国は隔壁を閉じ、外界から完全に隔離されました、ですが一年と経たない内に伝染病が蔓延し次々に国の人々は死んでいきました……、ボクの母も二年目には……」

アリサとすずかは叫びたくなるのを手を握り合い我慢する、すずかは既に涙目で今にも泣きそうだ。

「残念な事に……隔壁を開ける為のコンピュータを操作できる人は最初の犠牲者でした、四年目になると国に残っていたのはボクだけでした」

そこでソラは大きく息を吸い、吐き出すように喋る。

「ボクはそこで『想像』を『現実』にするチカラに目覚めました……、ボクはそのチカラで壁を壊し、外に出ました……」

そこでソラの表情が消える。

静寂は一瞬、だが聞き手である二人には永遠と感じるほどの静寂。

「壁の向こうにはあの男がいました……、世界は静まり生き残っているのはあの世界でボクとあの男だけでした」

抑揚のない、静かな声。

普段の明るい声は見る影もない。

「ボクは……自らの意思で……その男を……」

「殺しました」

S i d e ソラ

語り終え、身体から嫌な汗が出てきました。
二人は俯いたまま、何も言いません。

「ボクは罪人です、こんな……こんなボクが貴女達に真実を隠したまま……いえ、話した今も気持ちを受け取る事なんてできないんです」

そう言った瞬間、乾いた音と共に頬に痛みが走った。

「ふざけないでっ!」

涙を流しながらアリサさんが震える声で、そう告げた。

S i d e アリサ

訳がわからない。

ソラの話は正直信じられないくらい突拍子もない物だった、けど、ソラの表情が……声が……真実だと伝えていた。

だから許せない、許せなかった。

「私が好きになったソラは……そんな……そんな悲しい事……違う……私は……あんたがどんな……どんな罪を背負っていても……嫌いに……嫌いになるほど弱いもんじゃないのよ!」

言葉がうまくでてこない、でも必死に伝えようとする。

「私は……あんたが……大好きなのよ！」
「わた……し……も……」

今まで俯いていたすずかも、声を出す。

S i d e すずか

私はアリサちゃんの思いを聞いて、決心した。

「私も……ソラ君が好き……例えソラ君が自分の事を罪人と言っても……私の気持ちも変わらない」

それに、ソラ君の行動を責めることはできない。

それは確かに罪だけど、彼の行動はある意味当然の行動。

それを、責める人がいるとしても、私はソラ君の見方だよ？

「私の……私達の気持ち……受けとってくれないかな？」

S i d e ソラ

涙が止まらない。

心が暖かい。

もう、嬉しくて嬉しくて……。

「大丈夫よ……」

アリサさんが抱きしめてくれる。

「大丈夫だよ……」

すずかさんが抱きしめてくれる。

「私達はいつまでもソラ（君）を大好きで、いつまでもソラ（君）の味方だから」

ボクは、幸せになっても……いいんでしょうか？

次の日ボクはアースラと連絡をとり、リンディさんにすべてを話した。

アリサさんとすずかさんに全て話した事も含めて、全てを。

「そう……一応管理局法で照らし合わせると……素行を含めて無罪になると思うわ」

男の顔写真を見ながらリンディさんはそう語る、非常事態における正当防衛だそうで、本局という場所に連絡してはいるが結果はおそらく間違いないそうです。

「それに……この男は管理局でも上位のテロリストよ、下手をしたら感謝状がくるかもしれないわね」

自ら課した罪は消えずとも、新たに誰かから裁かれることはない

みたいです。

「アリサさんとすずかさんは一応民間人だからこちらには呼べませんけど……もしソラさんが地球を離れる場合はお手伝いするわ」

未来の義母さんは微笑みながらそう言ってくれた。

正式な手続きはまだですが、後見人兼保護者としてリンディさんがついてくれることになりました。

「はい、その時はお願いします」

その瞬間、アースラ内にアラートが発令されました。

あとがきこゝな（仮）

灰猫「……ふう……静かだなあ？」

——キュウウウウン……

灰猫「ん？」

——ガアアアアアン！

灰猫「ぎゃあっ！？」

ソラ「あ、着地に失敗しました」

ロウ「おゝい、生きてるか？ 潰れたか？」

灰猫「いぎでる……よ？」

ソラ「す、すみません」

灰猫「や、大丈夫、この世界なら
というわけで今回のゲストは『魔法少女リリカルなのはー刃を持たぬ者ー』よりロウ・アイアス君です」

ロウ「フェイト余裕だった」

ソラ「凄い魔法の操作技術です！ 憧れちゃいます！」

ロウ「なんだ……どうしてそんな可愛い顔で見つめるんだいソラちゃん！」

灰猫「……ロウ君？ ソラ君は男だからね？」

ロウ「……夢を……見てみたかったです」

ソラ「うー？」

灰猫「ソラ君……（ごによごによ）……って、ロウ君にいつてみ？」

ソラ「ロウはかつこよかったのですよー、えらいえらいです」
「ぱー」

ソラ君のイメージＣＶは田村ゆかりさん、実はなのはと被っている

ロウ「……女の子?」

灰猫「いいえ、男の子です」

ソラ「にぱー」

ロウ「持ち帰っていいか?」

灰猫「剣竜に勝てたなら」

ロウ「ちっ」

灰猫「時間だからコレお願い」

ロウ「はいはい……」

街中に現れた守護騎士たち、対するはなのは、フェイト、ソラの三人」

ソラ「新しいデバイスを持ち立ち向かうのはさんとフェイトさん」

ロウ「ソラは如何なる手で闘うのか?」

ソラ「次回、魔法少年の物語第11話『ボクは迷わない』へ」

ロウ&ソラ「レディー……ゴー!」

ソラ「お土産の蜂の子の佃煮と蝉のチョコレート包みと飛騨牛1キ

口です」

ロウ「うまそうだ、あとお持ち帰りの準備は万全か？」

ソラ「にゅ？」

朧木様、ありがとうございました！

第10話『真実』（後書き）

次回は戦闘中心でお送りします！

シリアスなんかぶち壊してやる！

オリジナルキャラクターはまだ募集中です！

第11話『ボクは迷わない』（前書き）

今回でオリジナルキャラクターの募集は終了しました、アイディアくれた方はありがとうございました

今回も楽しんでいただけたら幸いです

第11話『ボクは迷わない』

ボクはアースラの転移魔法装置で戦闘区域から少し離れた場所に降りる。

遠くで武装隊の人達がヴィータさんと獣耳を生やした男の人を包囲している、ボクから見ると包囲には所々穴があるけど、空での戦いなら問題ない陣形だともう。

「さて、一足先に行くぞ」

「ボクは後からですか」

クロノさんは先に飛行魔法で空をかけ包囲の上空に向かう、ボクも向かおうとした瞬間、視線を感じて振り返る。

気配はなく視界には人影もない、しかし、観察するような視線がボクを捉えている。

「誰……なんででしょう？」

少なくとも、敵意やそれに類するものは含まれていない。純粹な興味だけがその視線から読み取れ、それがより一層不安になる。

「……視線が外れた……」

ちょうどクロノさんがステインガーブレイドを発動した瞬間だった。

その数は100を超えるほど、でも男の人が防御に回っていたから届いていてもダメージは少なそうですね。

「……アーサー、少しいいですか？」
『はい、ここに』

ボクの後ろに現れた「森羅万象・世界縮小図」からアーサーが出てくる。

「アーサーは待機、もしも相手の人達がボクの手には終えない場合はお願いします」
『御意』

さて、今のボクはどこまで戦えるのかわかりませんが、全力を出しましょう。

S i d e ヴィータ

ちっ、結界は張られちまうし敵の奴もけっこうやるしキツイな。

「アイツ！」

そこにまた現れたあのソラとかいうやつ、この前は変なこと言うから動揺しちゃったけど、今回はそうはいかねえぞ！

「あ、また会いましたね」

「ヴィータ、知り合いなのか？」

「……ちよつとな」

ちっ、やっぱり調子が狂うな。

「さてと、何故あなたが魔力を集めているとかはボクにとっては些細な事です」

一歩ずつビルの屋上を歩いて近づいてくるソラ、前会った時はゴツい甲冑だったけど、今は黒い上下に赤いマントみてえのを腰に巻いて、背中には翼を出してる。

つつか、あの翼に箆められてる魔力も普通じゃねえ。

何より雰囲気が違う、何だよコイツ。

「あなたたちは悪い事をしています」

重い、あたしは思わず後ずさる。

どうなってやがる！？ たしかにコイツはあの時かなり魔力を有していたのは間違いねえが、コレはちがう。

気迫だ、たった9歳のガキがどうしてこんな……、こんな気迫を出せんだよ！

「だから、お仕置きです」

その一言と共にアイツの足元に浮かぶ純白の魔法陣、でも端の方が赤とか緑とか青とかに変わってるのはなんでだ？

「エンゼルシエル……レディー……」

アイツの周りに浮かぶ九つの魔力弾、誘導制御型かよ！ 前んときは使わなかったじゃねえか！

しかも九つもかよ！

「ゴー！」

S i d e ソラ

砲撃魔法を撃てれば最高だったんですが……、まあ分断はできたからよしとしましょう。

「とはいえ……」

ボクは魔法陣を展開したまま辺りを警戒する、ヴィータさんはクロノさんがどうかしてくれるでしょうし。

「貴方……ですか」

「……あの誘導制御は中々だったぞ、だがまだまだ甘いな」

「……でしょうね、一応名乗ります、民間協力者のソラ・フォードです」

「守護獣、ザフィーラ」

魔法は使えませんね、集中が必要になりますから……ここは格闘戦ですね。

「今度はこちらで行きます」

「来い……！」

右手を突き出し左足を半歩引く、一対一の基本の構え。

元護身術であるボクの格闘は本来は待ちの戦法、故に格上の相手は自ら攻撃へは向かえない。

「ウオオオオオオ！」

ザフィーラさんはパワーファイター、丸太みたいに太い腕から繰り出される一撃は今のボクでは一撃でもかなりキツイ、だが、懐に入らなければ負けます。

「ハアアアア！」

紙一重の見切りで攻撃を避けて懐に飛び込み肘で鳩尾に……。

「甘いっ！」

「ぐっ！？」

死角からの蹴りにボクは反応できず吹き飛ばされる、ボクはまだ空戦ができない、そのまま地面に向かい落ちていく。

「羽ばたけ！ 『天の翼』！」

翼に籠められている魔力を使って「浮遊」を使い衝撃を緩和する。

「ておおおおお！」

しかし、即座に来るザフィーラさんの拳が腹に突き刺さる。
厳しい……ですね。

「アクセルシューター！ シュートッ！」

そこに飛んでくる桃色の誘導弾、ザフィーラさんは即座に飛びのき防御する。

「むっ、仲間か」

「民間協力者の高町なのはとレイジングハート・エクセリオン」

「時空管理局囑託魔導師、フェイト・テストロッサとバルディッシュ・アサルト」

空に浮かび、桃色の魔法陣を展開しているなのはさんと、少し離れた信号の上に立つフェイトさん。

ボクは痛む体を起こして構えなおす。

その時、ヴィータさんもちらにくる、その隣にはシグナムさんがいた。

あ、クロノさん蒐集されちゃったんでしょうか？

「さあ、仕切りなおしだ」

あ、そうみたいです。

数の上では三対三ですが……、厳しいですね。

なのはさんはヴィータさんへ、フェイトさんはシグナムさんへ、ボクは再びザフィーラさんと相対していた。

しかし、状況は先程と似たような感じ。

辛いですね、アーサーを呼ばないといけないでしょうか？

地面に倒れ、力を籠め止めをさそうと空中に浮いている。

「やれやれ……、子供相手にやりすぎではないか？」

「っ！？」

ザフィーラさんの後ろに突然現れる男の人、気配は一切ないし威圧するような感じはない。

「建物は破壊する、子供相手に手加減を考えない、それで守護獣を名乗るか」

しかし、その姿には一分の隙もない、自然体でありながら攻める隙を持たない男の人は周りを見渡す。

「やれやれだ、本当に」

ザフィーラさんは一気に距離をとる、ボクは痛む体を起こして男の人を見る。

清らかな雰囲気、邪気もなく、恐ろしく深い瞳。

「ほう、『クリエイター創成者』か……珍しい能力者だな」
「うー？」

聞き慣れない言葉に首を傾げる。

「しかし、やり過ぎだな、ここも直すか」

ボクが立っている場所を指差し、手で退くように指示する男の人。ボクはある程度離れて状況を見る。

「ふんっ！」

手刀を振るった瞬間、その範囲の道路が消え、綺麗に切り取られたようになる。

「どうやったか解るか？」

「……電気……による電解ですか？」

「ふむ、中々の見識眼だな、少年も神童と言うことが」

頷きながら、思い出したかのようにボクの方を向く。

「あとは舗装か……コンクリートは出せるか少年？」
「はい」

「想像」を働かせ、コンクリートを生み出す。
それを男の人が見た後、片手に嵌めている四つの指輪の一つが光り、ローラー車が現れる。

それを運転してコンクリートを固めていく。

「こんなモンか、どうだ？」

綺麗になった道路を見て頷く、たしかに綺麗になりましたが。

「色が違います！」

「当たり前だな」

苦笑しながら言う、あの人やっぱりいい人ですね。

「あの、一応封時結界も併用していますから壊れても問題ないのですが？」

「直すことに意味があるんだと思います！」

「分かっているじゃないか、少年」

外に待機している武装隊の方の念話が聞こえてきましたが、思っていることを言ったら男の人が頭を撫でてくれました。

「……俺は退かせてもらっ、もうすぐ上空から攻撃が来る……気をつける」

上空から黒い帯が垂れて来る、雷ですか。

「……逃がすと思うか？ 守護獣」

「待ってください」

ボクは男の人を意思を箆めて見る。

「わかった、行け守護獣、この少年の気が変わらん内にな」

それと同時に落ちてくる雷を男の人が防いでくれました。

雷が収まり男の人は現れた時と同じく消えてしまった。

ボクは誓った、次はこんな失敗はしない。

特訓ですね。

第11話『ボクは迷わない』（後書き）

～あとがき物語の館～

灰猫「や、どうも！」

ソラ「あとがきこ～な」（仮）を改めてまして～あとがき物語の館～です」

灰猫「さて、まずは朱様から送られてきたオリジナルキャラクターの紹介をしたいと思います」

名前：神城^{かみしろ}八雲^{やくも}

性別：男

年齢：9歳

魔法：ミッド式

魔力：A A +

髪：銀髪 ミドルロング

目：紫

容姿：カッコイイ系

レアスキル：

【SEED^{シード}】

デバイス：

インテリジェントデバイス【セレスティア】

提供：朱様

灰猫「能力はエクシアみたいな感じですね」

ソラ「ボクの空白期のライバルみたいな感じになる予定ですね」

灰猫「それと、本編に出てきた男はこれからの物語で重要な鍵になりますね」

ソラ「では次回予告です」

自らの力が足りない事に危機感を覚えたボクは特訓をすることにした

ボクはいつかの為に頑張る、それがボクに必要な事と確信して
次回魔法少年の物語第12話『特訓は明日の為に』へ、レディー

……「ゴー！」

第12話『特訓は明日の為に』（前書き）

更新が遅くなり始めてますが頑張ります！

とりあえず二三日で投稿になると思います

では本編をどうぞ

第12話『特訓は明日の為に』

あれからアースラで皆が集まり会議みたいな事をしています。

「……クロノが蒐集されたわ」

リンディさんは痛々しい面持ちで語る。

ボクとクロノさんが別れた後、クロノさんは善戦していたがシグナムさんが乱入したせいで一気に瓦解、最初に魔力を消費しすぎたせいもあり蒐集されてしまったらしいです。

「クロノが復帰できるのは10日後くらいだそうよ……」

「それで、皆にはとりあえず待機してもらうよ、アースラもやつとアルカンシエルの積み込み準備が整ったから今から本局へ向かうんだ」

途中からリンディさんに代わってエイミイさんが説明する。

リンディさんは少しだけ顔色が悪そうです。

「本部は変わらず海鳴のマンションだよ、なのはちゃんは連絡があるまでは自宅にいてもらっていいよ」

全員が頷き、次の議題に移ります。

内容はヴォルケンリッターについてでした。

彼らは本来闇の書の一部で、プログラムで構成された擬似生命体らしいです、主の命令を忠実にこなすだけの存在らしい。

「まるでボクのヘラクレスとかネコ先生みたいな感じですね……」

周りの皆が納得したような表情になる、ボク的能力も同じ様に擬似生命体を創り出している。

それにしても、ただのプログラムならあんな強くない、多分本来は別の意図があったんだ。

例えば騎士と巨神を比べると自我の強い騎士の方が強い。

思考の幅、柔軟な発想、経験の蓄積、それに他者との対話。

もしかして、ボクは何か思い違いをしているんじゃないでしょうか？

「リンディさん、今すぐ闇の書について詳しいデータを集めてください、それと過去の事件の内容をできるだけボクにください」

「え？」

「多分、今回の事件の鍵が見つかるはずです」

闇の書、ヴォルケンリッター、今回の事件。

ボクはまず彼らと同じ舞台、力をつけないといけませんね。

Side アリサ

今日はソラと一緒に海に来ていた。

時刻は朝の5:00、ずかには家に友達が来ているみたいでこちらには不参加、電話で残念そうに言ってた。

なんでも、ソラの魔法を見せてくれるらしい、それとちょっとしたお手伝いね。

「ネコ先生、結果をお願いします」

『うむ、あらかたの魔法知識は『魔導師の剣』にダウンロードしておいたから試すといい』

初めてみたソラの魔法はこの猫、魔法陣から出てくるし喋るしゲームにでてくるような感じで怖くはなかった。

魔法とかよくわかんないけど練習ってなにするのかしら？

「アリサさん、鞆の中にあるボールを二つ上に投げてください」
「分かったわ」

鞆を開いて中にあったサッカーボールを取り出す、何をするんだろ？

ソラの方は目を閉じて集中してるみたい。
両手にボールを持ってなるべく高く投げる。

「エンゼルシエル」

ソラの一言と共にソラの周りに白い球体が二つ浮かぶ、これが魔法なのね。

「ゴー！」

ソラの掛け声と共に二つの球体がボールに向かって飛んでいき、落ちてきたボールを打ち上げる。

「すごい……」

ボールは何度も球体に弾かれて真上に上がってる。
ソラは目を閉じたままだけど、どうやって正確に当ててるの？

「追加、エンゼルシエル……レディー……ゴー！」

またソラの横に四つ球体が出てくる、それが飛んでいき三つずつでボールを一カ所に留める。

「っ……ペースアップ！」

ソラが叫んだ瞬間、今まで目で追えていた球体が速くなって目では追えなくなった。

ボールの方も光に包まれたみたいになって見えなくなっている。

「……綺麗……」

縦横無尽に走る光の線に思わず見とれてしまう、それから5分ほどしてソラの集中がきれたみたいで光は空に向かって飛んで行ってしまった。

「ふう……」

ソラは軽く額の汗を袖で拭き笑顔を向けてくる、その姿はかっこよかった。

「アリサさん、ボールはちゃんと一カ所に止まってましたか？」

「ええ、完璧よ」

ソラは嬉しそうに微笑む。

「次は……」

それから三時間ほど練習が続き、私はそれをずっと見学させてもらった。

Side ソラ

今日は学校が終わってから海辺まで行って飛行訓練がてら沖に出ています、陸からかなり離れた場所でネコ先生に強層結界を張ってもらい砲撃魔法に挑む。

「ジャジメントカノン……チャージ！」

今回は「魔導師の剣」を使い、前面に環状魔法陣と魔力球を作る、そこから魔力の構成を細かく調整し結界の壁目掛け位置を調整。

「……ゴー！」

チャージが終了すると同時に放出、砲撃は結界の壁に当たり多少ヒビが入る。

威力としてはクロノさん以上ですが発動が遅いですね。

「次は収束砲撃魔法ですね……四方より集い敵を貫け……フォースバレル」

ボクの声と共に四つのミッド式魔法陣が左右に二個ずつ現れ、それらは正面ではなくもう一つ現れた前面の環状魔法陣に向かっていく。

それぞれに真つ白な魔力球が生まれ、それらをさらに大きくし、角度は上空に向ける。

「……ブレイカー！」

ボクの叫びと共に四つの魔力球を放出、前面の環状魔法陣で一つに収束加速し打ち出す。

フォースバレルブレイカーは一瞬結界で止まるが、直ぐに結界が割れ空へと消えていく。

とりあえずネコ先生にもう一度結界を張ってもらい、砲撃魔法の方を練習する。

一通り魔力が減った状態になったので海辺に戻り柔軟体操、護身術の型を一時間ほど繰り返し帰路に着いた。

翌日、朝から補助魔法の練習を開始。

身体強化魔法「プラスパワー」、高速移動魔法「ホークムーブ」、バインドは三種類、設置型の「リングバインド」、鎖状の「チェー nb ンバインド」、紐状の「ロープバインド」。

魔法を一通りこなした後、アーサーとの組み手を何度か行い一度家に帰ってシャワーを浴びてから学校へ。

学校から帰るとすぐに広場で型の復習を行う。

どうやらボクの身体は普通の人の何倍も回復速度が高いみたいで、筋肉痛もなく徐々にだけど筋力が上がっているみたいです。

途中で買ったミルクティーの空き缶を握ったら普通に潰せました。

夜、リンデイさんから集めてもらった過去の事件の内容を見ながら、やはりと確信しました。

過去の主達は蒐集対象に対して限界まで蒐集しています、それに対して今回は管理局員にも被害があるにも関わらず死者はゼロ、さらに蒐集対象はリンカーコアを持つ魔法生物が中心、さらに一連の行動から考察するに主である人物は動いていない。

感情面が豊かなのは、おそらく主である人物が非人道的な行動をよしとしていないからだと思います。

「……あとはユーノさんが調べている闇の書の過去ですね」

ボクは漠然とした予感を胸に眠りにつきました。

翌日、ボクは特訓をお休みして放課後に皆でケータイを買いに行きました、ボクはデザインなどや機能を見て気に入った青色の折りたたみ式のを買いました。

早速皆さんのアドレスを交換して登録しました。

カメラを使って、待受にアリサさんとすずかさんの写真を使ったら二人とも真っ赤になっていました。

お昼休み、ご飯も食べ終わって皆と談笑しています。

「そういえばはやてちゃん……私の友達なんだけど、その子が入院しちゃったんだ」

すずかさんが悲しそうにそう漏らしました。

「病気なんですか？」

「うん、歩けないみたいでたまに入院するんだって言ってたよ」

その後、皆でお見舞いに行くことに決まって、カメラで画像を送りました。

お見舞いは明日なので今日は帰りに特訓です！

S i d e シャマル

すずかちゃんのメールを見て混乱してしまった。
まさか敵である三人がすずかちゃんの友達で、しかも明日お見舞いに来るなんて！

シグナムは冷静に対処すれば良いって言ってたけど、もしもがあってはやてちゃんに何かあったら……。

「とりあえず……様子見はしないと！」

S i d e ソラ

ボク達は病室に案内されて中に入る、中にいた女の子は驚いた後笑顔で迎えてくれました。

「はじめまして、八神 はやて言います、よろしくな」

「ボクはソラ・フォードです、よろしくお願いします」

「私はアリサ・バニングスよ」

「私は高町 なのはだよ」

「私はフェイト・テストロッサ」

自己紹介が一通り済んで、談笑に入る。

特にボクがお二人を助けた話や告白の話になると皆赤くなりながらも楽しそうに話しています。

「で、ソラ君はどっちを選ぶん？」

「え？ 二人ともはダメなんですか？」

ボクの一言にアリサさんとすずかさん以外が驚きの表情をしています、お二人は納得の表情です。

「どうなんやろ？ ええんかな？」

「さ、さあ？」

「うー？」

よくわかりませんが、とりあえずボクはアリサさんもすずかさんも大好きですから選べません。

「せやけど、ソラ君で女の子みたいやな」

「可愛い服とか似合いそうだね」

「そうね、一回着てみない？」

「いいですけど？」

次来るときは女の子の服を着て行くことになりました。

第12話『特訓は明日の為に』（後書き）

（あとがき物語の館）

灰猫「やってきました、今回はアニメだと8話くらいですね」

ソラ「7話は話がちょこつと出るだけです、結構道筋が変わっていますね」

灰猫「それは俺の構成ミス、でもなんとか繋げられるはず！」

ソラ「次回はお見舞いとか日常が続きますね、予定では2〜3話くらいです」

灰猫「実はもうすぐ10万アクセスが達成されるので、もしリクエストがあれば書きたいと思います」

ソラ「感想かメッセージで受け付けていますのでよろしくお願いします」

灰猫「次回はまだ未定なので予告はなしです」

ソラ「では皆さん、また次回お会いしましょう！」

第13話『嵐の前の静けさ』（前書き）

前回、2〜3話とっていましたが、この話だけになりました

今回はあとがきにゲストがきております

感想・ご意見・10万アクセスリクエストなどお待ちしております

第13話『嵐の前の静けさ』

あれから、ボクは一度だけ戦闘にできました。

しかしヴォルケンリッターの皆さんは既に離脱した後、残っていたのは蒐集された魔法生物だけでした。

今日は日曜日、アリサさんの家で着替え中です。

前はやてさんが言った事でアリサさん達がボクに女の子の格好をさせたいみたいです。

「よし……」

でもアリサさんの服もすずかさんの服も少し大きくて合いませんでした。

だから「想像」を使って服を創りました。

今回は上着は白いセーターに薄い青色のカーディガン、それと赤いロングスカート。

うーん、ボクとしては正装で似たような服装をしているので、「女の子」の格好という感じがしませんね……。

とりあえず髪を留めているゴムをリボン（若葉色）にしてみました。

「ソラ、終わった？」

「どうなってるんだろ？」

「あ、今終わりました」

「……うわぁ」

二人が目を丸くして驚いています、何故でしょうか？

「似合うとは思ってたけど……」
「ここまでとは思わなかったよ」

何だかここまでじっくり見られるとちょっと恥ずかしいですね。

Side すずか

いつもとは全然違う雰囲気のスラ君、多分最初にこの格好を見た
ら女の子と勘違いするよ。

「うーん、ボクとしては正装で似たような服装をするので違和感な
いです」

「そういえばスラって別の世界の人だったんだっけ？」

「正装がそういう服って……大人も？」

「はい」

うーん、おじさんとかが着ていたら嫌だなあ、スラ君みたいに綺
麗な顔なら似合うんだけど。

Side はやて

すずかちゃん達がまたお見舞いに来てくれてホンマに楽しい。
せやけど、スラ君がホンマに女の子の格好してくるとは思わへん
かったわ、似合ってはいるんやけど可愛いすぎるやろ！

「そういえば、すずかちゃんやアリサちゃんはソラ君とキスとかはしたん？」

興味本位で聞いてみたら二人とも真っ赤になって固まってしまった。

あかん、地雷踏んだかもしれへん。

「キスはしていませんね……一緒に寝たことはありますけど」

ソラ君、アリサちゃんとすずかちゃん見てみい、真っ赤やで？
追い打ちかけてどないすんねん。

「ソ、ソラ！ 恥ずかしいからあんまり言わないでよ！／／／」
「うう…顔が熱いよ…／／／」

ソラ君はほにゃとした顔でわろうつるだけ、自覚ないんやな。

「……キスはした方がいいでしょうかね？」

ちよつ、そこで爆弾落とすんかい！ どないやねん！

「……／／／」

「アリサちゃん、すずかちゃん？ どうして真っ赤で黙るんや？」

二人ともまんざらでもない表情やな……、めっちゃ乙女の顔やん。

「……ほならもう、ここでしてまえばええやん」

ヤケクソ気味やけど、ちよう興味あるし、二人とも嫌やないんや
ったらちよつと見てみたいわ。

「は、はやて（ちゃん）！？」「」

「ええやん、私も後学の為に見てみたいんやしww」

ソラ君の方は嫌そうやないしな。

「でも……流石に見られながらは恥ずかしいわよ／＼／」
「うう／＼／」

なんや、二人とも可愛い反応やな。

「ふふ、あはは」

「「「???」」」

なんや、ソラ君壊れてもうたんか？

そつえばソラ君が声だしてわろてるとこ初めて見たわ。

「あ、ごめんなさい、ただボクは幸せだなと思って」

眩しいくらいの笑顔で答えるソラ君に、思わず顔が熱くなるんを感じる。

「ふふふ……うん、ボクは幸せです……」

涙を流しながら泣いとるソラ君は、ホンマに幸せそうやった。

Side ザフィーラ

疲れた身体を休めながら俺はあの少年を思い出していた。

あの時、気迫と持っている力は本物だった、ヴィータがたじろいたのもわかる。

あの少年に足りなかったのは経験だ、もしあの少年が戦いというものをもっと経験していたなら俺は負けていただろう。

「むっ……」

近づいてくる臭いと音に反応して立ち上がる。

しかし、あの青年は異常だった……。

無防備とも思える動きには一切の隙はなく、言葉一つ一つに有り得ない程の力があつた。

歴戦の勇者でも、あの青年のまえでは子供のようだ。

「だが、それでも」

俺は主はやての為に止まる訳にはいかん。

俺は盾の守護獣ザフィーラ、例えこの身朽ち果てようとも負けるわけにはいかんのだ！

S i d e グレாம்

画面に表示されるユーノ少年が調べあげた闇の書のデータ、たった一週間で我々が調べたデータを殆ど調べ上げてしまった。アリアにロツテは今デユランダルを取りに出かけている。

「ふう……」

あれから11年もの月日がたっているのか、通りで身体がついて
いかないわけだ。

ようやくだ、ようやく終わるのだ……。

「……………しかし」

このソラという少年、この少年の邪魔が入ると色々とまずい事になるだろう。

油断していたとはいえクロノを打ち負かす程の力を有しているのは間違いない、それにあのヘラクレスという使い魔から放たれた砲撃魔法のランクはSランク、アリアやロッテがもし彼と正面から戦うのは避けた方がいいだろう。

決行は聖なる夜、その日に全てを終わらせよう。

Side リンディ

前回の市街地の映像を見ながらため息をつく。

ソラさんからの情報で青年がいたらしいのだけど、サーチャーの映像は軒並み何かの電磁波で不鮮明、音声データも殆ど雑音のみで青年を特定できない。

唯一の映像は超遠距離からのモザイクのかかった映像のみ、これも個人を特定をする事はできない。

「いけないわね……………ソラさんに罰を与えるわけにはいかないし……………」

犯人を取り逃した事を責めても、この事件は解決しない。

ソラさんに渡した資料から彼が導き出した推測に私は少し戸惑いを覚える。

「今回の闇の書の主は魔導師ではなく、一般人の可能性が高く、地球から離れる可能性は低い……ね」

闇の書を理解し、ヴォルケンリッターについてもユーノさんの報告とほぼ一致していますし、なにより彼は恐ろしいほどに観察眼に長けているし……。

戦闘に関しても、最近の彼の動きはクロノと模擬戦をした時とは雲泥の差ですし。

最近では守護騎士達も目立って動かなくなってますし……。

「母さん、話したい事があります」

「どうしたの？」

クロノが沈黙な面持ちで私にデータを渡して、正面に座る。
データを開いて私は息をのむ。

「まさか……あの人が？」

「間違いありません……ボクはそれを確かめる為にリハビリが済んだ後、聞きに行くつもりです」

アースラも三日後にはここに到着する、今日は21日ですから24日まであまり状況が動いて欲しくないわね……。

「三日後です、その日ならアースラも到着し万全の体勢で挑めます」

あら、私が言うまでもなかったわね。

「ならお願いね、クロノ執務官」

「はい、艦長」

第13話『嵐の前の静けさ』（後書き）

くあとがき物語の館く

灰猫「うお！？　なんか色々詰め込みすぎて訳わかんない！？」

ソラ「落ち着いてください」

灰猫「すまない……、さて今回はゲストに『魔法少女リリカルなのは』七つの大罪より神童一真さんとそのデバイス神無さん、そして桜ノ宮アリスさんです！」

一真「ねみい」

神無「テンション低いわね……」

アリス「へえ、けっこう綺麗だね」

ソラ「いらっしやいませ！」

一真「あ？　ガキじゃねえか、ちっせえな」

アリス「たしかに……9歳でも小さい方だね」

灰猫「ソラ君はなのは以下の身長だからね……」

ソラ「うう、大きくなりたいです」

灰猫「うん、それ無理」

固まる一同

灰猫「だって、ソラ君今から肉体の魔改造してるから、骨の成長が
阻害されて身長伸びないもん」

ソラ「……………」

一真「あ……………なんだ、千歳も似たようなもんだし気にすんなよ？」

神無「ねえ、さっきからソラ君の魔力が上がり続けてるけど大丈夫
なの？」

アリス「何？ 確か感想では該当する罪はないはずよね？ 『憤怒』
に該当するくらいの怒りじゃない？」

ソラ「大丈夫です、ボクは怒って……いません……、でもお仕置
きはしましょう？」

灰猫「ちよつ、まつ」

一真「たしかに『罪』ではない感情かもな……………ダウンーも素足でに
げるだろうよ……………」

神無「あ、計測限界突破……………尚も上昇中」

アリス「『罪人』以下ではあるけど……………って、まだ上がるの？」

灰猫「説明しよう！ ソラ君は『神童』と呼ばれる人の身でありながら神の子と同等、もしくはそれ以上の力を手に入れる事が出来る潜在能力をもっているのだ！」

一真「あぶねえから離れるか……神無、今ソラはどれくらいの魔力だ？」

神無「あゝ……予測値だとSSSが三人分？」

アリス「『罪』解放した方がいいかな？」

ソラ「大丈夫です、周りには被害出しませんから……さあ、罰を受けましょうか？」

灰猫「あ、死ぬかも？」

ソラ「神滅……」

灰猫「それダメ!？」

ソラ「……断罪光剣」

作者は空へと超極太の収束砲撃とともに消えて逝った

解説：神罰・断罪光剣 しんばつ・だんざいこうけん ソラの奥義の一つ、腕に溜めた魔力をもって、限界まで収束した砲撃を放つ、本来は連携に組み込む決め手、見た目は光の刃、速度は光速なため実質直線上にいた場合、発動後の回避は不可能、本来はSSSの攻撃、出てくるのは闇の書との対決時の予定

一真「壁が消滅したな」

神無「私、何も見なかったわ」

アリス「この子、本編で本当にコレ撃つの？」

ソラ「お仕置き終了です♪」

ゲスト『（可愛い顔してやることがえげつない）』

ソラ「そろそろ時間なので次回カンペです」

一真「おう…」

クリスマスプレゼントを買ったために放課後、アリサ達と買い物に出かけるソラ」

神無「そして、次の日にお見舞いに行った時、思わぬ出会いをする」

アリス「それは必然の出会い、避けられない出会い」

ソラ「次回、魔法少年の物語第14話『サプライズ』へ」

一真・神無・アリス・ソラ「レディー………ゴー！」

ソラ「お土産のハバネロキャンディーに翠屋のシュークリームと羽

布団、あといつか帰ってくる千歳さんへ一真さん人形です」

一真「……この人形、枕抱いてるな」

ソラ「よく出来ていますか？」

一真「ああ……デフォルメされてるけど似てるな」

村正様、ありがとうございました！

こんな感じで大丈夫でしたでしょうか？

第14話『サプライズ』（前書き）

グダグダになってしまった……

感想・10万リクエストお待ちしております

今回もあとがきにゲストが来ています

第14話『サプライズ』

今日は12月23日、明日はクリスマスイヴと言うイベントがあるそうです。

よく分らないですが、プレゼント交換とかをするらしいです、ボクはお小遣をリンディさんから貰ってアクセサリーを作るつもりです。

ビーズとアクリルワイヤーで作る簡単な物ですが、贈り物は手作りに限ります。

「あ、ソラ君はもう買ったんだ」

「ソラ、何を選んだの？」

「秘密です」

今日はお二人と一緒にはやてさんへのサプライズプレゼントを買いに来ています。

もう辺りが暗くなり始めていますから、そろそろお別れの時間ですが。

「明日になればお渡ししますから、ね？」

「それなら楽しみにしてるわ」

「そうだね、じゃあソラ君、また明日」

鮫島さんが迎えにきたので、手を振ってお別れします。さて、ボクも家に帰ってプレゼントを作りましょう！

細かいビーズをアクリルワイヤーに通しながら、一つ一つ丁寧に作ります。

様々な色を組み合わせながら、

アリサさんとすずかさんへのアクセサリーにはビーズの一つに「想像」で創った宝石を混ぜて編み上げます。

宝石には微量の魔力があつてGPSの代わりにもなります、少なすぎてボクくらいしか分からないと思いますが。

「ソラさん、もう12時よ？ そろそろ眠った方がいいわよ？」

「あ、はい」

もうそんな時間ですか、ではもう寝ないといけないですが……。

「もう少しだけ……あと二つなので」

「分かったわ、ほどほどにね？」

さてと、あと二つ。

頑張つて作つてしましましょう！

朝の登校時間、皆さんで歩いていきます。

結局、昨日は2時までかかってしまい、少し眠いです。

「ふぁぁ……」

「ソラ、眠そうね」

「昨日夜遅くまで何かしてたみたいだから、そのせいじゃないかな？」

「そうなんだ、ソラ君何をしてたの？」

「あ、皆さんへのプレゼントを作っていたんです」

それで思い出して手提げ鞆から箱を取り出す。

「これはアリサさん」

「あ、ありがとう」

「これはすずかさん」

「ありがとう」

「これがなのはさんとフェイトさんのです」

「「ありがとう」」

中に白いリボンをしてある箱を確認してから、皆さんが箱を開けて中を見るのを待ちます。

「わあ……ビーズブレスレットだ」

「綺麗……それにイニシャルまで……」

「これを昨日作ってたんだ」

「にやはは、上手に作ってあるね」

皆さんには喜んで貰っているみたいですね。

アリサさんのはクリームイエローを基調とした物で、イニシャルの所にはワインレッドのビーズ。

すずかさんのは薄い青色を基調とした物で、イニシャルの所には濃い紫のビーズ。

なのはさんのはホワイトブルーを基調にした物で、イニシャルの所には桃色のビーズ。

フェイトさんのはライトグリーンを基調にした物で、イニシャルの所にはサンイエローのビーズ。

皆さん早速腕にはめてます、気に入って貰ったみたいで嬉しいです！

放課後、皆で病院に向かいます。

主治医の石田先生に許可を得てプレゼントを渡しに行きます。

「あれ？」

「ソラ君、どうしたの？」

「いえ、中にいる方の気配に覚えがあるんです」

中から出ている四つの気配、一つははやてさんで間違いありませんが、残り三つの気配、どこかで……。

「……まさか」

「入ればわかるでしょ？ 失礼しまーす」

……それもそうですね。

S i d e シグナム

入ってきた子供達に思わず身を乗り出してしまつ。
敵であるあの三人と鉢合わせるとは……。
くっ、あと一歩という所で……。

「初めまして、ソラ・フォードと言います、ご家族の方ですか？」

……何？

こいつは今何を。

「そやよ、皆もソラ君やなのはちゃんやフェイトちゃんは会っくんは初めてやる？」

「……え、ええ！ 私はシャマルです！」

「……シグナムだ」

「……ヴィータ」

ソラ少年は微笑みながら鞆の中を探って何かを探している。

「今日はどないしたん？」

「「セーの……サプライズプレゼント！」」

二人がコートの下に隠していたプレゼントを主はやてに渡している。

「ボクからも、これです」

「わあゝ、ホンマ……ホンマありがとう」

主はやてはまずソラ少年の箱を開ける、中から出てきたのはパールホワイトを基調として、イニシャルの所に黒い色のビーズを使ったプレスレット。

手作りらしく、主はやては嬉しそうにそれを抱きしめる。

……私はソラ少年から目を離さない、純粋な体術ならあのザフィラですら危険視した少年だ、油断はできません。

Side ソラ

驚きました、まさかはやてさんが闇の書の主だったとは。

先程からヴィータさんがこちらを睨んでいます、何故か顔が少し赤いです、何ででしょう？

それに、シグナムさんもボクの動きを見逃さないように監視しています。

「ソラ君、手先器用なんやね？」

「はい、編み物もできますよ？」

まあ、今の所は周りの皆さんに被害がありますから動こうとは思いませんし、それに、はやてさんはどうやらかなり危ない状態。

リンカーコアの縮小による身体への負担が、足の麻痺の原因のようです。

かなり長い間はやてさんには闇の書の影響がかかっていたみたいです。

「ほなら、今度教えてな？　ずっと横になつとるんは意外と暇なんよ」

「いいですよ」

さて、と。

どうやって交渉しましょうか？　はやてさんに現状を説明してもいいんですが……。

シグナムさんはもしかしたら力ずくで行動を起こしそうですね。

病院を出て、アリサさんとすずかさんを見送ってから、後ろをつけていたシャルさんに連れられてビルの屋上にきました。

「……もうすぐで……悲願が達成されるのだ」

最初に口を開いたのはシグナムさん、声が若干震えているのは感情を押さえているからなのでしょう。

「邪魔をするなら、例えばはやてちゃんのお友達でも容赦はしません！」

それを聞いて叫ぼうとしているのはさんを手で制して、言葉を紡ぐ。

「貴女達は間違いを犯しています、闇の書……いえ、今の夜天の書を完成させた所ではやてさんは救われない」

「なっ……」

デバイスを起動しようとした三人の動きが止まり、ボクに視線が集中します。

「歴代の主の誰か、はたまた複数人の改変により、今の夜天の書は暴走状態です、これは管理局のデータベースから見つかった過去の資料で判明した事実です」

そして、最後にこれからについて話そうとした瞬間、衝撃と共にボクの身体が吹き飛ばされ壁に激突する。

「かはっ……ぐあ……」

気配も……何もない所からの……蹴り？

「やはり君は危険だな……」

誰……？

「さて、残念だが終わりだ」

S i d e なのは

ソラ君がいきなり吹き飛ばされたあと、いきなり現れた二人の仮面をつけた人達が現れて、驚いて固まっていた私達はバインドにあっさりと捕まってしまいました。

「貴様ら……なんのつもりだ！」

「忘れたのか？ 闇の書の足りないページは不要となった守護騎士自らが差し出し完成させる……今までも何度もあったはずだ」

響く叫び声……、シグナムさんが、ヴィータちゃんが、シャマルさんが、消えていく。

「お前達には少し大人しくしてもらおうか」

私達はクリスタルケージに閉じ込められてしまい、何とかバインドブレイクを使おうとするけど、固くて中々できない。

しばらくして黒い紫色の魔力の柱が立ち、それと同時にバインドとケージを壊して外に出る。

ソラ君は辺りには見当たらない。

どこに行っただろう？

第14話『サプライズ』（後書き）

〈あとがき物語の館〉

灰猫「さて、今回も始めました」

ソラ「あ、ちゃんと帰ってこれたんですね」

灰猫「あれは痛かった……手加減所か本編以上の攻撃力だからね……」

ヒスイ「お邪魔するぞ！」

灰猫「邪魔するなら帰って」

ヒスイ「はい……って、おい！」

灰猫「ノリツッコミありがとう、今回のゲスト『魔法少女リリカルなのはRainbow Flower』虹ノ花、此処に！」より、主人公のヒスイ・リヴァイアス君です」

ヒスイ「そーいや、前回の穴そのままなのか？」

ソラ「アレですよ？」

部屋の半分が吹き飛んでいる場所を指差し

ヒスイ「うげ……」

灰猫「よく生きてた俺」

ソラ「ちゃんと非殺傷設定ですから」

灰猫「あと、皆さんがソラ君をチートと言いますが、本物のチート野郎はまだ他にいるんだよ？」

ヒスイ「は？ この子以上？」

灰猫「ああ、シスコンの……」

??「雷槍・鬼神咆哮……」
らいじゅん・きしんほうこう

灰猫「ぎゃ……ああああああ……」

突然現れた男の放った攻撃に吹き飛ばされた

解説：雷槍・鬼神咆哮

純粹な電気を固まりを制御し槍の形にした攻撃

魔法ではなく、ランク付けはできない、箆められた電力は約10

00GW

??「さて、帰るか」

言葉と共に消える

ソラ「稲妻でしたね」

ヒスイ「敵に回したくねえ」

ソラ「とりあえず次回予告カンペです」

ヒスイ「ああ

ついに覚醒してしまった闇の書、その時ソラは仮面の男に捕まっていた」

ソラ「ボクはどうにかしてはやてさんを助けに行きたい」

ヒスイ「そこに現れる救世主」

ソラ「次回魔法少年の物語第15話『天使VS墮天使』へ」

ヒスイ&ソラ「レディー……ゴー！」

ソラ「お土産のラフランスゼリー（四つ）と出演依頼書です」

ヒスイ「ありがとう、依頼書の方は作者に渡しておく」

抹乃憂谷様、ありがとうございました！

第15話『天使VS堕天使』（前書き）

さて！

前回の投稿後、10万アクセスを迎えました！

読者の方々に感謝を！

今回のあとがきにてその企画を発表します

第15話『天使VS墮天使』

目が覚めるとどこかのビルにバインドとクリスタルケージに閉じ込められた状態です。

「――」

外から何か声が聞こえます。
とりあえず此処から出ないことには始まりませんね。

「竜咆哮っ！」

体に魔力を巡らせ、それを一気に解き放つ全包围攻撃、ただ隙が大きくあまり使い所はありませんが。

「何!？」

「ふう……」

軽く体を動かして調子をみてみましたが、ダメージはあまり残ってないみたいです。

右手を突き出し、左足を半歩引いて構えを取り、相手の動きを見ます。

「見てびつていたか？」

「だが、我々の計画を達成するには少々邪魔な存在だ、大人しくしてもらおう」

二人は中々の実力者みたいです、これはキツイでしょうか？
どう出し抜こうか考えていると、二人の足元から光が上りバイン

ドが二人を拘束しました。

「ストラグルバインド、射程が短く発動も遅い、使い勝手が悪い物だが……こういう場合には役に立つ」

二人から光が漏れ、姿が変わりました。
変身魔法だったんですか。

「こんな魔法、教えてなかったはずだったのに……」

「一人でも精進しろと言ったのは君達だろ…… ロツテ、アリア」

どうやら、顔見知りのようですね。

「ソラ、君は行くといい」

「……はい、『天の翼』『魔導師の剣』」

天の翼をはためかせ、ボクは光が交差している場所を目指す。

Side 闇の書・管制人格

この四人、連携は中々だが私にとってはあまり意味はない。
経験・魔力・火力、どれをとっても私には届かない。

「刃以て、血に染めよ、穿て、ブラッディダガー」

計16のブラッディダガーを放ち、観察する。
防いだみたいだな、魔力はまだあるようだが、脅威ではないな。

「っ！？」

次に移ろうとした瞬間、正面から閃光が私のすぐ横を通り抜ける。閃光の放たれた方向には、私のスレイプニールとは逆の白い翼を持った少年がいた。

S i d e ソラ

どうやら、はやてさんが夜天の書を起動させてしまったみたいですね。

「貴女が管制人格ですね？」

「……ソラ・フォードか」

「ええ、そうです」

こちらの質問には答えませんが……ですが。

「そのブレスレットははやてさんに贈った物です……なら、貴女ははやてさん……しかし、暴走状態ではやてさんの意識は沈んでいるみたいですね」

「……」

沈黙は肯定、どうやらあまり話していただくはないようですね。

「はやてさんには起きてもらわねばなりません……」

「主は我が内に……安らかな夢に……」

「ふざけないでください」

「っ！？」

自分でも驚くほど冷たい声が出ました。
怒りではなく、悲しみ。

「貴女の言葉には諦めしか感じられません、だから全力で……ボクがだせる限界まで出し切ってもはやてさんに起きてもらいます！」

S i d e o u t

ソラは目を閉じ、いつもの構えとは違う構えをする、剣を逆手に持ち突き出すのではなく軽く前に出すだけ、左手は腰に溜め、両足を肩幅に開く。

足元に浮かぶのは白く光り輝くミッド式魔法陣、普段より強く輝きその気迫もザフィーラと戦った以上だ。

神童と呼ばれる人間は、敗北・経験・訓練により爆発的に成長する。

「この気迫、それにこの魔力……同一人物か？」

この数週間、ソラはアーサーなどとの戦闘訓練で魔力や戦闘技巧は格段にレベルアップしている。

さらにアーサーに指示するのはソラ自身、「想像」で生まれ自我が存在するとはいえ完全自律行動はできない。

故にアーサーの情報を元にソラ自身の剣の技巧も上がっていった。その結果が今のソラの気迫と魔力の正体だ。

「エンゼルシエル……レディー」

ソラの周りに浮かぶ魔力球、その数20！

「ゴー！」

「……っ！」

反応が遅れた管制人格は咄嗟にパンツァーヒンダネスを発動、全体を覆い防御する。

誘導弾はなのはがヴィータにしたように何度も障壁に当たり削っていく。

「ペースアップ！」

駄目押しに更に速度を上げる。

しかし、時間が経ち冷静さを取り戻した管制人格は障壁をバーストし誘導弾を消す。

「シュヴァルツェ・ウィルクング」

スレイプニールを羽ばたき、高速でソラへと迫る管制人格、しかし、ソラも焦りはない。

「プラスパワー！」

身体強化魔法を発動、即座に逆手に持っていた剣を振り一撃目を防ぐ。

拳と掌ていがぶつかり合い、一瞬動きが止まる。

「ブラッディダガー」

「エンゼルシエル」

赤と白がぶつかり閃光が辺りを照らす、戦況は五分に見えるが僅かに管制人格が有利に戦いを運んでいる。
しかし、ここにはまだ魔導師がいる。

「はあああつ！」

「っ！」

サイズモードで切り掛かるフェイト、高速機動戦闘を得意するフェイトが隙を突いて乱入。

即座に張られるシールドに防がれるが、間髪入れずにソラの蹴りが迫る。

それを更に張ったバリアで防ぐが。

「アクセルシューター！」

桃色の誘導弾がから空きになった管制人格に着弾。一旦距離を取るソラとフェイト。

「咎人達に、滅びの光を……星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ」

S i d e ソラ

「これはなのはのスターライトブレイカー……蒐集された時のだ！」
「至近で食らったら防御の上から貫通しちゃう……離れないと！」

管制人格の頭上に現れる巨大な桜色の魔法陣、術式は広域、防御貫通効果もありますね。

「……………」

今まで目の前の戦闘に集中していましたが、この近くにあの宝石の反応！？

そんなはずは……、この封鎖結界は魔力を持つ者を対象にした物のはず。

まりよく？

「まさ……か……！？」

微量とはいえあの宝石は魔力を籠められていました、それを身につけているとすれば……。

「ホーク……ムーブツ！」

最大速度で反応のある場所まで一気に飛ぶ。

もう、失いたくない……失いたく……ないんだ！

ああ、理解した。

ボクは罪人だ。

アリサさんの前でも。

すずかさんの前でも。

ボクはまだ全てを見せていない。

だから……、隠すのは止めだ。

真っ直ぐなボクを。

大好きな二人だけでも。

受け入れて貰えるか解らないけど。

今は、二人を助ける！

第15話『天使VS墮天使』（後書き）

くあとがき物語の館く

灰猫「さて、とりあえず前半戦終了ですね」

ソラ「あのく、ボクの心がまる見えなんですけど……」

灰猫「それはいつもの事で、中身については実は前から決めてただけだね、ソラ君は素直で優しい、けど本当に心から大切と思った相手には飾らない自分やあいつた言葉を使うんだよね」

ソラ「……自覚はないんですが？」

灰猫「ああ、どちらも素だからね」

ソラ「そうなんですか」

灰猫「それに、敬語が無くなったソラ君は強くなるよ？ 遠慮がなくなるからね」

ソラ「では次は？」

灰猫「うん、全力ではなく遠慮なしの全力での戦いだね、その前に10万アクセス記念の『幻惑VS白き翼』だけだね
朧木様から許可を得たのでコラボ企画ですね」

ソラ「ではまた次回にお会いしましょう！」

【10万アクセス記念】『幻惑VS白き翼』（前書き）

日頃アクセスされている方に多大なる感謝を

このような拙作ですが、これからもどうかよろしくお願いします

『10万アクセス記念』『幻惑VS白き翼』

とある管理世界、そこにソラは立っていた。

周りは廃屋ばかりで人影はなく、また人の気配も何もない。

原因不明の次元震で住民は避難しているため、ソラは辺りを見渡すが状況は変わらない。

ロストロギアに覚えてたての封印魔法をかけようとした所まではソラは覚えていたが、何故ここにいるのかがわからなかった。

先程、何人かの魔導師が先走って攻撃をしかけてきたが、ソラは出来るだけ手加減して全員を気絶させていた。

「Hello、何をしているんだ？」

「にゅ？」

突然現れた少年に焦る事もなくソラが振り向く、宙に浮いているのは金髪で顔の隠れた少年、頭には狐のお面、服は黒いマントのバリアジャケット。

少年……ロウ・アイアスはソラを観察する。

「（事前情報だと、格闘戦を得意とするミッド式魔法を使うラング級魔導師。しかも誘導弾も中々上手いときたか……妬ましい）」

ソラが封印しようとしたロストロギアは名を「シュレンティンガー」といい、あらゆる可能性のある世界にランダムで飛ばしてしまう次元干渉型ロストロギアである。

ソラが飛ばされたのはロウが存在する別のリリカルなのはの世界、ソラはアースラから次元震の原因として捕縛しようとされたが今回の経緯である。

「……個人的に不愉快なので捕縛する」

「……貴方は敵ですか？」

ソラの目が細められ、気迫が漏れ出る。

その変化に咄嗟に距離をとるロウ、まさか自分とそう変わらない歳の変わらない少年からこれ程の気迫が出るとは思わないだろう。

「OK……さあて、行くか……『魔喰』発動」

周りに球形の魔力領域を展開するロウ、ソラは周りを見渡し頷く。

「魔力収集タイプの魔力領域ですね……素晴らしい術式構成です」

眼光鋭くロウを見るソラ、並の魔導師なら飲まれそうな程の気迫で威嚇をしている、だがロウは揺るがない。

内心はドキドキだが。

「（Sit！ 何だコイツ！ 魔力だけじゃない、確かな実力からくる気迫だ、しかもすげえ見識眼……やっかいだな）『夜鷹』！」
「エンゼルシエル！」

誘導弾がロウの放った夜鷹に向かって飛ぶが夜鷹に組まれている自動回避能力により散り散りになりソラへと殺到する。

「っ……竜咆哮！」

咄嗟に体内の魔力を放出、夜鷹をその魔力で吹き飛ばす！
さすがに全包围攻撃を回避することができず夜鷹は消滅した。

「（バカ魔力が！ こりゃ余裕はないな、アレを使うしかないか？）

「（戦い慣れていますね……術式構成が難しくて力押しでしか対応できません）」

『枯渴』を発動させ領域内に高周期魔力波を発動させ誘導弾を消滅させると同時に、ソラの動きを鈍らせようとする。

「はっ！」
「！？」

しかし、ソラの動きは変わらない。
背中に『天の翼』を生み出し空を翔けてロウに迫る。

「フォルテ、防御」

現れた紫のシールドでソラの放った蹴りを防ぐ。

「プラスパワー！」

防がれた瞬間に身体強化魔法を発動、足を引いて体を回転させ回し蹴りを放った。

「『朧月』……」

ソラの攻撃に自らの障壁は破られるのを察知、即座に高速転移で5mほど距離をとる。

「ホークムーブ！」

しかしその距離を高速移動魔法で一気に詰める、そしてスピード

を乗せた掌ていを放ち、ロウの腹に当てる吹き飛ばす、だが異常な固さで大したダメージはなさそうに見える、ソラも次に移るためまた移動魔法を使用しようとする。

「（おいおい……ちっちゃい体してる癖にめちゃくちゃ重い攻撃だな……）だが、捕らえた！『水月』！」

突進するロウ、しかしソレに対して疑問を感じ、すぐさまそれが幻と認識し本体を探すソラ、しかし、水月で編まれたロウから夜鷹が現れソラを捕らえた！

「（油断してしまいました……）神罰・轟天雷鳴！」

「（おいおい、属性付与攻撃魔法かよ……難易度SS+って所か……）これはやばいな……『ムラクモ』……」

体内の魔力を電気変換術式で雷に変え放電の要領で夜鷹を破壊、さらに魔力を高め右腕に収束する。

狙うは何をするでもなく立ったままのロウ。

「神罰・断罪光剣！」

放たれた光の奔流はロウを飲み込む、もちろん非殺傷設定だが威力は瞬間とはいえSSSをたたき出す魔法、到達速度は光速なため一瞬。

狙い放たれれば回避不能、防御不能の一撃、これを凌ぐ為には膨大な魔力が強靱な精神力、または発動の前から潰さなければならぬ。

「（倒した？ と、言いますか……やり過ぎでしょうか？）」「いやあ、驚きだ。死ぬかと思ったよ」

「っ!？」

突然の後ろからの声に飛び退く、そこには無傷のロウが立っていた。

「（発動前に逃げられた？ いえ、違いますね……あの方はそういった魔法は使っていないはずです）」

「さて……と……『泡沫』……ほれ！ 剣の大群だぞ」

ロウが呟くと同時に現れる雨のような魔力剣の大群、それはクロノの『スティーングブレード・エクスキューズシフト』を再現したもの、『泡沫』はロウの記憶を元に精神世界から引き出した魔法である。

ソラは冷静にそれらを見つめ、同時に笑みを作る。

「（さてと、今のうちに後ろにまわっ……影?）」

「夢は現……現は夢……全て幻ですか……」

「（気づかれたか! ん?）……はああああ!？」

空を見上げるとそこにいたのは全身を鎧に包まれ、翼は剣でできたドラゴン、体長200mを超える巨大な身体から発せられる魔力は膨大。

剣竜・カラドボルク、その主攻撃は巨大な『収束魔力砲撃』、対象を貫く最強の技。

「今回は引き分けにさせていただきます、放て剣竜・カラドボルク……ボクごと!」

瞬間、世界が閃光と轟音に包まれた。

後の調査も虚しく、ソラは発見されず、
気絶したロウは回収され
た。

【10万アクセス記念】『幻惑VS白き翼』（後書き）

〈あとがき物語の館〉

灰猫「と、10万アクセス記念『幻惑VS白き翼』をお送りしました！」

ロウ「……カラドボルクは卑怯だ……」

ソラ「あはは……あのあとボクもこちらに戻っていました」

灰猫「さて、さらに今回はゲストも来ております！

『リリカルなのはフロンティア』魔導士と少年達の記録』より、
面林孝俊君です！」

孝俊「よろしくな……表のドラゴンは何だ？」

ソラ「番犬ですよ？」

ロウ「非常食？」

灰猫「また顎痛めるよ！？」

孝俊「賑やかだなあ」

ソラ「あ、孝俊さん、今回の戦いはどうでしたか？」

孝俊「まずまずじゃないか？ 二人ともまだ10くらいなのにな

り強いしな」

ロウ「見抜かれてしまいましたけど」

ソラ「引っ掛かってしまいました」

孝俊「ロウは油断だね、ソラは少しばかり感覚に頼りすぎだな」

ロウ「才能がうらやましい」

ソラ「努力が足りませんでした」

孝俊「これからだな二人とも」

灰猫「（さすが年上、面倒見がいいな） さて、次回予告よろしく」

孝俊「よし

感情を剥き出したソラは二人を助ける為に翔ける」

ロウ「迫る攻撃にソラはどうするのか」

ソラ「次回、魔法少年の物語『白い翼と覚醒』へ」

孝俊＆ロウ＆ソラ「レディー……ゴー！」

ソラ「孝俊さんにはお土産として牛肉のしぐれ煮と通常の倍の重さのバットです」

孝俊「ありがとう」

ソラ「ロウさんには蝗の佃煮とキビヤックです」

ロウ「キビヤック？」

灰猫「アザラシの中に海鳥を入れて、土中で長時間発酵させた漬物だよ、こう、尾羽を筆って啜るんだよ？（詳しくはWIKIかもやし〇ん第一話にて）」

ロウ「ありがとうな」

こんな感じでどうでしょうか？

鷹様、朧木様、よければ一言ください

第16話『白き翼と覚醒』（前書き）

すみません……遅くなりました……

原因はゲームです……

とりあえず本編をどうぞ

第16話『白き翼と覚醒』

Side すずか

周りを探し回ってみたけど誰もいない、アリサちゃんも同じみた
いで首を傾げている。

「なんかソラが使ってた結界ってやつと似てるわね……たしか魔力
がない人が入れないやつ」

「うーん、私は参加できなかったからわからないけど……、アリサ
ちゃんがそう言うならそうなのかも」

さつきから何か光っているみたいだし、大丈夫かな？

「アリサさん！ すずかさん！」

「ソラ（君）」

Side ソラ

二人とも無事でよかった……。

「二人とも！ ボクの後ろに来て！」

管制人格のスターライトブレイカーも直に臨界点に到達しそうだ。
二人を抱えて飛ぶにはまだ飛行技術が足りない、ならここで堪え
る！

「来い！ 『巨神・ヘラクレス』！！」

目の前に現れたヘラクレス、だけど広域魔法だと回り込まれてしまっ

「スファイアプロテクション！」

半球体のプロテクションを二人に被害が出ないようにボクらの周りに張る。

ユーノさんから教えて貰った魔法で中々強固にできている、ただボク自身がまだ上手く出来ていないためあまり多用はできない。

ちょうど防御態勢が整った瞬間、桃色の壁が眼前から迫ってきた。距離が若干近いけどヘラクレスの巨体が何とかしてくれるはず

「くっ……」

スターライトブレイカーがヘラクレスに当たった瞬間、凄まじい余波がプロテクションに響く。

さすがに破られはしないが辛い。

「ソラ……大丈夫？」

「……ソラ君？」

ようやく余波が終わってプロテクションを解いた、二人が心配そうに駆け寄って来てくれた。

「ごめんね……こんな事に巻き込まれたのはボクのせいだ……」

「でもソラは守ってくれたじゃない！」

「ソラ君は悪くないよ？」

「それでも謝っておきたかったんです……」

ヘラクレスは魔力ダメージで動けなくなっていましたね。
それに、ボクの方もだいたい身体に負担をかけてしまいましたね……。

「そういえばソラ、さっき口調が違ったけど、なんでなの？」

ああ、その事をお話ししなければなりませんね。

「昔からボクは神童と呼ばれていました、ですが、人は異なる者を避ける傾向にあります。だからボクは普段から口調を丁寧に心掛けて周りから警戒されないように仮面を幼い頃から被っていました。それをしたのがたった3歳です、だから感情が高まりすぎると口調が変わってしまうんです……」

不安です……、普通ならこんな話をされたら不快に思われてしまいますよね。

「へえ」

「ふうん」

「あ、あれ？」

な、何だか反応が薄いですね？

「どうせなら私たちの前くらい飾らなくてもいいわよ？」

「うん、そうだね」

呆然と二人を見ていると二人は微笑み、近づいてきて抱きしめてくれました。

「どんなソラでも私たちは味方で恋人よ？」

「だから、疑わないでね？ 私たちはソラ君が大好きなんだから」

「はい……ボクも二人が大好きです」

微笑みながら宣言します、まずははやてさんを助けましょう。
でも、その前に。

「ん……」

「……っ／／／」

アリサさんに口づけをしました、びっくりしているみたいでした
が拒絶はしませんでした。

「あ……んう／／／」

その後すぐにすずかさんにも、ヘラクレスを送還して、管制人格
さんがいる方に向き直ります。

「では、行つてきます、すぐに安全な場所までエイミィさんが送っ
てくださるはずなのでじつとしていてください」

「……／／／（コクコク）」

二人が頷いたのを確認してから、天の翼に魔力を込め空に飛び立
ちます。

ボクが到達した時、フェイトさんが書に吸い込まれた。

「……まったく……」

通信でエイミイさんが何か言っていますが、ボクは管制人格さんに呆れを感じていました。

「まだ、そんな駄々をこねているんですか？」

「……また、お前か……」

「……お仕置きだ、痛いが我慢してもらおうか？」

術式構成、神罰連携構築完了。

「ホークムーブ！」

高速移動魔法を行使し、まずは……。

「神罰・轟天雷鳴！」

「ぐっ……」

足に収束させた轟天雷鳴で蹴り、動きを鈍くさせると同時に上空に飛ばす。

「神罰・怒号烈風！」

「かはっ……」

次に左腕に込めた怒号烈風で吹き飛ばし、さらに体勢を崩す。

「神罰・破斬業火！」

「……」

更に左足に込めていた破斬業火で追い撃ち、爆発で視界を悪くする。

「最後……神罰……!!」

魔力反応を頼りに右腕に魔力を収束加速。

「断罪光剣!!!」

光速で管制人格を貫き更に吹き飛ばした、場所は既に海上。

「……はぁ……はぁ……」

身体から軋む音が聞こえ、息を乱す。
空中に浮かぶ管制人格を見る。

「……………」

そこにいたのはボロボロのバリジャケットを修復している管制人格だった。もう少し頑張らなければいけませんね。

<ソラ君！ 聞こえますか！ うちや！ 八神はやてや！>

「はやてさん!？」

<今外に出ている子を何とかしてくれへん？ その子が走つとると管理者権限が使えへんのよ、今そこにおるんは防御プログラムだけやで！ えんり……え？ ああ分かったわ、さっきみたいにやってや！>

なるほど、どうやら起きたみたいですね、なら一つ大きな技でいきましようか？

「なのはさん？ 聞こえましたか？」

『うん、聞こえたよ！ 私はどうすればいい？』

なのはさんから念話で返事が返ってきました、今なのはさんは現在位置からそれなりに離れた位置、これくらいなら。

「ボクが新たに張られたバリアを壊します、その後なのはさんは全力で砲撃魔法を撃ち込んでください！」

『わかったよ！』

よし！ 最後の一踏ん張りだ！

「四方より集いて敵を貫け……フォースバレル……」

ボクの声と共に四つのミッド式魔法陣が左右に二個ずつ現れ、それらは正面ではなくもう一つ現れた前面の環状魔法陣に向かっている。

それぞれに真つ白な魔力球が生まれ、それらをさらに大きくし魔力を高める。狙うのはバリアで護られている防御プログラム！

「……ブレイカー！」

叫びと共に撃ち放たれる四つの魔力砲撃が環状魔法陣で収束加速され、相手のバリアを粉々に砕く。

「エクセリオン……バスター！」

バリアが無くなった瞬間になのはさんの砲撃魔法が当たる。

ボクが言えた事ではないですが、やりすぎでしょうか？

あと、レイジングハートがいつもとは全然違いますね、あれがフルドライブというやつでしょうか？

ボクもデバイスが欲しいですね。

第16話『白き翼と覚醒』（後書き）

くあとがき物語の館く

灰猫「というわけで第16話おわり」

ソラ「えっと……なんかボクの空回り多くないですか？」

灰猫「はっはっはww」

ソラ「笑ってごまかさないでください！」

クラウド「……入っていいのか？」

灰猫「あ、今回のゲスト『魔法少女リリカルなのは』片翼の天使の導いた世界く」より、クラウド・ストライフさんです！」

クラウド「……しかし、あの連続攻撃はなんだ？」

ソラ「神罰四連撃はボクの出せる今の最大連続攻撃です！ただ反動と消費魔力がすごいのであまりオススメできない技です」

解説

神罰・轟天雷鳴

魔力を変換術式により雷の特性を持たせたモノ、全方位と収束の二通りの使い方があり、ランクSS

神罰・怒号烈風

魔力を嵐のように渦巻かせ放つ技、威力自体は低いが体勢を崩す事

ができる、ランクS+

神罰・破斬業火

魔力を変換術式により炎の特性を持たせモノ、収束して撃ち放つか武器に纏わせるかの二通りの使い方がある、ランクSS+

クラウド「なるほど、しかしソラ君は大丈夫なのか？」

ソラ「身体がちょっと軋みますね、本編では魔力も半分くらい無くなりました」

灰猫「一つ一つがエクセリオンバスター並の消費魔力量だからね」

クラウド「それはつまりソラ君の魔力量がすごいということか？」

灰猫「現在SS+、原作でもいなかったレベルの魔力量だね」

クラウド「ほう、ならば勝てる人間は限られてくるな」

ソラ「でもまだまだなんです……、使い熟せていないのでもし切り抜けられると簡単に倒されてしまいます」

クラウド「精進することだ」

ソラ「はい！ では次回予告カンペです」

クラウド「……」

ついに現れた闇の書の闇、そして予期せぬ事態」

ソラ「その時、天から希望が与えられた……、次回魔法少年の物語
第17話『知識の指輪』へ」

クラウド＆ソラ「レディー……ゴー！」

ソラ「お土産のベリータルトとバイク用のメンテナンスキットです」

クラウド「いただいく」

Ｕ・Ｔ「様、ありがとうございます
こんな感じでよろしかったでしょうか？」

第17話『知識の指輪』（前書き）

やっと……戦いが……終わります

あと2話ほどでA・S終了です……

とりあえず本編をどうぞ……

第17話『知識の指輪』

Side はやて

白い光に包まれて、私の守護騎士達を呼び戻す。

「リンカーコア送還、守護騎士システム、破損修復……おいで、私の騎士たち」

私の周りに浮かぶ四つの光、そこから現れるのは私の大事な『家族』。

「我ら、夜天の主の下に集いし騎士」

みんなのリーダーのシグナム。

「主あるかぎり、我らの魂尽きることなし」

優しいお姉さんのシャマル。

「この身に命あるかぎり、我らは御身の下に」

いつつもみんなを見守ったザフィーラ。

「我らが主、夜天の王、八神はやての名の下に」

ほんまはめっちゃ優しいヴィータ。

「夜天の光よ我が手に集え！ 祝福の風、リインフォース……セエ

ット・アップ！」

Side ソラ

リインフォース……それが新しい管制人格さんの名前ですか。

「ふう……」

残り魔力量は三分の一、ただ身体から悲鳴が上がっていますから……あと一回大魔法行使が限界ですね。

「感動の再会の最中すまない、時空管理局執務官クロノ・ハラオウんだ」

「あ、クロノさん」

魔法陣を展開してその上で身体を休めながらクロノさんの話を聞く。

「あそこにある黒い淀み、あれが防衛プログラムだ、エイミィの計算ではあと20分程で暴走を開始する

現在あれを止める方法は三つ、一つは極めて強力な氷結魔法で凍結封印する、二つ目は軌道上にあるアースラに搭載されているアルカンシエルで消滅させる案だ……これに対して君達の意見が聞きたい」

クロノさん、三つ目は？　じつとクロノさんを見ているとクロノさんが思い出したように語りだす。

「…………… ああ、三つ目はソラのレアスキルでアレをどうにかできないかと……………」

「…………… ボクの見立てではあの防衛プログラムは人が使えるレベルでの氷結魔法では封印不可能、二つ目は周りの被害が大きすぎますね…………… 三つ目は……………」

ボクの「想像」は今最高レベルは剣竜・カラドボルク…………… これ以上の「想像」を越える存在をボクは知らない……………。

「無理です……………、アレを越える存在を『想像』をボク自身が思い付きません」

「そうか……………」

八方塞がり、せめて被害がない場所なら……………。

「ここでは被害が大きくて使えない……………」

「ここじゃない…………… 被害が出ない場所……………」

「なら…………… 被害が出ない場所で……………」

「…………… あっ！……………」

あ、なんだか思い付いたみたいですね。

「クロノ君！ アルカンシエルって言うのは何処でも撃てるの！？」

「ど、どこでもというのは……………？」

「今アースラがいる場所…………… 宇宙で！」

と、結局宇宙でもアルカンシエルは撃てるようですね。

「防衛プログラム暴走まであと30秒!」

何だか嫌な予感がします……、こっ……とても不吉な感じが。

「暴走10秒前!」

「5……4……3……2……1……暴走開始します!」

黒い淀みが割れ、中から様々な生物のパーツが組合わさった奇妙な生物がそこにいた。

前のほうには女性みたいな体まである。

「Aααααα……」

その叫び声と共に上部に展開させるミッド式の魔法陣、そこに集まる膨大な魔力!?

「カラドボ……」

「……ガアアアアアン……」

Side アースラ

「魔力砲撃！ まっすぐに本艦に……直撃コースです！」

「デイストーションフィールド展開！ 全員対ショック体勢！」

慌てるアースラスタッフにリンディの激が飛び、直ぐさま張られたデイストーションフィールド。

ーガアアアアン

「きゃあ！」

「うわぁ！？」

揺れる船体、そしてモニターに映し出される文字。

「う、嘘……」

【動力炉稼動率68%低下ーアルカンシエル使用不可能】

Side 海上

その異常事態をいち早く察知したのはソラだった。

「……剣竜・カラドボルク！ 時間を稼げ！！」

叫びと共に現れる「森羅万象・世界縮小図」、そこから現れる体長200mを超えるドラゴン。

「『想像追加』！ 【竜撃砲】！！」

さらに付け加えられたのは、背中にある1200ミリ六門魔導砲。連続射撃型、ソラが咄嗟に思い付いた武装だ。

「……通信で……アルカンシエルが使用不可能という通知が来た……」

カラドボルクが防衛プログラムの進行を抑えている中、クロノが念話で全員に告げる。

アルカンシエルは使用不可能、さらにソラの呼び出したカラドボルクですら防衛プログラムを抑えこむだけで、それ以上の効果は見られなかった。

最大火力で撃ったとしてもカラドボルクの攻撃は純粹魔力収束砲撃、防衛プログラムを破壊できるだけの威力は發揮できない。

全員が意気消沈している中、遙か遠く、砂浜でそれを見つめている青年がいた。

「ふ……地球の危機か……俺がどうにかしてもいいのだが……」

淡く光る指輪を見ながら、その光っている小指の指輪を外す。

「行つてこい……ちゃんと帰ってくるんだぞ？」

それを指で弾き上空に撃ち放った。

S i d e ソラ

やっぱり……、カラドボルクでは多少火力不足ですね……。

「っ！？」

諦めかけた瞬間、空からすごい速度で飛んできたモノをつかみ取る。

「これ……は？」

覚悟しなさい

それは淡く光る指輪だった。

それを握り締めた瞬間、膨大な情報がボクの中に流れこんでくる。

心に刻みなさい

「はぁ…はぁ…はぁ…」

頭を整理する、圧倒的な情報量に息が乱れましたが……この情報を元にした術式なら……。

手を広げると指輪は無くなっていました、魔力の残りから察するに転移したみたいですね。

『皆さん！ 聞いてくださいー!!』

ボクはこれに賭ける！

ソラの提案は要約するところなる。

まずはソラを除いた全員で四層の物理・魔力複合障壁を破壊、なのは・フェイト・はやての三人の最大火力で本体コアを露出させる、本来ならここで宇宙空間に転送し、アルカンシェルで消滅させるのだが、その代わりをソラが担う。

転送するのは成層圏までで、そこにソラは新しく組んだ術式を使う。

『カラドボルクはあと10秒で消えます……そうしたら作戦開始です』

『了解！』

全員が持ち場に着いた瞬間、カラドボルクが魔力を使い切り溶け込むように消える。

それに代わるように指ユーノとアルフ、それにザフィーラが暴走を抑えている。

「高町なのはとレイジングハート・エクセリオン！」

【ロードカートリッジ！】

「鉄槌の騎士ヴィータと鋼鉄の伯爵グラーファイゼン！」

【エクスブロージョン！】

ヴィータがギガントフォーム、なのはの砲撃が二枚の障壁を壊す。

「術式構築……雷変換術式……構築……」

ソラは両腕に大量の魔力を込め、高速で回転させ魔力の質を高める。

「フェイト・テストロッサとバルディッシュ・アサルト!」

【ロードカートリッジ!】

「烈火の将シグナムと我が魂炎の魔剣レヴァンティン!」

シグナムはボーゲンフォルム、フェイトはザンバーフォルムでもう二枚障壁を破る。

「高速回転……加速……加速……加速!」

「彼方より来たれ、ヤドリギの枝! 銀月の槍となりて撃ち貫かん! 石化の槍、ミストルティン」

石化で行動がしばらく止まる防衛プログラム、三人が砲撃位置に移動する。

「……悠久なる凍土、凍てつく棺の内にて永遠の眠りを与えよ!」

【エターナルコフィン】

更にクロノが限界まで魔力を注いだ凍結魔法で凍らせる。それでも尚再生し始める防衛プログラム。

「全力全開！ スターライトオ……」

「雷光一閃！ プラズマザンバー……」

「響け終焉の笛！ ラグナロク……」

「術式固定……【円形加速器】……展開！」

「「「ブレイカアアアアー……！！！」」」

く。
三人の砲撃が虹色の柱を生み出し、防衛プログラムを破壊してい

「コア露出……捕まえた！」

「「「転送……！！！」」」

ユーノ・アルフ・シャマルの転送魔法で成層圏まで飛ばされるコア、その間も再生をする、まるで足掻くように。

「……終わりだ……」

静かに呟き、空を見つめるソラ、その手の平には嚴重な結界に包まれた小さな雷の塊。

光速度手前まで加速されたそれは結界内部の空気すら分解しながら加速し続ける電子。

物理現象の限界ぎりぎりまで加速されたそれはあらゆる物質を素

粒子崩壊させられるレベルである。

「……ほうめつらいぎよく崩滅雷玉」

五つの環状加速魔法陣が展開、僅かな誤差を計算し修正。
そこに結界に包まれた崩滅雷玉をセットする。

「発射！！！」

——カッカッカッカッ！！！！

環状加速魔法陣を通る度に激しい音を響かせ、音速突破した崩滅雷玉が防衛プログラムに僅か5秒で到達。

結界は防衛プログラムに触れた瞬間砕け……………。

——ガゴオオオオオオオオオオオ……………

盛大な轟音と共に半径3キロのあらゆる物質を素粒子崩壊させ、

消滅した。

S i d e アースラ

非常灯の灯る薄暗いブリッジでいくつもの計器を見ながらエイミイが顔を上げる。

「対象の消滅を確認！ 再生反応ありません！！」

ブリッジが歓喜の声上がる。

こうして『闇の書事件』は終了を告げた。

被害報告。

町の被害は軽微、順次修復。

八神はやては初めての魔力行使により気絶。

ソラ・フォード重傷、全治二ヶ月……が、数時間で回復の兆し。

第17話『知識の指輪』（後書き）

（あとがき物語の館）

灰猫「うああああ……ああ………」

ソラ「最後のあたり……、ずいぶん削りましたね？」

灰猫「いやあ……あんまり原作と変わらないから名前だけ出しただけ」

ソラ「最後の崩滅雷玉は………」

灰猫「今後使わないであろう最強……最凶の技だね、素粒子崩壊を起こすから非殺傷設定とかできないし」

ソラ「ああ、だから重傷だったんですね、ボク」

灰猫「複数箇所のお骨にヒビ、両腕の筋肉組織が疲労で断裂、ついでとばかりに腕の毛細血管が内出血を起こしてた………」

ソラ「何故治ったんでしょう？」

灰猫「肉体の魔改造は着々と進行しているのですww」

ソラ「ああ、ボクはだんだん人外になっていきますね」

灰猫「アハハ」

ソラ「では今回はこれくらいで！」

次回予告

ソラ「ボクはなるべく多くを救いたいと願い」

リン「私は最善を選ぶ」

ソラ「救いたくとも救えない」

リン「覚悟は決まっている」

ソラ「次回魔法少年の物語第18話『祝福の風』へ」

リン＆ソラ「レディー……ゴー……」

第18話『祝福の風』（前書き）

マイリス120越えました。

こんな拙作ですが皆さんこれからもよろしくお願いします！

今回あとがきにゲストが来ております！

そろそろ再出演をしようか検討中……

第18話『祝福の風』

目を覚まして見たのはアースラの医療ベッドの上でした。

医療スタッフの方の話では、魔力の枯渇と体力切れで気絶。

それに両腕の筋肉が断裂、それに蹴られたらしい肋骨などにヒビ。でも、ほとんどが自然治癒してしまったらしいです、スタッフの方がしきりに首を傾げていました。

「失礼する」

ボクがベッドで安静にしてしばらく経った頃、リインフォースさんが訪ねてきました。

「リインフォースさん、どうされました？」

「別れを言いに来た、お前には世話になったからな」

「別れ？」

夜天の書は今防衛プログラムがなくなり、破壊するなら今しかないそうです。

元の形を完全に喪失して直す事も出来ないらしい。

「はやてさんには言いましたか？」

「いや、主はやてを起こすわけにはいかなかったからな……」

「……どうしても消えなければならぬんですか？」

「ああ、いずれは防衛プログラムが再構築される……今しかないのだ」

静まり返る部屋で、ボクは悩んでいました。

夜天の書が元に戻す事ができない以上、書であるリインフォース

さんが消えなければなりません。

「夕方……いえ、3時まで待つてください……ボクが貴女を助けます……救われないのは……悲しいです」

Side リンフォース

泣き出しそうな表情でシーツを握り締め語るソラ少年、私などにそのような表情をするとは……、優しい少年だ。

「分かった……、しかしそれを過ぎればすぐにでも私は旅立つ」
「はい！」

部屋を後にし、ふと思う。

少年はたしかに他に類を見ない能力の持ち主だ、もしかしたら私が救われるのかもしれない。

「もし、そうなら……」

私は……、私の犯した罪を償う事ができるのだろうか？

主はやてと共に笑いあえる事ができるのだろうか？

わからない、だが、もしできるならば。

「信じてみたい気がする……ソラ少年を……」

彼は不思議だ、まるで不可能を可能とする英雄だ。

S i d e
ソラ

リインフォースさんと話してから2時間、時間は12時。
その間、ボクはずっと目の前にある「箱」に「想像」を込め続ける。

リインフォースさん自体を切り離す事はできない、だから代わりとなる場所を生み出す事はできる。

「……………」

既に「箱」はボクの支配下から脱している。

カラドボルクやアーサー、ネコ先生はまだボクの支配下。これは決して覆らない。

生み出した時点で切り離さなければ「想像」の範疇を抜け出せない。

この「箱」はリインフォースさんの新しい身体となるもの、ボクの支配下にあつては色々和不都合。

「はあ……………はあ……………」

だけど、これはきついですね……………。

既に強固な個として存在するモノに、新たに「想像」を追加するのは正直これを最後にしたいですね。

「身体は……………完成しましたが……………」

どうしても……………魂と呼ばれる部分を移植する術がない。

「くっ……………」

完成した「箱」を持って、ボクはブリッジに行く。

ブリッジにはリンディさんがお茶を飲んでいました。

「リンディさん」

「ソ、ソラさん！？ 起きて大丈夫なの？！」

慌ててボクに駆け寄るリンディさんに頷き、真つすぐリンディさんの目を見ながら。

「ボクを地上に、降ろしてください」

「……でも」

「お願いします」

リンディさんは心配そうにするが、ボクの願いが通じたのか、頷いてくれました。

地上に下り、公園でじっと「箱」を見つめる。

「……………」

やはり……、これにリインフォースさんの魂を移すのは困難を極めます。

魂という概念を「想像」できないボクには、それを移す為の道具を創りだす事が出来ません。

「おやおや……、誰かと思えばいつぞやの少年ではないか」

「貴方は……」

気配もなく現れたのはザフィーラさんとの戦いで助けてくれたあの男の人でした。

「そういえば名乗っていなかったか、俺は水無月^{ミナツキ} 龍也^{リュウヤ}、少年の名は？」

「ソラ・フォード……です」

龍也さんはボクの手元にある「箱」を見て、しばし沈黙。

「ふむ……良ければ俺に話せ、力になれるやもしれないぞ？」

「実は……」

ボクは今までであった事を話しました、それを黙って聞いている龍也さんはずっと無表情で内心はわかりません。

「……なるほど、『器』が出来ても肝心の『中身』を移す術がないか」

「はい……」

不甲斐ない……、ボクでは力不足……、救いたくても救えない。

「ふっ、俺もつくづくお人よし……か」

突然立ち上がる龍也さんを見上げながら、呆然としてしまった。

「案内しろ、そのリインフォースとやらの所にな」

Side はやて

嫌な予感がして車椅子を押してリインフォースの気配がするほうに懸命に急ぐ。

「リイン……フォース!!」

「っ!!」

「皆動くな、今動けば儀式が失敗する」

魔法陣の上に立つリインフォースがそう叫び、ゆつくりと私を見る。

「主はやて、来られてしまわれたのですね」

「なんで!? なんでリインフォースが消えなあんの!? 私が暴走なんてさせへん! せやから消えんでもええんや!」

涙で、目の前がぐちゃぐちゃになっても、リインフォースに消えて欲しくなくて、なんとか引き止めようとする。

「ご理解を、私が居ては主にもご迷惑がかかります」

「わからへん！ わからへん……よ……
リインフォースは今までずっと不幸やった……せやからこれから……
……いっぱい……幸せに……」

言葉が続かへん……、頭もぐちゃぐちゃになってもうて何を言いたいんかはつきりでけへん。

「ご心配なく、主はやて……」

柔らかい笑顔でリインフォースが私を見る。

「私は、世界一幸せな魔導の器です」

「リイン……ふおーず……」

誰でもええ、この子を救って……。

こんな嫌や！ せつかく幸せになれるかもしれへんの……。

「リインフォースさん……！！！！」

S i d e ソラ

あらん限りの声でリインフォースさんに呼びかける。

「ソラ少年……それに？」

「水無月龍也だ……、何も言わずこれを受け取れ」

龍也さんが小指にはめていた指輪をリインフォースさんに投げ渡す。

「これは……」

「知識の指輪と、俺は呼んでいる、それにお前の魂を移しソラの創った新しい『身体』へ移す、成功するか否かはソラ次第だ」

ボクはリインフォースさんに「大丈夫」という意思を込めて見つめる。

リインフォースさんは静かに頷き、指輪を両手で握り締める。

「あつ……」

その瞬間、リインフォースさんの身体から光の粒子が立ち上り、段々と姿が薄くなっていく。

しばらくして、地面に剣十字と黒紫の光りを放つ指輪が残された。

『……………』

全員が静まり返り、魔法陣も消えてしまった。

一人、龍也さんが落ちていた二つを拾い、剣十字をはやてさんの手に、指輪をボクに渡す。

「では俺は行く、また会う日まで……あと、リインフォースには指輪を大切に伝えてくれ」

歩き去り、手を振りながら突然の突風と共にその場から消える龍也さん。

「命よ……」

ボクは「箱」の上に指輪を置き、「森羅万象・世界縮小図」を展開。

「汝は新たなる器へ、我が名においてここに祝福する」

「箱」と指輪が共鳴を初めて、溶けるように光を放つ。

「汝は祝福の風……」

「箱」が形を変え、段々と人の形へとなる。

「新しい名を貴女へ始まりの音、祝福の鐘……リインフォース・ア
インス」

「……私……は？」

「お帰りなさい、リインフォースさん」

「りいんふおーす……ぐすっ……」

「……ご迷惑をおかけしました……、主はやて、創造主^{マイスター}ソラ」

「お帰りなさい」「」

第18話『祝福の風』（後書き）

くあとがき物語の館く

ソラ「くくく」

部屋の棚に犬のぬいぐるみを飾り、改造された元AIBO改め、命名・ラクサを磨いていた

ラクサ『お客様がいらつしゃいました』

ウィズ「ギヤアアア!? ド、ドラゴンがあああ!?」

ソラ「ようこそいらつしゃいませ」

アテナ『相棒は何故あの剣竜に睨まれているんでしょうね?』

ソラ「さあ? 何故でしょうね?」

ウィズ「はあ…はあ…お邪魔しま…す?」

ソラ「いらつしゃいませ」

現在のソラ君の姿は猫耳+ゴスロリ（お土産の品）

ウィズ「チートな上に可愛いとかどんなだよ……」

ラクサ『今回のゲストは『魔法少女リリカルなのはStriker

S with 2nd】より神崎ウイズ様、その相棒で主人公より人気のあるデバイス、アテナ様です」

ウイズ「ここに来て……ここなら大丈夫だと思ったのに……」

ソラ「ウイズさん、頑張ってください、大丈夫です！ 貴方は間違いない主人公なんですから！」

アテナ「別に私が主人公でいいじゃ……」

ソラ「でも、ウイズさん以上にアテナさんを輝かせる最高の相棒はいませんか？」

ウイズ&アテナ「（こ、後光が見える！？）」

笑顔で二人を見るソラ、とてもいい笑顔である

アテナ「そ、そういえば作者さんは？」

ソラ「えっと、何だか『代わりが出来たから俺は引つ込む』と言ってました」

ウイズ「代わり？」

アイリイン「私ことリインフォース・アインスだ」

ウイズ「うおっ！？」

アテナ「くっ、私も身体があれば……」

アイリイン「私はこれからここも拠点になるからな、本編でも活躍するぞ」

ソラ「詳しい事は次回ですね」

ウイズ「もうそろそろ時間だな」

アテナ『ですね』

ソラ「では、次回カンペです」

ウイズ「よし！

戦いの日々から解放され、クリスマスを楽しむ人々」

アテナ『笑い、話し、新たな絆を結ぶ』

アイリイン「我らは明日の為、幸せを噛み締める」

ソラ「次回魔法少年の物語第20話『第一歩！』へ」
みんなくレディー……ゴー！！>

ソラ「お土産のオレンジクッキーとアテナさんへデバイスをセットすると動ける人形（30cm）です」

ウイズ「あ、ありがとう？」

アテナ『これで私も……』

八神煌斗様、出演許可ありがとうございました！

第19話『第一歩!』（前書き）

話数を間違えていました……

今回は短めですがどうぞ

今回もゲストが来ています!!

第19話『第一步!』

アインスと共に、ボクははやてさんを迎えに来ました。

「あ、ソラ君やん」

「お迎えに来ました、なのはさんとフェイトさんは先にアリサさんの家に向かっています」

シグナムさんがはやてさんを車椅子に寄せ、ボク達に軽く会釈してくれました。

「主はやて、寒くはありませんか？」

「大丈夫や、あんがとなリイン、それに私はもうリインの主やないんやで？」

「いえ、それでも主はやては“家族”ですから」

あのための検査ではやてさんとのリインフォースのユニゾン適性を調べた所、前に比べて50%以下まで下がっていました。

ユニゾンはできなくなり、新しく融合騎を作るつもりらしいです。お手本となるアインスがいますから、五年以内には完成するらしいです。

「せやな……ほならはやてって呼んで欲しいな」

「……ぜ、善処します」

皆で苦笑しながらボク達はアリサさんの家へと向かいます。

Side とある管理局員

調書をまとめ、最終確認をしながらため息をつく。

「ソラ・フォード、現在9歳くらい、魔力ランクSS+、予想空戦SSのレアスキル持ち……」

ありえない……、わずか9歳の少年のレベルじゃないよな。

しかも先の検査ではユニゾン適性もかなり高い数値で出ているらしい。

うちの師匠がこの子のデバイスを作りたがっているからの検査だったか……。

「魔力光は、赤・青・緑の三色の混合……これにより通常デバイスは使用不可能……」

あのロストロギア……つと、元ロストロギアか……、あれも多種多様な魔力光を使えるからこそだろうからユニゾンできるんだろうな。

師匠曰く「面白い」らしいが、俺ならこんな訳のわからん魔力をもつやつデバイスなんて作りたくねえ。

「とりあえず、リンディ艦長にこれを提出して師匠に送ってもらうか……」

それにしても……、こんなやつが管理局入りになったらどうなるんだろうな？ 絶対エースとかストライカーとか呼ばれるんだろうな。

S i d e ソラ

横にいるアインスを見ながら思い出すのは彼女の変化だった。

ボクが創った「箱」の影響なのかわかりませんが前よりも使える魔法が少なくなっていました。

さらに、ユニゾン適性ははてさんよりボクの方が高くなって、多少外見も変わってしまいました。

外見は前より幼くなって身長も大分縮んでしまいました。

ヴィータさんより少し大きいくらいで、列ぶとボクと兄弟に見えるらしいです。

「せやけど、アリサちゃんもずかちゃんも巻き込まれとったんやな」

「ええ、だから皆さんが魔導師というのは知っています、何があったかとかを今日話すらしいです」

「……そうなんや……」

S i d e はやて

私はずっと気になつとる事がある、ソラ君の過去や。

いつも優しいソラ君やけど、あんまり声出してわろてる所を見た事があらへん、それにヴィータとかシグナムの話やとスッゴい強いらしい。

たしかに最後に見た技とか凄かったけど、そんなとは違う強さらしい。

ソラ君がどんな事してたか、過去に何があつたかとか聞きたい。私は……、多分ソラ君に惹かれとるんやと思う。

異性に恋心抱いた人なんて初めてやから気付くんに時間かかってしもたけど、間違いない気持ちや。

「着きましたね」

「……せやな」

アリサちゃんやすずかちゃんには悪いと思うんやけど、私の気持ちには変わらへん、絶対にや！

Side ソラ

あれから2時間、ボク達は今までであったことを互いに話しました。なのはさんとフェイトさんの出会いのきっかけとなった、ジュエルシード事件と呼ばれる事件。

ボクも過去にあった……アリサさん達に話した話を伝えました。

「ふう……」

「ソラ、大丈夫？」

アリサさんがボクの手を握りながらボクの事を心配してくれました。すずかさんも反対側から心配そうにボクを見えています。

「大丈夫です、信じていますから」

ボクが微笑みながら言うと、目の前に座っていたはやてさんが俯いたままでした。

「はやてさん？」

「……あ、あんな？」

「はっ、と顔を上げたはやてさんは何かを決意した目をしていました。」

「わ、私も……ソラ君に言いたい事があんな……」

「は、はやてあんたまさか……」

「はやてちゃんもか……」

アリサさんとすずかさんは何か気付いたみたいで驚いている。

「うん……あんな？ 私も……ソラ君と恋人になりたいんや！」
「……」

驚きました、ボクの過去を聞いた後でこんな風に告白されるとは……。

「やっぱ……あかへん？」
「……えっと、その……ボクは……はやてさんを好き……なんでしようけど……」

ちらつとアリサさん達を見ると。

「ソラの好きにきなさい、今更増えても気にしないわ」
「ソラ君ならみんな平等に愛してくれるもんね？」

ボクは頷き、はやてさんに向き直ります。

「ボクで良ければ、よろしくお願いします」

微笑みながら手を伸ばす。

「あ……うん！」

はやてさんはボクの手をとって嬉しそうに微笑みました。

Side ???

あの弟子から届いたデータを機械に打ち込んでいく。

「いやはや……面白いねえ……」

あらゆる部品を模索し、この坊主に見合う……いや、使えるデバイスを造る！ 今までの知識を集結させて完成させてみせるぜえ。

「そうさ！ 俺はその為に生まれてきたんだろーからなあ！！」

笑う、いやはや、ここまで笑ったのはいつぶりだ？

ククク……、さあ、時間がねえからな……。

「三日だ……三日で完成させてやるぜえええ」

その日から三日間の間、その男の部屋から変なオーラが出ていたらしい。

S i d e ? ? ?

時は満ちた。

私が世界を手に入れる日がきたのだ！

まずは駒を集めねばな。

「起きなさい、我が愛しき娘……【イヴ】」

新たな敵は

静かに動きだしていた

それは新たな戦い

運命の歯車が

今、動き出す

第19話『第一步!』（後書き）

くあとがき物語の館く

ソラ「くくくく」

アイリイン「こちらにパンダのぬいぐるみを置いておきますね」

ソラ「はい」

ラクサ『お客様がお越しになりました、【魔法少女リリカルなのは Strikers Another Story】夢を継ぐ者より間神ソラ様です』

間神「お邪魔する」

ソラ「いらっしやいませ」

アイリイン「はじめまして」

間神「ふむ、先程門番に怯えられたがどうしてだろうか？」

ソラ「あの子は今弱っていますのである程度の実力者には怯えています」

間神「なるほどな」

アイリイン「さて、次回について少し語ってみるか」

間神「たしか今回色々伏線があるな」

ソラ「はい、灰猫さんによればほのぼのは殆どないそうです、少し鬱になっていましたね」

アイリイン「この伏線の事件が解決しなければほのぼのはないらしい」

間神「気になるな」

ラクサ『時間です、こちらのカンペをどうぞ』

間神「ふむ」

平和な日々が続いていたある日、その事件は起こった」

アイリイン「現れる新たな敵、新しいデバイス、新たな力」

ソラ「次回、魔法少年の物語空白期第1話『始まりの鐘』へ」

間神&アイリイン&ソラ「レディー……ゴ―!!」

ソラ「お土産の栗羊羹と弓のレリーフです」

間神「ありがとう、ではな」

雷網様、出演許可ありがとうございました！

空白期第1話『始まりの鐘』（前書き）

携帯が止まっていたので遅くなりました（ ; ; ）

なんとか復旧したので投稿です

空白期第1話『始まりの鐘』

風を受けながらボクは目を閉じて風を感じています。
隣に立つアインスも同じく風を感じながら時を待っています。

『空戦Sランク試験受講者のソラ・フォードさん、最終確認です』
「はい」

目を開き、空中に浮かんだ試験官の方と目を合わせます。

『貴方が使用するデバイスは、インテリジェンス・アームド複合型デバイス【ナイト】、そしてユニゾンデバイス【リインフォース・アインス】でよろしいですか？』

「はい、間違いありません」

『今回の試験は空戦S＋ランク魔導師二人との模擬戦です、制限時間は30分、頑張ってください』

頷き、画面が消えた代わりにタイマーが映し出されました。

「ナイト、セットアップ！」

【セットアップ】

ボクの掛け声と共に髪留めが光を放ち、バリアジャケットBJを展開。

見た目は前に「想像」で創ったモノと同じです、そして、インテリジェンス・アームド複合型デバイス【ナイト】は150cmの大剣へと姿を変えます。

ボクのデバイス、【ナイト】は半年前に知り合った方から譲り受けたボク専用機で、アームドデバイスの機構をベースにインテリジェンスデバイスコアー機、ストレージコアを三機搭載したデバイス

です。

ボクの魔力は波長が違う三つの魔力からなるせいで、膨大な処理能力のあるユニゾンデバイスであるアインスカ、三つの魔力を制御する為にソースを使い切るストレージ三機を持つナイトでなければ機能しません。

前に普通のアームドデバイスで試した所、オーバーフローしてしまい使い物にならなくしてしまいました。

そして今回、ボクは囑託魔導師試験を合格し、今は空戦SSランク試験に臨む所です。

「アインス、ユニゾンしますよ」

「はい、行きます」

「ユニゾン・イン！！」

（5分後）

『え……模擬戦終了です……ソラさんは待合室へどうぞ……救護班！ボサツとしてないで速く二人を回収しなさい！！』

問題なく試験を終えました。

今回は剣術をメインに戦いましたが、意外と簡単に落とせました。

「よう、坊主にアインス！」

「シンジさん！」

「お久しぶりです、シンジ」

待合室に着くと、ボクにデバイスをくれた方シンジ・ライドウさんが居ました、本局でデバイス開発部に勤めているらしいです。

見た目普通のお兄さんで黒髪・黒目の方で、身長は160くらいでしょう。

クロノさんが持っているデュランダルの基本設計はこの方のアイディアの流用らしいです。

「ナイトの調子はどうだ？」

「絶好調ですよ！」

【この調子ならもう少しでマスターもフルドライブを使えるはずだす】

「そうか、カートリッジシステムも問題ねえか？」

「私が調整したものだからな、反動は少ない」

その後デバイスの話をしばらくして、シンジさんは仕事らしく帰って行きました。

「ソラさん、お待たせしました、試験結果を発表します」

シンジさんが帰ってすぐに試験官の方がやって来て微笑みながら。

「おめでとうございます、審議の結果貴方は魔導師SS+ランクを取得されました」

「え？ プラス判定？」

「はい、過去最短でクリアされましたので、上からプラス判定を付けるよう言われましたので」

ボクの試験はこうして終わりました。

地球に戻って、待ち合わせ場所に急ぎます。

アインスははやてさんの家に向かい、一緒にこちらに来るそうです。

「〜」

上機嫌で走りながら、待ち合わせ場所である公園に着くと、既にアリサさんとすずかさんが待っていました。

「すみません、ちょっと遅れてしまいました」

「ソラ、敬語は無しよ？」

あれからボクは友達と恋人にはなるべく敬語を使わないようにしています、まだ慣れません。がこちらの方が気兼ねないとアリサさんが言っていました。

「あ、そうだった」

「ソラ君、試験はどうだった？」

「バッチリ、合格だよ」

ブイサインをすると、二人とも拍手をしてくれた。

あの闇の書事件から一年、特に大きな事件もなく平和な日々が続いていた、アリサさんとすずかさんのご両親に会いに行ったりしたくらいです。

すずかさんの方は意外とすんなり了承してくれましたが、アリサ

さんのご両親はやはり少し厳しかったです。

ただ、難題を幾つかクリアしていく内に、ご両親も理解を示してくださり、二人が小声で「新しく子供を…」と言っていたのが気になりましたね。

「はやては向かってる所？」

「うん、アインスと一緒に来るみたいだよ」

「そうなんだ」

はやてさんはリハビリを終え、普通に歩くくらいなら問題なくできるまで回復しました、さすがに走るのは辛いみたいですけど。

「見つけたぞ？」

「え？」

突然かけられた声に振り向いた場所にいたのは、金髪のショートカットで紅い瞳を持った女の子。

見た目男と見間違えるような容姿で、鋭い眼光をボク達に向けていた。

「あまり時間もない……早々に片付けるか」

彼女が指を鳴らすと辺りを封鎖結界が覆い、彼女の背後が扉のよ

うに開き紅く水面の様な所に波紋が無数に現れる。

「如何に神童の素質を持つとも、俺には敵わない……後ろにいる女二人を渡してもらおうか？」

「お断りです、ナイト！」

【セットアップ】

髪留めが光り、B Jを纏い「天の翼」を防御用に生み出す。

「ふん、実力差がわからんか…… 【王の財宝】^{ゲート・オブ・パピロン}」

彼女が腕を上げると、それを号令としたように波紋が広がり刀身が現れる。

それら一つ一つから伝わってくる魔力は明らかに彼女の総魔力量を越えていた。

しかも数が半端ではない、千に届こうかと思う程の武器達が狙いをボクにつけている。

「くっ……」

かなりキツイ状況ですね、ヘラクレスではあの数を完全に防ぐのは難しそうですね、なら体積で上回るカラドボルクで防ぐしかないですね。

「カラドボ……」

「「ソラ（君）！ 横！」」

アリサさん達の声が聞こえた瞬間、ボクは吹き飛ばされる。

「なっ……くう……」

体勢を整えながら確認すると、そこには新たな人がいた。

淡いブラウンの長い髪、深緑の瞳を持った女の子、服はゆったりとしたワンピース。

気配もなく、殺気もなく、威圧感もない。

「……ありえない……」

だからありえない、この攻撃は明らかに致命傷を負わせられるもの、それを何の感情の起伏もなく、しかも的確に……。

「01（ゼロワン）、遅い……父上には時間がない、はやく『鍵』を持ち帰るよ」

「……ふん、たしかに時間がない……貴様は邪魔だ……消え去れ」

次の瞬間、ボクは無数に降り注ぐ剣群に貫かれた。

避ける事すら出来ずにボクは倒れてしまう。

最後に見たのはナイトから吐き出された小さな二つの光だった。

Side シンジ

タバコを吸いながら目の前の画面を見つめる。

どうも保険が起動したみてえだな。

「ちっ、あの坊主は強いがまだ甘い……とりあえず対象は二人か……」

ナイトから緊急回線で送られてきたデータに承認コードを打ち込

み、俺自身も立ち上がる。

「俺は戦闘向きの人間じゃねえのに……言ったって、行かなきゃいかんだろな……」

まったく……、世話のかかる坊主だな。

Side アイリン

私が駆け付けた時には、アリサとすずかが連れ去られた後だった。

「ソラ!? ソラ!!」

血まみれになったソラを抱き上げる。

何とか呼吸はある、だが脈拍が弱い……。

「くっ……回復魔法をつ!」

シャル程上手く使えないが、やらないよりはいいだろう。

頼む……、死なないでくれ……。

空白期第1話『始まりの鐘』（後書き）

くあとがき物語の館く

ソラ「アインス、似合ってますよ?」

アイリイン「は、恥ずかしいですよ……」

現在二人はローゼンの服を着ている、ソラは薔薇水晶、アインスは水銀燈の格好である。

アリス「ソ~~~~ラ~~~~く~~~~ん~~~~」

一真「落ち着け!」

二度目の登場、「魔法少女リリカルなのは七つの大罪」より神童一真さん・桜ノ宮アリスさん

アリス「おっもちかえり〜」

一真「止める! じゃなきゃ蛇いっぱいの部屋にぶち込むぞ!」

アリス「……ごめんなさい」

ソラ「えっと、いらっしやいませ」

アイリイン「今回はアリス殿がなにやら宣言されるらしいですね」

アリス「そうだった! 私はここに『ソラ君ファンクラブ』の設立

を宣言します！」

三人「……」

アリス「私が会員番号1番で、会長！ 参加条件はソラ君を“好き”な事！ “愛してる”方はダメだよ？」

ソラ「えっと？」

アイリイン「気にしなくてもよろしいですよ？ つまりはソラを大好きな方々の集まりです」

一真「そついやリインはいつからソラを呼び捨てにしてるんだ？」

アイリイン「半年前くらいからだ、そのうち短編で出すらしい……っと、ソラから目を離し……」

アリス「かわいくな～もう」

ソラ「～」

アリスから貰ったプリンを食べている

アイリイン＆一真「害がないならよし」

アリス「さて、そろそろ帰らないと……」

ソラ「次回のカンペです」

一真「さっさと済みますか」

ボロボロになったソラ、目覚めたのは病院のベッド」

アリス「悔やみ、涙を流し、何も出来なかった自分を呪う」

アイリイン「そこに現れたとある人物から希望を見出だす」

ソラ「次回魔法少年の物語空白期第2話『希望の光』へ」

四人「レディー……ゴー！」

アイリイン「とりあえず、桜餅とソラ人形ストラップだ」

アリス「わあい♪ あと、この服置いてくわ」

アイリイン「クローゼットにかけておこう」

村正様、出演依頼ありがとうございます

こんな感じで良かったでしょうか？

空白期第2話『希望の光』（前書き）

またもや更新が遅れてしまいましてすみません

またゲームしていました
本当にすみません

では本編をどうぞ
短いです

空白期第2話『希望の光』

目が覚め見えたのは真つ白な天井。

身体の各所に巻かれた包帯には多少の血が滲んでいるが、殆どが塞がっていて多少痛むだけ。

「あ……」

でも、思い出してしまった、アリサさんとすずかさんがさらわれた。

「ああ……」

頭がぐちゃぐちゃになる、涙が溢れてくる。

自分で自分の感情がコントロール出来なくなった。

「荒れてんなあ、坊主？」

「…シンジ…さん…？」

そこには椅子に座って本を読んでいたシンジさんがいた。

その雰囲気は落ち着いており、ボクの精神も引きずられるように落ち着いてくる。

「坊主、悔やむのはいつでもできる、だがな？ 先に進むのは後からじゃおせえぞ？」

「……はい……」

分かればいいと、笑顔で頭を乱暴に撫でてくれました。
不快ではなく、父親のような安心感が伝わってきました。

「よし、んじやしつかり療養しな……、明日にやまた来るがな」

手を振り出ていくシンジさん、ボクは再びベッドに横になりました。

S i d e シンジ

ちつ、管理局は動けねえし坊主はボロボロ。

敵の戦力は少なくともSSクラスが三人はいるんだ、こつちでまともにタイマンできんのはソラぐれえか……。

「と、言うこつた、おめえもこい」

「助けたいののは山々なんですが……大した力のない僕には……それに無限書庫での仕事が……」

真面目だねえ。

いや、悪かねえけどよ……。

「許可は取り付けてあるんだよ、出発は三日後の正午だ、それまでに決めな」

たしかに、他の魔導師に比べりや大した力はねえけどよ？

「おめえさんには他の奴にはねえ、守る力が確かにあるぜ？」

さあて？ これで声をかけたのは六人か……。

1番嬉しいのは全員が参加してくれる事だが……さて？

「運命の鎖は確実に綱がつているな……歯車を回すのはあの坊主……」

密かに口元を歪め、起こりうる全ての厄災に対処するため。

「ああ、分かっているさ……俺は戦闘向きじゃねえ……でもあいつらを守りたいしねえ」

S i d e ソラ

傷は塞がって、退院の手続きを終えました。

「……助けに行かなきゃ……」

ナイトは家ですから、取りに行かないといけないですね。

「ソラ！」

家に向かおうとした瞬間、走ってきたアインスに呼び止められる。

「アインス、どうしたの？」

「シンジから連絡がありました、ソラなら責任を感じて暴走するだろうから止めてくれと」

少し怒った表情で、ボクを睨みつけるアインスに苦笑してしまう。

「あの人はよく見ていますね……」

「今は休むべきです、とりあえず主はやての所へ行きましょう」

ボクは手を引かれはやてさんの家へ連れていかれました。

それにしてもアインス、ちよつと痛いです。

S i d e はやて

帰ってきたリインが連れてきたんがソラやったでビビったわ。

それにしても、落ち着きないなあ、普段ならあないに動揺して周りが見えなくなる事あらへんのに。

やつぱりすずかちゃんやアリサちゃんが目の前で連れ去られたんが効いとるんやろうな。

「あかんよ、飛び出していったら」

「え……？」

なんや、自覚しとらへんのか？

「相手の居場所もわからんと飛び出しても意味ないやん、シンジさんが今調べとるから落ち着きい」

ソラをギュッと抱きしめて落ち着かせる、ソラの身体は小刻みに震えとる。

「ええか？ 私かてソラが大切やから……だからあんま無茶せえへんでな？」

「……うん……」

それに、ソラは万全やない。

いくら傷が塞がってても内側はまだ傷だらけや。

そんな状態で行かせてまったら今度こそソラが危ない。

今は堪えてもらわんと、私はまだ戦闘は無理や、せやからソラを止めたらなあかん。

私は結局それから二時間、ソラを抱きしめ続けた。

S i d e シンジ

「やつぱり無理か……」

「すまない……、いくら貴方の頼みとはいえ、次元航行艦を貸し出す余裕はないんだ」

アースラをなんとか動かそうとしたが、彼らもまた任務があり、他の艦も軒並み余裕がないときた。

「ただ、フェイトとアルフは協力に出せそうだ」

「お前さんの協力がないのはちと辛いが、あの二人が参加すんならまだ活路があるな……」

クロノの坊主に別れを言い、ため息をつく。

「ちつ、頭がいてえ……」

あの二人にや俺の研究結果である特殊技能で特殊封印をかけてあ
レアアビリティ
る。

俺自身が意識を失わない限り手出しは出来ねえはずだ。

「しかし、あれから二日、完徹だからなあ……いい加減辛いぜ」
だが、せめてあと三日は休むことはできんな。

S i d e ソラ

あれから三日目、ボク達はシンジさんが指定したはやてさんの家に集合していました。

集まったのは、戦闘に参加するボクとアインス、なのはさん、フ
イトさん、ユーノさん、アルフさん、ヴィータさん、シグナムさ
ん。

元々家にいたはやてさん、シャマルさん、ザフィーラさん。

「わりいな、場所を提供して貰って」

「ええですよ」

少し竄れたシンジさんは一体全員を見渡した後、声をかけます。

「今回の敵は俺の調査では主力は四人、そのうち三人は誘拐され精
神操作系のロストログアが埋め込まれた被害者だ。

そいつらは魔法で気絶させれば問題なくロストログアを摘出、破
壊できる」

一呼吸をおいて、全員に目を向けます。

「相手は全員特殊なレアスキル持ちだ、気を抜くな……んじゃ座標
はこれだから行ってこい」

全員が決意を表すように大きく頷き、ボクらは敵の本拠地へと向かいます。

待っていてください

アリサさん！

すずかさん！

空白期第2話『希望の光』（後書き）

～あとがき物語の館～

ソラ「今回はゲストの方はいませんね」

アインス「灰猫はこの話を書いている最中ずっと悩み続けていたな」

ソラ「どうしてもシリアスな雰囲気は書きにくいそうですね」

アインス「らしいな、今回も友人の助言で何とか完成させたらしい」

ソラ「次回からは戦闘メインのお話が続くらしいです」

アインス「頑張らねば」

二人「ではまた次回をお楽しみに」

空白期第3話『戦いの鐘・前編』（前書き）

今回は短め

ちよつと文章形式を変えてみました

感想&ご意見

あとがき出演お待ちしております

とりあえず本編をどうぞ

空白期第3話『戦いの鐘・前編』

到着してまず目にはいったのは巨大な建築物、巨大なソレはまさしく要塞のようなもの。

ソラー行は各々のデバイスを起動し、臨戦体制を整え敵地へと乗り込む。

「ボクはアリサさんとずささんの救出を最優先で動きます、皆さんはロストログアを埋め込まれた方々の救出を」

「私はソラと共に行く、なのははユーノと、フェイトはアルフと、シグナムはヴィータとだ」

全員が頷き、正面から中に入る。

そこには全身に入れ墨をした少年が胡座をかいてこちらを見ていた。

「どいてください」

「一応命令なんですか？ 無理なんだわ」

ニヤリと笑う少年の周りから黒い靄が現れる。

全員が警戒している中、シグナムとヴィータが前にでる。

「ここは我らに任せて貰おう」

「ベルカの騎士が二人がかりじゃ負けるわけねえかな」

二人はそれぞれ左右に飛び出して少年を攪乱し始める。

「のわっ！？ よりにもよってベルカの使い手かよ！？」

出来た隙に乗じて残りの六人は更に奥へと進む。

二つ目の部屋にもまた別の少年がいた、銀髪で手には日本刀のようなデバイスが握られていた。

「……セレス、トランザムシステム起動……」

【トランザムシステム起動します】

少年が呟くと共に、赤い光が少年を包み、魔力が爆発的に増す。すかさず少年は残像が残る程の速度で迫る。

「バルディツシュ！」

【ソニックムーブ】

しかし、そこに高速で入り込んだフェイトが少年と切り結ぶ。

「喰らいな！」

更にアルフが少年を殴り飛ばし、道を開く。

そして、出来た道を四人は走り抜けた。

次の部屋に入った瞬間、今度は無数の武器が上空から降り注ぐ！

「デイベインバスター！」

「サークルプロテクション！」

しかし、なのはのデイベインバスターで直線上の剣は薙ぎ払われ、撃ち漏らしはユーノの張ったプロテクションに防ぎきった。

「雑兵ごときが俺の攻撃を防いだだと？」

「ソラ君！」

ソラは頷き、さらに先へと進む。
そして、最奥の部屋に入った。

S i d e シグナム&ヴィータ組

「動きを止める！ 【無限の呪い（ボトムレスカース）】」

入れ墨の少年が叫ぶと、彼を中心に黒い靄がうねりシグナムとヴィータを狙いうごめく。

だが、ベルカの騎士たる二人はソレを難無く回避し、隙を伺う。

「ちい、ミッド式の奴らなら一方的にやれたのによお！！ カース
シャドウ！」

黒い靄は形を変え、二体の人形へと姿を変化させる、それぞれが
シグナムとヴィータへと向かう。

「紫電一閃！」

「ラケーテンシュラク！」

「ちいっ！！」

が、すぐに人形は切り裂かれ砕かれ二人は一気に距離を詰める。

「はあああっ！」

「カースストリーム！」

シグナムの一撃が当たろうかとした瞬間、黒い靄が渦を巻き、シ
グナムは吹き飛ばされる。 だが！

「ギガントオ！」

「ゲッ!？」

ヴィータは離れた位置からギガントフォームへと姿を変えたグラ
ーファイゼンを振りかぶっていた。

「シュラアアアアク！」

「ブベラバ!？」

景気よく吹き飛ばされた入れ墨の少年は、壁に減り込んで気絶し
ていた。

ソレと同時に彼の中から黒く光る球体が吐き出された。

「これがライドウの言っていたロストロギアか……」

吹き飛ばされていたシグナムがソレに近づき、ソレを破壊する。

「こっちはこれで終わりか……」

「一先ずコイツを外に出しておくか」

しかし、その瞬間隔壁が出入口を閉ざし、完全に密室になる。

「厄介な……」

「ここの壁ってかなり厚いよな？ 脱出は難しくねえか？」

実際、隔壁や壁などは厚さが5メートルと厚い、二人の攻撃では
周りまで被害が出てしまう。

「他も似たような状況だろうな……」

「ソラなら大丈夫だろ、リインもいるんだしさ」

二人はその場に座り様子を見ることにした。

Side フェイト&アルフ組

戦闘は目にも留まらぬ速さで展開されていた。

ソニックフォームへと姿を変えたフェイトと銀髪の少年が高速で切り結んでいた。

「バルディッシュ！」

【プラズマランサー】

「セレス……」

【スピリットシューター】

二人の攻撃がぶつかり合い視界を悪くする、それを少年は後方に下がる。

フェイトも素早く後方に下がり、少年を見る。

「（光が見えない……この子は操られているんだ……）……アルフ、少しお願い」

「あいよ！ リングバインド！」

「……！？」

少年は突然現れたバインドに少年は足掻く。

「バルディッシュ、ザンバーモード、行ける？」

【了解しました、ザンバーモード！】

バルディッシュが可変し、ザンバーモードへと姿を変える。

「雷光一閃！ プラズマザンバアアアア」

バルディッシュがカートリッジを排出し、フェイトの周りにスフィアを生み出す。

「ブレイカアアアア！」

撃ち放たれた砲撃は少年を飲み込み、彼から吐き出された黒い球体もそれに飲み込まれ消滅させた。

空白期第3話『戦いの鐘・前編』（後書き）

（あとがき物語の館）

ソラ「とりあえず前半は終わりましたね」

アインス「ふむ、我らの戦いは次回か……」

ソラ「そうだね、そういえばアインスの変わった姿をまだ説明して
ませんでしたね」

アインス「そうだったな、私は多少幼くなっではいるが体型は変わ
らない」

ソラ「プロポーションはそのままですね」

シンジ「ちみっちゃいのに胸デケエもんな」

ソラ「シンジさん!？」

アインス「どうしてココに？」

シンジ「感想で送られてきたMSの改造が終わったからな、届けに
きたんだよ」

外に置かれている元M1アストレイが改造され、背中には巨大なウ
イングが取り付けられており、さらに腕には小さい盾が取り付けら
れていた

ソラ「うわぁ」

アインス「コックピットも小さくなってるな」

シンジ「んじゃ俺は帰る」

颯爽と退散

ソラ「えっと、次回もお楽しみに？」

アインス「ああ、また次回」

空白期第4話『戦いの鐘・後編』（前書き）

またもや更新が遅れてしまいました、すみません

今回ちょっとオリジナル設定がいくつか出てきます

質問なども受け付けていますので

感想&出演依頼もお待ちしております

では本編をどうぞ

空白期第4話『戦いの鐘・後編』

Side なのは&ユーノ組

「ほらほらどうした!？」

「くうっ!」

膨大な物量で降り注ぐ武器の大群、それをユーノは一人で防いでいた。

ユーノは結界魔導師である、攻撃手段は皆無に等しい。

そしてなのはは砲撃魔導師である、強力な魔法を使えはするが、相手はミドルレンジを完全に支配する物量戦闘をする、なのはのチャージタイムを無視できる物量はユーノがいなければすぐに敗北していただろう。

「ユーノ君……」

「なのはは一撃に賭けて! それまでは僕が君を守るから!」

必死にプロテクションを維持するユーノ、しかし、相手がその程度で終わるわけがない。

「堕ちろ……」

「えっ……!？」

突然プロテクションが碎かれ武器の大群がユーノではなく後ろに控えていたのはに向かう。

「あ……」

突然のプロテクションの消滅になのは反応出来ずに固まっていた。

【ラウンドシールド】

しかし、レイジングハートの咄嗟の判断で直撃はさけられる。

「クツクツクツ……これで終わりだ」

少女は剣を一つつかみ取り、なのはに向けて投げる。

剣の名前は『れいけん・まじん霊剣・魔刃』、強力なバリアブレイク能力に加え、

刀身に触れた魔力を吸収する力もある。

それは吸い込まれる様になのはに向かう、レイジングハートも行動を起こせずあと数メートルという所で間に影が割り込む。

「かはっ!？」

割り込んだのはユーノだった。

鮮血が舞い上がり。

ドサリと、ユーノが崩れ落ちた。

S i d e ユーノ

熱い……。

冷たい……。

苦しい……。

痛い……。

倒れた僕は、身体から急速に何かが失われていく。
走馬灯と言っもの僕は見えていた。

スクライアに拾われ過ぎた日々、
なのはと初めて出会ってからの日々、
ソラと出会ってからの日々。

僕、は

……シヌ……

のかな？

声が聞こえる、なのはの声だ。

頬に何かが落ちてきた、なのはの涙だ。

「ユーノ君！ ユーノ君！！」

泣きながら僕を覗きこむのは、でも、僕の視界は段々暗くなってきた。

「安心しろ道化よ、すぐにその女もそちらに送ってやるからな」

なのはを？

それはダメだ。

なのはを守らないと。

——僕の大好きなのはを、助けなきゃ！

それは、奇跡だろう。

ユーノ・スクライアは間違いなく普通の少年だ。

たしかに、緻密な術式展開と探索系の魔法において類い稀なる才能を持っている。

だが、彼はあくまで結界魔導師である、だから戦闘では補助専門である。

そんなユーノが胸を剣で貫かれたまま立ち上がる。

目には光があり、出血も先程と比べだいぶ収まっていた。

それは治っているのではなく、単純に血が少なくなっただけだが。そんな満身創痍の状態でユーノはちらつとなのはを見る。

『なのは……全力でディバインバスター……行けるよね？』

『ユー……ノ……君？』

『大丈夫だよ……よくわからないけどそう思うんだ』

ユーノを貫いた剣に触れると、剣はバラバラになり消え去る。

剣は上手く心臓からズレていたらしく、即死ではなかったらしい。本来ならば刺さって蓋をしていたモノを除去すれば大量出血するはずが、ユーノからは血は吹き出さなかった。

『何！？ 貴様どうやってその剣を消した！！』

『わからないよ……、でも、これで負けないと思うよ』

魔力がほぼ枯渇してしまっているはずのユーノ、虚ろな目ではあったが、自分の足で立ち大量の本がユーノの周りに出現し、それが

螺旋を描きながら滞空している。

「馬鹿な……」
アンリミテッドライブラリー【無限魔導図書館】だと!？」

アンリミテッドライブラリー【無限魔導図書館】とは、一種の希少技能ではあるが、今まで発現した希少技能持ちは少なく、詳しい能力は解明されていない。
しかし、魔力の枯渇しているはずのユーノがソレを使えるはずがないのだ。

「……『呪縛の辞典』、捕らえよ」

しかし、現にユーノはソレを使っている。

「ぐつ、な、何故だ!？ 魔力なぞ貴様には残っていないはずだ!」
「……」

金の少女は叫ぶがしかし、ユーノは答えない、いや、答えられない。
い。

血を流しすぎて今にも倒れそうになっているのだ。

「エクセリオンバスター……」
【エクセリオンバスター】
「ブレイクシュウウト!!」

そして、その間にチャージを終えたなのはエクセリオンバスターによって、金の少女は気絶し、ロストログアも同じく消滅した。

Side ソラ&リインフォース・アインス組

シンジ能力でアリサとすずかの二人を護っている事を知っている、故に若干の緊張はあるものの万全の状態ドアをくぐる。

そこには一人の男が立っていた、髪は乱雑に切られボサボサ、雰囲気には言いようも知れないモノが纏わり付き実力では上位の二人をして引いてしまいほどだった。

「来たか、【豊饒の神子】ほうじょうのかみに【夜天の融合騎】」

「二人を返して貰いますよ」

ナイトを向け、睨みつけるソラ。

アインスも男を睨みながら周りを警戒している。

「ククク……、唯一【全知全能の神王】の支配を受けぬ神子の子孫よ……おちつけ」

振り返る男の目には狂気が渦巻き、口は歪に笑みを浮かべ両手を広げる。

そして、無言で指差す場所には一体の石像の前に寝かされたアリサとすずかがいた。

二人は眠ったままで、光の繭のようなもので護られていた。

「アレにはまだ手出しはしていない、いや、出来ないのだよ……あの憎たらしい研究者のせいであ」

くつくつと笑う男はしかし、虚空を見つめさらにその笑みを深くする。

「だが、どうやら我が娘が上手くやってくれたらしいな」

ニヤリと笑う男の言葉と共に二人を護っていた光の繭が霧散した。

Side 八神家

はやては祈るように両手を胸の高さで握り、必死に堪えていた。
シンジの事前調査であの人数ならば問題なく解決できるものであれ、大好きなソラが戦場に出ているにも関わらず自分は家で待つことしかできない。

「嬢ちゃん、シケタ面してるなって、大丈夫だよ」

頭を撫でて庭に出るシンジ、そして上を向き空を眺めている。

その背後の空間が歪み、現れたのはソラを不意打ちしたあの少女だった、あの時と同じく、気配も何も無く強烈な拳をシンジの頭部に打ち込む。

「がつ!?!」

一撃の下に、シンジは倒れ気絶した。

極度の睡眠不足、過労、その二つも合わさり簡単に落ちてしまったのだ。

Side ソラ&リインフォース・アインス組

空間が歪み、あの少女が現れた。

「さて、私は解放の儀式を行う……イヴ、あの二人を消しなさい」
「はい、父上」

構えるイヴ、その構えは空手のようなもの。

「アインス！」

「はい」

「ユニゾン・イン！！」

ソラはリインとユニゾンし、ナイトを肩に担ぐように構える。

「はあああ！」

まず動いたのはソラ、動かなければ相手の攻撃を読むのが難しい、故に攻めなければ致命的な攻撃を加えられる。

「……………」

しかし、イヴは気にした様子はなく、淡々と攻撃を避け拳を放つ。

「っ？」

「っう」

しかし、イヴの攻撃は大した効果なく堪え切られる。

「申し訳ありませんが……決める！」

『シュヴァルツェ・ヴィルクング』

拳に纏った暗黒効果で打撃攻撃力を上げ、空いている左手でまずは距離を多少稼ぐ。

「『神罰・怒号烈風!』」

ユニゾンの影響で強力になった神罰・怒号烈風で一氣にバランスを奪う。

「『神罰・轟天雷鳴!』」

さらに、ナイトに纏わせた神罰・轟天雷鳴を尻ぐように放ちイヴに当てた。

「うあ……」

強力な電撃にイヴは意識を手放し気絶した。

「終わりだ! アリサさんとすずかさんを返せ!」

「ククク……イヴを倒せた事を褒めてやろう、だが、ちと遅かったな?」

瞬間、アリサとすずかから光が立ち上り、それぞれから騎士風の影が現れる。

「紹介しよう、かつてエルベンラルトと呼ばれたアルハザードと並ぶ超古代文明の最強兵器、アポロンとアルテミスだ」

灼熱の騎士【アポロン】、月光の騎士【アルテミス】。
かつて最強と謳われた二つの超兵器が目覚めた。

空白期第4話『戦いの鐘・後編』（後書き）

くあとがき物語の館く

ソラ「うゆ……」

アインス「困りました、何故こうなったのだ？」

レン「私は次元の壁を越えてきた……わ……」

窓から差し込む日の下で丸くなって眠っている姿にレンが固まる

リボ「お邪魔するよ」

ライガ「おや？ ソラ寝てしまってますね」

ラクサ『いらつしゃいませ、今回のゲストは出演二回目、【魔法少女リリカルなのはGoing My Way】より、レン様、リボ様、ライガ様です』

ソラ「ん……おはようございますっ」

レン「か・わ・い・いっ」

リボ「あゝ、反動かねえ」

ライガ「かなり我慢してましたからね」

ソラ「あ、そうだリボさん？」

一瞬、足に力を含め全員の視界から消えるソラ

リボー「よっ！」

それに動揺することなく死角からの攻撃に対処し、ソラにデコピンする

ソラ「あいた」

ライガ「驚いた、まさかたった10歳で死角取りをするなんて……」

レン「こらあ！ ソラ君に攻撃するなあ！」

リボー「俺が悪いのかよ!?」

ソラ「いえ、ボクが悪いんです、すみませんでしたリボーさん」

リボー「いや、別に俺はいいけどよ？ しかし、いつの間にあんな動きできるようになったんだ？」

アインス「対人戦闘技巧の強化中にできるようになっていましたね」

ライガ「流石天才……ですか」

レン「かわいいは最強なのよ！ あ、言い忘れてたけど私は会員番号No.2にして副会長よ！」

アインス「承認しました」

ラクサ『お時間です、次回カンペをどうぞ』

リボー「よっし

現れた二体の超兵器の猛威がソラに迫る」

ライガ「二つの古代の力はソラを追い詰めていく」

レン「強力な力の前に成す術なく血を流す……」

アインス「されど、希望の光は輝いている」

ソラ「次回魔法少年の物語空白期第5話『太陽と月VS大天使』へ」

五人「レディー……ゴー！」

アインス「レン、これが集めておいた写真と、ソラ人形ストラップだ」

レン「はぁ」／／／

シグマ様、出演依頼ありがとうございました！

空白期第5話『太陽と月VS大天使』（前書き）

また短いです……

とりあえずこの事件は終了します。

あと一話を挟み、一気に年数が飛びます

STSはまだですよ？

では、本編をどうぞ！

空白期第5話『太陽と月VS大天使』

それは圧倒的な存在感と共にそこに立っていた、2メートル弱の二体の騎士。

失われし古代文明エルベンラルト、神秘と科学の融合によって繁栄し、かつてはアルハザードと肩を並べる技術力をもった世界の魔導兵器。

「敵を破壊しろ！ アポロン、アルテミス！」

男の声に反応し、二体の騎士の目が光り、剣を抜く。
アポロンが抜いた剣は深紅に染まり、内から滲み出る魔力はそれだけでソラの魔力量に迫る程。

アルテミスが抜いた剣は黄金に輝き、内から滲み出る魔力はアポロンのそれと同等だ。

「くっ……」

魔力だけで全てが決まるわけではないが、二体から放たれるその気迫は間違いなく強者の放つソレである。

『今のボクでは勝機は薄いですね……、アインスには何か案はありますか？』

『そうだな、フルドライブでならあるいは……』

ナイトのフルドライブの形態は『二刀片刃剣』。

しかし、未だその重量の問題から上手く立ち回れないという問題を抱えている。

「やらないよりはマシでしょう、ナイト……フルドライブ！」
【了解、フルドライブ・イグニッション！】

大剣だったナイトが分裂し二本の剣へと姿を変える、両方とも長さは変わらず150cm、重さは半分だがやはり重い事には変わらない。

「二刀大剣、デュアルモード！」

睨みながら間合いを計るソラ、男はそれを愉快げに眺めながら、椅子に座り観戦している。

「『エンゼルフェザーブリッド……レディ！』」

エンゼルシエルの上位版、エンゼルフェザーブリッドを展開する、羽を模したそれは一枚一枚に氷結術式を組み込んだ強力な『封印魔法』である。

「『ゴー！』」

撃ち放たれた数は20、全て誘導制御型である。
着弾と共に白煙を巻き起こし、氷結術式が発動する。

しかし。

「無駄だよ、太陽の巫女より解放された灼熱の騎士【アポロン】は強力な炎を操る、人が扱える氷結魔法程度で封印できるはずがなからっ！」

狂ったように笑う男、静かに歩み寄る騎士達、そして。

——ザン！

高速で振るわれた二つ剣がソラを切り付けた。

噴き出す血、BJなど無いように切り払われたソラは宙を舞う。

S i d e
ソラ

痛い、まるで焼けているみたいだ。

アインスは今の一撃で意識を失いかけている。

浮遊感、 ああ……飛ばされたみたいですね。

——ザザ……

ノイズが走る、ボクの中に知りもしない『何か』が入ってくる。

『■■■■、いや……豊饒の神子よ、貴女は私に意見してばかりだな』

『僭越ながら言わせていただきます、あの兵器は危険です、今なら私の権利で停止できます』

『ならん、アルハザードが攻めて来ている今、アレを停止すれば我が国が滅ぶ』

『しかし！』

『付け上がるな■ ■！ いくら貴様が私と姉妹なれど意見するこ
とまかりならん！ 誰かあるか！』

『ここに……』

『武の神子か……、命令だ……豊饒の神子を殺せ』

『……御意』

『姉上！？』

『貴様はこのエルベンラルトには邪魔だ！ 消えろ！』

——ザザ……

今更……、何を？
『権利』って？

S i d e o u t

——ドサッ……

地面にたたき付けられるソラ、男はニヤリと笑い勝利を確信した。

だが、ソラは死んでいなかった。

「『豊饒の神子』の能力リミッター解放……」

『ソ、ソラ！？』

「ナイト、フルドライブ維持」

【了解】

空間に激震が走る！

ソラの魔力が通常値を遥かに上回る数値をたたき出す！

「ま、まさか……覚醒するだ！？」

「アインス、大丈夫だね？」

『私は問題ない……しかし、ソラは……』

「なら、行きましょう」

ソラの足元に『森羅万象・世界縮小図』が展開しそこから二条の光が騎士に接触、動きを止める。

「なつ、ば、馬鹿な!？」

驚愕し、男が後ずさる。

「さて……あろうことか『神王』をお模倣しおとしめた狂人よ、覚悟はできたか？」

一步、ソラが歩みを進めれば男も下がる。

『イヴ』は実は古代文明エルベンラルトの支配者『神王』のクローンである。

ロストログアに安置されていた骸から採取したサンプルから復活させたのである。

「『神罰……!?!』」

普段なら展開されるはずのミッド式ではなく、森羅万象・世界縮小図を展開したまま両手のナイトを大上段で振り上げる。

「『森羅万象・大天斬剣!?!』」

二つの剣から放たれた巨大な光の斬撃が男を飲み込み、戦いはこ

ここに終了した。

「アリサさん、すずかさん」

「ソラ……？」

「ソラ君……？」

「迎えにきたよ、さあ、帰ろ？」

「……うん！」

空白期第5話『太陽と月VS大天使』（後書き）

（あとがき物語の番外編）

エルベンラルトの神子解説

ソラ「では、ちょっと説明したいと思います」

神王―エルベンラルトの支配者、神子に対して命令する権利を持つ。
神子はこれに逆らえない。

豊饒の神子―神王に唯一刃向かう事ができる存在、本来は民に施しをする存在である。 生み出す者。

武の神子―エルベンラルトで最強の兵、無敗を誇り炎熱・電気・氷結・風の変換属性を自在に操る。 神王の側近。

宝玉の神子―宝物庫を管理する、エルベンラルトに存在するあらゆる武具や宝を所有する。

知識の神子―あらゆる魔導書を保管・管理する、情報収集や解析を主とする。

騎士の神子―戦場の最前線に立ち、部隊を動かす。 戦闘のプロフェッショナル。

収魔の神子―エルベンラルトに降り懸かるあらゆる『魔』をその身に封じる、破魔の力を有する。

巫女―様々な兵器を呼び出す為の鍵としての役割を持つ、召喚士と似ている。

ソラ「ボクは豊饒の神子、イヴさんは神王、他の方々はまた次回に
でと思います、ではまた次回にお会いしましょう！」

次回

魔法少年の物語

空白期第6話

『交わる道』

空白期第6話『交わる道』（前書き）

一日のユニークが初めて1000人越えました

こんな拙作ですが、読んでいる方々が楽しんでいただけているなら幸いです

では本編をどうぞ！

空白期第6話『交わる道』

今回、ソラ達の活躍があり、誘拐され操られていた全員が救出された。

主犯の男は、ソラの攻撃がトラウマになったようで白い光に異常に怯えていた、太陽の光などは特にだ。

そして、この作戦の立案者たるシンジはぶっ倒れた後しばらくして起き上がり、ふらふらと何処かに歩いて行ったらしい。

ザフィーラのが気づき搜索してすぐに見つかったが、どこか上の空だったらしい。

今回の事件では、操られていた三名はもちろん無罪となり、銀髪の少年こと神城^{かみしろ} 八雲と金髪の少女こと神能寺^{しんのうじ} 瑠華^{りゅうか}は両親が地球に住んでいるため、月村家とバニングス家により説明がなされた。

八雲の両親は元管理局員だったらしく、すんなりと理解してくれた、神能寺家は古くからエルベンラルトの伝承を受け継ぐ家系らしく、こちらすんなりといった。

そして、神王のクローンであるイヴは、最初こそ主犯の男と同罪とされたが、知性が殆ど成長しておらず、刷り込まれた男への言葉を聞く以外の自発行動をあまり見せなかったのもあり保護観察処分となった。

更正の可能性は高く、またソラの言うことをある程度聞いているので、その関係で後見人にリンディが付くことになった。

そのソラだが、【豊饒の神子】としての覚醒と共にあの傷を一瞬で再生していた。

ソラの異常な回復力はどうやら【豊饒の神子】としての能力の一部らしい。

同じく、【知識の神子】として覚醒したユーノだが、実は面白い事件があの後あった。

ソラのような異常な回復力はなかったが、それでも中々の回復力を発揮し、入院三日で意識を取り戻した。

その意識がまだハッキリしない時に、ちょうどお見舞いに来ていたなのはに抱き着いた。

お見舞いに来ていたのはなのは一人ではなく、一緒に来ていたフエイトとアルフはその光景に固まっていたらしい。

「……なのは、聞いてほしい事があるんだ……」

「な、何？ ユーノ君」

なのはを抱きしめながら、短い言葉を紡いだ。

「なのはを離したくない……僕と付き合ってくれないかな？」

「……………っ／／／」

ユーノは責任を感じて今まで切り出せなかった、出会ったその日から想い続けてきた気持ちを伝えた。

ユーノは腕を解いて、真っすぐなのはを見つめる。

なのははあまりに唐突な告白に真っ赤になって俯いたままだった。なのはもユーノが嫌いなわけではない、むしろ好きな方だろう。

今までは友達として見ていて男の子としては見ていなかった、最近も管理局に入るために色々と回っていたため、その認識は変わっていないかった。

しかし、今まさに目の前で告白したユーノの目は真剣だった、その表情を見ただけでなのはのユーノに対する認識が変わるのを感じていた。

ユーノは間違いなく美少年である、それ故に真剣な表情は今までみたどんな姿よりも勇ましく見える。

たつぷり30分、その無言の空間は続いていた、フェイトとアルフは完全に脱する機会を失い、今は部屋の隅まで下がって見守っていた。

「わ……」

なのはが紡いだ言葉で場が一気に緊張に包まれる。

真っ赤な顔のまま、なのはは顔を上げ、恥ずかしさで目を潤ませながら。

「私でよければ……お願いします／＼」

ここに一組、カップルが誕生した。

ちなみに、この一部始終を見ていたフェイトとアルフはその言葉を聞いた後、静かに部屋を後にしたらしい。

もちろん、友人にはその日の内に伝わり、高町家では約2名が殺気を漏らしていたらしい。

Side 地上本部

今日は管理局の地上本部に来ていた、短期コースで魔法学校を卒業し地上本部の重鎮、レジアス・ゲイズ少将と面会していた。

ソラは海の仕事を断り、まずは地上にて経験を積みに来ていた。はやても特別捜査官のエリートコースを選択、今はアインスと共に新しい融合騎の制作の為、教会へ向かっている。

何故ソラがレジアスと面会しているかといえば、ソラの魔導師ランクに関係がある。

ソラの魔導師ランクはSS+、管理局内でも十指に入るランクだ。

レジアスの本音でいえば、幼くありさらにレアスキル持ちのソラは好かない存在だ、しかも後見人は海の人間であり裏を疑うには十分だった。

「ソラ・フォード二等空尉……だったか？」

「はい、歳は今年で11になります」

眉間にシワを寄せながらソラを観察するレジアス、今まで数多くの人間を見てきたレジアスだからこそ分かる。

この少年にはとてつもなく深い何かがある、魔導師云々ではなく人間として、だがだからこそ危険でもある、とレジアスは直感していた。

「お前には陸士隊で働いてもらう、魔導師ランクはリミッターでBまで落とさせてもらうぞ」

「構いません」

「詳しくは後日連絡する、下がれ」

後にソラは着実に地上で名を上げる事となる。
それはまた別のお話。

Side 海鳴市

ソラが地上本部に行っている中、バニングス家には休みを利用しての訓練が開催されていた。

アリサとすずかが【巫女】の力を自在に操れるようにするため特訓している、瑠華とイヴに付き添ってはそれにもらっている。

神子の中でも【宝玉】と【神王】は【巫女】の扱う【兵器】に干

渉できる、さらにその干渉を遮断したり強制停止する事ができるのが【豊饒】である。

そもそも、何故ソラが管理局入りしなければならないかはこの二人が関係するのだ。

ロストロギア指定されかねない力を内包する二人や、高ランク魔導師の素質を持った瑠華や八雲、イヴを管理局がみすみす逃すわけがない、リンディやシンジが裏で工作を試みたが、何処から嗅ぎ付けたか分からないが上層部が騒ぎ立てていた。

そんな時に動いたのがソラである。

皆の自由を掴むため、管理局入りし、一時的に注目を集めてその間にシンジやリンディが場を整え、むやみやたらに手を出せないようにした。

しかし、それでも彼女らは利用されかねない、故に伝説の三提督に直接頼みに行ったソラは、全員をソラの個人保有戦力とし、如何なる場合でも自分を通さなければならぬようにした。

魔導師ランクSS+というのも合わせ、三人は快く合意した。

ちなみに、入れ墨の少年ことアンラ・マンユは既に管理局で三提督の臨時護衛に抜擢された。

【収魔の神子】たるアンラは、マギリングキャンセラー【魔法無効化体質】のせいで通常の魔法を使用できない、そのかわり、害のある魔法を無効化することができるとだ。

しかし、ベルカ式には滅法弱いので、騎士クラスが来た場合は涙目である。

——閑話休題

つまりは、二人も中学を卒業する頃には管理局入りとなるのだ。

二人の両親はもちろん理不尽さを感じていたが、ソラや他の方々が全力を投じての結果という事で何とか納得してもらえた。

とりあえずの二人の目標は完全制御と部分解放である。

空白期第6話『交わる道』（後書き）

くあとがき物語の館く

今日はお休みです。

次回は短編の詰め合わせです

リクエストなどありましたら感想にて受け付けております

空白期第7話『小話詰め合わせ』（前書き）

短い＆淡泊です

最近スランプ気味ですが頑張って書きたいと思います

では本編をドゾ

（ノ><）ノ

空白期第7話『小話詰め合わせ』

<なのは・ユーノの初デート>

その日、久しぶりに休暇を合わせてユーノとなのはが海鳴でデートをしていた。

その姿は初々しく、手を繋げているだけなのに、二人とも真っ赤だった。

「な、なのは、あれって」

「……お兄ちゃんだ」

周りが引くほどの形相で走ってくる恭也、ユーノの前に立ち一言。

「なのはと付き合いたかったら俺との死合いに勝って貰おう……」

ユーノが勝てるのか？

<地上のアイドル？>

「またあの子がやったって？」

「ああ、これで15件だな」

地上本部武装隊で若い魔導師達が、最近入局した少年の話をしていた。

「しかもリミッターで俺らと同じBまで落としてるんだよなあ」

「マジかよ!? 5・5ランクダウンじゃねえか!」

「礼儀正しいし、見た目も可愛い……男だな」

「んで、無償でデバイスを直してくれるし……彼女持ちらしいぞ?」

二人同時にため息をついて、一言呟く。

「チートだよ……」

<あの人は今>

「俺だ……、例の件はどうだ?」

『魔力光は深紅、魔法陣は円形の中に三角だろ? デバイスはなんとか出来たけどよ?』

通信機で連絡しあう男達。

「ありがたい……」

『おう、ただまだ試作だ、そっちで何回か試しに使ってみてくれ』

<それは試合ではなく死合い>

「うおおおおお!!」

「つああああ!?!」

【神速】で何度もユーノを吹き飛ばし、二本の木刀でボコボコにする恭也。

「ふん……他愛のな……」

「お兄ちゃん……少し……頭冷やそうか？」

——魔王降臨。

「アクセルシューター……」

「ま、待てなのは！」

「シュートッ！」

「ぐあああああー!?」

アクセルシューターでボコボコになる恭也。
自業自得である。

<ソラの現場>

「投降はしませんか？」
「るせえ！」

笑顔で投降を進めるソラに対して、違法魔導師がデバイスをソラに向ける。

「よっ！」

が、縮地並の速度で後ろに回り込んだソラが、ナイトを突き付ける。

「投降しなさい」
「ば……化け物……」

<フエイトと八雲>

「プラズマランサー！」
「スピリットシューター！」

両者の魔法がぶつかり煙りが上がる。

「ソニックムーブ！」
「くっ、アクセルムーブ！」

そこから高速機動戦闘に移り、近接戦闘に切り替わる。
激しいぶつかり合いになり、二人が同時に止まる。

「私の負けだね」

「あ、危なかった」

そこから二人の雑談になり、いい雰囲気になる。
笑い会う二人は幸せそうだった。

<ツヴァイ完成！>

「おはようです、まいすたーはやて」

「おはよう、リインフォース・ツヴァイ」

「完成しましたね」

とある研究施設で、新しい融合騎二代目リインフォースが完成した。

「おねえさまも、おはようです！」

「ああ、これからよろしくな」

～あとがき物語の館～

ソラ「さて、簡潔にお送りしました今回ですが……次回はあの事件が起こります」

アインス「ここは……、灰猫が悩んでいたりするな」

シンジ「詳しくはやらねえで、簡潔にいくらしいぜ？ ソラ視点が

基本になるからな」

龍也「俺がでるな……」

ソラ「龍也さん！」

アインス「そうなのか？」

龍也「ああ、灰猫の友人が今か今かと待ちわびているからな」

ソラ「そういえば龍也さんはその友人の方のアイディアから生まれた方なんですよね」

アインス「そうだったのか……」

シンジ「しかもSTSじゃ主役級の扱いになりやがるからな、要チエツクだぜ？」

ソラ「では今日はこのあたりで、また次回にお会いしましょう！」

空白期第8話『新たなる火種』（前書き）

まず、読んでくださっている皆さんに聞きたいのですが

STSをこの『魔法少年の物語』のまま継続投稿するか
新規に別に上げるか

どちらがいいでしょうか？

ご意見お待ちしております

今回はあとかきはありません

空白期第8話『新たなる火種』

その日、ソラは久しぶりの休暇を取り、アリサとすずかとのデートを楽しんでいた。

はやてとはミッドチルダで何度も会っているが、アリサやすずかは地球にいるため中々時間が取れなかったのだ。

今回は長距離転送装置（シンジの所有物）の転送ポートを地球のシンジの家に置く許可が下り、数時間で行き来できるようになったのを利用した。

アリサやすずかも大分【鍵】の力の制御が上手くなり、最近では魔力の生成までできるようになっていた。

本来アリサやすずかにはリンカーコアが存在しないため魔法を使用することはできないが、【鍵】の力を使う度にリンカーコアの種とも言える器官が覚醒してゆき、今現在はBランクまでその魔力を高めてきた。

しかし、後天的リンカーコアの発生のせいか、普通の魔法は扱えず成長も既に止まっている。

使える魔法はアポロンとアルテミスに基から組み込まれているエルベナルトの魔法のみになっている。

両者とも種類は同じで、魔力斬撃（飛ばすこともできる）・シールドとファイールド防御・砲撃（二人の魔力では日に一桁が限界）の三つ、だが、どれも実戦向きの効率的な魔法の為二人は満足している。

「私達もソラと一緒にいる時間を長くしたいわね」

「ほんとだよ、はやてちゃんとはあっちでもよく会ってるみたいだし」

「二人にも来て欲しいんだけどね、まだ向こうで準備が整ってないから」

ソラは苦笑しながら二人と繋いでいる手に少し力を籠める、それに答えるように二人も握り返して。

「分かってるわよ！ でもやっぱり寂しいじゃない……恋人に会えないのは……」

「ほんと、そうだよ」

実際、二人に会う頻度は週に一回くらい。

陸は毎日何かしら起こっている中で中々休みは取れない、こついう休暇は大抵アインスが代わりに出勤している。

実際ソラは小学校にはあまり顔を出していない、ほとんどをミッドで過ごし地盤固めをしている。

強い力に対して、組織がどう動くかなどソラは教えられなくとも知っている。

排除か、取り込むか、である。

管理局は肥大化した組織である、大きくこれといった敵対組織もない。

さらに、管理局は強い力の持ち主を執拗に求める、実際ヴォルケンリッターを無理にでも管理局に入れざるをえなくしたり、温情を見せ管理局を美化して見せたりだ。

本来ならば、ソラは管理局に入る予定はなかった、しかし、アインスやヴォルケンリッター、イヴなどの事もあり、動く事を決意したのだ。

「これからなるべく帰るようにするね……、でもこれからを考えればやっぱり……ね」

ソラとしてはアリサ・すずか・はやてと静かに暮らしていたい。しかし、それはあらゆる意味で難しい。

特別な力を持つ者は必ず同じだけの何かを引き寄せる。

それは運命であり、宿命であり、変えられない道でもある。

「なのはも怪我したみたいだし……ソラは大丈夫なの？」

「ボクは大丈夫だよ、ユーノさんがいつ倒れてしまうか心配だけど」「つきつきりらしいもんね、なのはちゃんの意識は戻らないみたいだし……」

ユーノは自身の【無限魔導図書館】を使用して、ほぼ一日中看病している、現代のミッドの医療技術も高いが、ユーノの【無限魔導図書館】はそれ以上の効果をもたらしている。

ただ、再び魔導師として復帰出来るかはなのは次第らしい。

——キイイイイ……

「っ!？」

突然の悪寒に辺りを見渡すソラ、アリサやすずかもそれを感じ取ったらしく、同じように周りを見渡す。

「アリサさん、すずかさんは家に向かってください……」

「でも!」

「私達だって何かできるかもしれないよ?」

ソラは首を横に振り、その言葉を否定する。

「相手はかなりの強さを持っています、まだ二人には荷が重過ぎます」

そう言つて、ソラは走り出す。

二人はそれを見送ることしかできなかった。

全速力で走つてたどり着いた場所は悲惨なものだった。

森の深い場所にも関わらずそこだけが荒れ地と化していた。

その中央に佇む一人の青年から放たれる殺気で、辺りの空気が淀んでいた。

「貴様が……たのか」

「え？ 龍也……さん？」

「貴様が我が妹をさらつたのか!!」

大地を破壊し、疾風の如く迫った龍也。

そのスピードはフェイトですら認識できぬであろうほど、残像すら残さぬ一瞬でソラに迫りその拳を振るう。

——バギッ

「ぐつつぁ！」

反射的に防ごうと出した腕は、その速度も相まって簡単にソラの腕を折る。

もしこれが普通の人ならば腕を吹き飛ばされていただろう。
ソラの尋常ならざる肉体のポテンシャルのおかげで折れただけに留まったのだ。

しかし、龍也の追撃は止まらない。
蹴り、殴り、単調ではあるが重い攻撃が繰り返される。

【ホークムーブ！】

しかし、一瞬の間にナイトが発動した高速移動魔法で距離をとる
ソラ、しかし、度重なる攻撃で全身血まみれになり、どう見ても重傷だった。

「はぁ……はぁ……つつ……ぐ……ぁ」

肩で息をしながら龍也を見つめるソラ、龍也の目には光がなく、完全に暴走しているのが分かった。

——カリ……カリ……

そんな龍也の右腕に雷が纏われる。

先程までタメの動作すらしなかった龍也がここにきてタメの体勢をとった、つまりは大技がくるという事だ。

——バキッ！

しかし、それを止めたのは意外や意外、それを放とうとしていた本人だった。

左で自分を殴る、すると今まで光のなかった目に光が戻り、右腕の溜まっていた雷を霧散させる。

「……すまん……」

一言呟き早々にその場を立ち去る龍也、その背中には深い怒りが見てとれた。

空白期第9話『未来へ向けて』

病院に担ぎ込まれたソラの傷はかなり酷いものだった。

全身打撲に加え右腕の骨折、電流による火傷も何十箇所もあった、普通なら死んでいても不思議ではない怪我だが、ソラはやはり驚異的な回復力を発揮、二日間で完治した、ソラはすぐに退院しアリサの家に来ていた。

「じゃあソラ、本気で行くわよ？」

「ソラ君、お手柔らかにね」

そして、今日は地上からも休暇を貰っているため、二人の実力を計ることになった。

ちなみに、この模擬戦で二人の管理局入りの時期を変更するか否かが決まる、ちなみにアリサとすずかの希望は今すぐである。

リミッターをかけているソラだが、それでも使用できる魔力量は二人と同じほど、ただ、ナイトにもリミッターがかかっているので大剣型しか使えないのはソラにとっては不安だったりする。

ナイトの大剣型は重く、本来は『プラスパワー』や『ホークムーブ』を使用しながら相手に重い一撃を与える形態である、しかし、そんな大威力を二人に放てるわけがない。

本来なら2ndの長剣型か、3rdの杖型がいいが、二つともリミッターのせいで使用不可能だ。

「ナイト、モードリリース」

【デバイスモードに移行します、BJ維持・魔法サポートを主体にします】

故に選択したのは徒手空拳、加減もでき、尚且つ慣れた戦闘スタ

イルでもある。

「では、始めるよ……」

構えをとるソラ、最近では地球の格闘技も習得してきたため、構えは自然体で左手だけを前に出すだけ。

前のような守りの構えではなく、攻防両立の構えである。

素人目には隙だらけに見えるだろうが、左手は相手との距離を計り、相手側からは距離を誤認させる。

右手は決め手にするも守り手にするもできる、体を緊張させない自然体は回避に優れ、行動を起こすにも最善の重心である。

「アポロン！」

「アルテミス！」

二人がキーワードを紡ぎその手に剣をとる、服はドレス風の甲冑となり足元には【巫女】特有の魔法陣が展開する、二重円に剣の模様、エルベンラルトの魔法陣である。

「炎龍剣！」
えんりゅうけん

ひょうりゅうけん

「氷龍剣！」

剣に魔力を込め左右から迫るアリサとすずか、甲冑の効果で二人は普段よりかなり速い、さすがにシグナムやフェイトには及ばないが、なのはやヴィータにならスピードは勝る。

「ふっ！」

鋭い剣閃をソラは素早く身体を回転させ、魔力を纏った手で剣を弾く。

「まだまだあ！」

アリサは弾かれた事でバランスを崩すが、魔力を解放し爆炎をソラに向けて放つ。

「はっ！」

すずかは柔軟さを生かし、直ぐさま体勢を整え氷結属性を伴った剣を地面に突き刺し、ソラの足を止める。

「っ！ ナイト！」

【プロテクション】

アリサの攻撃をプロテクションで防ぎ、凍りついた足に魔力を集め炎熱変換をして溶かし、微笑む。

「ふふ……うん、二人とも強くなりましたね」

「まだまだよ、ソラだってまだ本気じゃないしね」

「そうだよ、まだ私達じゃついてはいけないね」

ソラは苦笑しながら首を振る。

「二人は十分な実力を持つてるよ、これなら安心だね」

二人は一瞬顔を見合わせ、嬉しさのあまり抱き合っていた。

実際二人の動きは陸士と比べても見劣りしない実力だ、二人は三ヶ月後に魔導師試験を受ける事になった。

Side ミッドチルダ

この日、八雲とフェイトは二人で訓練をしていた。

執務官試験に落ちてしまったフェイトを元気づけるために八雲が陸の訓練場を借りたのだ。

本来なら八雲は管理局員ではないためこのような事はできない、そこはソラの名前を借りた訳だ。

ソラは陸では「エースオブストライカー」として有名だ、助けられた人は多く、この訓練場を使用するにあたっても快く承諾された、代償はソラにケーキを奢ることになったくらいか。

「はあはあはあ……」

「フェイト、大丈夫か？」

「うん……、ごめんね付き合わせちゃって」

模擬戦を何度か繰り返したせいか、フェイトの息はあがっていた。対して八雲は体力はまだまだ余裕はあるが、魔力の方は心許なくなっていた。

「うーん、やっぱり俺は魔力が問題だな……、レアスキルを発動しまえばフェイトに遅れはとらないんだがなあ」

「でもすごいよ、スピードでは互角だし、一撃の重さはヤクモの方が上だから」

クールダウンをしながら戦闘について語り合う二人、共通する戦闘スタイルを持つ二人はこう言った話ばかりしている。

「さあて、クールダウン終わったらデートしないか？」

「で、でーとっ！？／／／」

八雲の突然の提案に素っ頓狂な声を上げるフェイト、八雲はニヤニヤしながらも内心ドキドキである。

フェイトは管理局内でも人気が高く、狙っている男も多い。

八雲は戦闘で見せる凛々しさや、普段の可愛い姿に惹かれて
いるのだ。

「だ、だめか？」

肩を落として気を落とす八雲、フェイトはふるふると首を横に振りながら。

「だ、ダメじゃないよ、ただ驚いただけ」

「んじゃOKなのか!？」

「う、うん／＼」

甘い空気を醸し出す。

ちなみに、それを目撃した男性局員は本気で泣いたらしい。

空白期第9話『未来へ向けて』（後書き）

くあとがき物語の館く

ソラ「さて、本編は終わりましたて館に来ましたが……」

——ひゅー……

ソラ「誰もいませんね、アインスは今陸で頑張っていますし……」
飾ってある品々を見ながらため息をつく。

ソラ「一人は寂しいです……あ、灰猫さんからの手紙だ」

少年読み中

ソラ「えっと、灰猫さんからのお知らせです、次回が終わった後にストライカーズへ移るそうです、そこで、その話を別に新規投稿するか、このまま投稿するか聞きたいそうです、皆さんのご意見をお待ちしております」

……………

ソラ「あと、感想やあとがき出演もお待ちしております、最近はこの話が皆さんに楽しんでいただけているか不安みたいなので、では次回も楽しみに！」

空白期第10話『平和のち事件』（前書き）

これが『魔法少年の物語』最終話になります

たくさんの感想ありがとうございました！

では本編へどうぞ！

空白期第10話『平和のち事件』

Side クラナガン

首都クラナガンにて、道行く人々が思わず歩みを止める光景があった。

最近雑誌で有名になっているフェイトと、隣に立つ美少年である八雲だ。

私服姿のフェイトはどこかの令嬢のように綺麗で、八雲はずっと頬が緩んだままだ。

「まずは昼食だな」

「そうだね」

適当な店を見つけ二人はそこに入る。

「いらっしやいませ、二名様ですか？」

「はい」

入店してすぐに客のほとんどが二人を思わず見てしまっていた。

「フェイトは何にする？」

「私は……海鮮パスタかな？」

「俺はミートかな？」

注文が決まり、八雲が店員を呼ぼつと周りを見た瞬間、周りの人と目が合った。

「うおお」

思わず声を漏らす八雲、さすがにこの人数に見られるのは驚いたようだ。

「さっきの店おいしかったね」

「だなあゝ、また行こうか！」

談笑しながら歩いて行く二人、やっぱり周りは振り返ったりして
いる。

「これからどうする？ 買い物？」

「そうだね、新しい服も買いたいし」

二人はその足をクラナガン中央ショッピングモールへ向けて歩き
だした。

ショッピングモールに着いた二人はまずウィンドショッピングを
しながら、店を見て回っていた。

「ん？」

途中、いきなり歩みを止める八雲、しきりに目をこすったりして
ありえないモノをみたような表情になる。

「あれ……アリサにすずか、それにソラじゃない？」

「あいつらもデートか？」

ソラの方を見ていると、あちらも気付いたよう近づいてきた。

「八雲さんにフェイトさん、デート中？」

「ソラもみたいだな」

「……／＼／」

「フェイト、顔が真っ赤よ？」

「初々しくてかわいいね」

何故ソラ達がクラナガンにいるかといえば、アリサとさすがが試験を受けることになったため、こちらに慣れる為に許可をとりソラがつれてきたのである。

本来ならそう簡単に許可は下りないのだが、そこはミゼット提督らが計らってくれたのである。

「つかソラは両手に花だな」

「うゆ……／＼／」

苦笑しながら赤くなるソラ、周りから見れば八雲のハーレムであるため、八雲にのみ死線が集中している。

「ん？ ソラ……何か空気が変じゃねえか？」

「……ん……気配を消してる人間が何人かいますね……」

ちょうどモールの中央区画にあたるその場所で二人が周りを警戒している。

「訓練された兵士の動きですね……」

「囲まれた……か？」

ここに居るのは平日の為か客はそこまで多くない、それでもここ

にはかなりの人数がいる。

緊張感が伝わったのか、フェイト達も談笑を止め近づいてきた。

「人数は……１５人……かな？」

——ガンッ！

ソラが動こうとした瞬間、響き渡る銃声。

「動くな！ 我々は『反管理局連盟』だ！」

結局、ソラ達は動けずにいた。

相手の武装は質量兵器であるハンドガンとサブマシンガンである。
もしソラ達が動いて周りの人々に流れ弾が当たれば大事だ。

「人質はあまり多くは邪魔だ……女とガキに絞れ」

「リーダー、管理局の奴らが投降しろとか外でほざいてますが？」

「無視だ、こつちの話を聞くようになったら俺を呼べ」

周りを警戒しながら八雲は念話でソラと話していた。

『どうする？』

『……奴らをバインドで捕獲、が一番ですね』

とはいえ、周りの人間に一瞬でバインドをかけるにはソラのリミッターが邪魔になる、フェイトの方も距離を計って一つ頷く。

『私は五人くらいなら行けるよ』

『俺は……三人くらいが限界だな……』

『なら後ろの八人を拘束、その後前にいる五人をボクが拘束、残りは……』

「リーダー？ 人質一人くらい……遊んで……いいですか？」

「デメエも好きだな……好きにしま」

その声が聞こえた瞬間、辺りの気温が低下する。

原因は二人、ソラと八雲だ。

「貴様ら………動か」

小さな声なのに妙に響く声に銃を持っている男達が一斉に声を発した人物を見る。

立ち上がったのはソラだった。

「なんだとこのガ………」

「……動くな………」と、言っただが？」

「っ!？」

語気を強くした言葉に周りにいた男達は固まる、恐ろしいまでの迫力に身体が動かなくなっているのだ。

「デメエら……ちょっと地獄に堕ちてみるか？」

次いで声を発したのは八雲、言葉の端から漏れ出る怒りに男達は震える。

「「さあ、お仕置きの間だ」」

その後、ショッピングモールに突入した陸士隊の一人は語る。

「犯人達にちょっと同情しました」

空白期第10話『平和のち事件』（後書き）

今回は最新の設定と新規投降をします。

ではまた次回で楽しみに

STS設定

ソラ「さて、今回はSTSの設定ですね、ではどうぞ」

名前：ソラ・フォード

年齢：19歳

身長：132cm

階級：一等空佐

魔法：ミッド式・ベルカ式・エルベンラルト式（森羅万象・世界縮小図）

魔力：SSS

魔導師ランク：SSS（リミッター時Bランク）

デバイス：インテリジェンス・アームド複合デバイス『ナイト』

ユニゾンデバイス『リインフォース・アインス』

ソラ「と、STSではこんな感じになります、次はアインスです」

名前：リインフォース・アインス

年齢：――

身長：145cm

階級：二等空尉

魔法：ベルカ式・ミッド式

魔力：S+（リミッター時Bランク）

魔導師ランク：Sランク相当

デバイス：なし

ソラ「他の方についてはまた後日に、ではストライカーズでお会いしましょう！　ちなみにストライカーズは新規投稿されていますのでそちらをご覧ください」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4301j/>

魔法少年の物語

2010年10月9日21時05分発行